

ほそ の
細野遺跡・梨子谷遺跡
せん にち
な し だに
千日遺跡・宮上遺跡
みやのうえ

県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う
緊急発掘調査報告書

1999

岐 阜 県

財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

揖斐郡春日村は、西に伊吹山をいただく自然豊かな村で、近年では「葦草の里」としてその名を知られています。この村の遺跡は、中世城郭として小島城跡が有名ですが、以前より分布調査等によって縄文時代の遺跡もいくつか知られていました。その春日村で、平成7年度より中山間地域農村活性化総合整備事業の一環として、村内の各地域で土地改良事業や林道の整備等が行われることになりました。

このため、平成7年度春日村教育委員会によって試掘調査が行われました。この結果、岐阜県教育委員会が揖斐土地改良事業所の委託を受け、平成8年度から（財）岐阜県文化財保護センターが発掘調査を行うことになりました。春日村での本格的な発掘調査は今回が初めてのことと、春日村の歴史解明に新たな扉を開くものとなりました。

今回の発掘調査では、縄文時代早期の集石遺構や縄文土器の集中区などが検出され、縄文時代早期から後期までの土器や石器、中近世の土器などが出土しました。このように、春日村では豊かな自然の中で、縄文時代から今日に至るまで、人々が活発に生活を営んでいたことが確認できました。

今回の発掘調査報告が、単に失われる文化財の記録保存にとどまらず、春日村の文化の振興に役立つことを期待します。

最後になりましたが、発掘調査および遺物の整理・報告書の作成にあたりましては、関係諸機関各位の温かいご理解ご協力を賜り感謝申し上げます。また、現地における調査に際しましては、地元の方々の多大なるご協力を賜り厚く御礼申しあげます。

平成11年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 村木光男

例　　言

1. 本書は岐阜県揖斐郡春日村大字美東字細野に所在する細野遺跡(21405-08723)・同じく字梨子谷に所在する梨子谷遺跡(21405-08724)・同じく字千日に位置する千日遺跡(21405-08726)・大字六合字宮上に所在する宮上遺跡(21405-08730)の発掘報告書である。
2. 本調査は県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴うもので、揖斐土地改良事業所から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成8年度に実施し、早野壽人と河瀬実浩が担当し、小谷和彦・飯沼暢康・中島康夫・小野木学・増子誠・竹中一秋・堀田一浩（以上当センター調査員）・林芳樹氏（春日村教育委員会）の協力を得た。
4. 本書に記載した遺物実測は、次の者が主に行った。
土器（拓本を含む）　國井悦子　堀信子　小木曾美智　早野壽人
石器　　高島俊美
5. 遺構図・遺物実測図のトレースは次の者が主に行った。
國井悦子　堀信子　小木曾美智
6. 遺物の写真撮影は、佐藤右文氏（奈良県在住）に委託して行った。
7. 本書の執筆は、第2章第1節・第7章を藤岡比呂志が、第3章・第4章・第5章・第6章の遺物のうち石器について増子誠が、古代の土器について小野木学が、残りを早野壽人が担当した。
8. 水準測量、地形測量、空中写真測量は（株）イビソクに委託して行った。
9. 自然科学分析は、パレオ・ラボに委託して行った。
10. 発掘調査および報告書作成にあたっては次の方々からご助言、ご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）
泉拓良　森孝徳　林芳樹　林孝芳　別所秀高　山口保　広瀬太樹　古田資雄　清尾秀美
長尾きぬえ　木下哲夫　立川昭夫　矢野健一　内堀信雄　井川祥子　西村勝広　領塚正浩
大石崇史　春日村教育委員会　春日村区長会
11. 発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には、次の方々の参加・協力を得た。
広瀬房子　広瀬るり　廣瀬和子　古田多美子　新川良則　小寺貞良　駒月末子　新川ゆき子
仲野多美子　清王信定　駒月美智子　市川博　市川キクコ　市川弘子　高橋逸雄　高橋涼子
坂東豊美　新川はるを　新川王子　白川來　白川章代　四井國正　藤原佐助　藤原たみえ
藤原静江　中西美代子　藤原竹之丞　藤原幸　藤原藤七　小寺皎　森千正　所富貴子　所幸子
所サミ子　立川ふみ子　山村時江　吉田章子　佐名君子　中西はづ子　國井悦子　堀信子
市橋美栄　山口久子　原幸子　小松博子
12. 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

| | |
|-----------------|----|
| 第1章 発掘調査の経過 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 発掘調査の経緯 | 2 |
| 第2章 遺跡の環境 | 5 |
| 第1節 地形・地質環境 | 5 |
| 第2節 歴史的環境 | 9 |
| 第3章 細野遺跡の調査 | 12 |
| 第1節 調査の概要 | 12 |
| 第2節 第1地区の基本的層序 | 12 |
| 第3節 第1地区の完掘状況 | 15 |
| 第4節 第1地区的遺物 | 15 |
| 第5節 第2地区的基本的層序 | 18 |
| 第6節 第2地区的遺構と遺物 | 20 |
| 第7節 第2地区的包含層の遺物 | 24 |
| 第4章 梨子谷遺跡の調査 | 26 |
| 第1節 調査の概要 | 26 |
| 第2節 第1地区的基本的層序 | 26 |
| 第3節 第1地区的遺構と遺物 | 32 |
| 第4節 第1地区的包含層の遺物 | 44 |
| 第5節 第2地区的基本的層序 | 59 |
| 第6節 第2地区的完掘状況 | 61 |
| 第7節 第2地区的包含層の遺物 | 61 |
| 第5章 千日遺跡の調査 | 62 |
| 第1節 調査の概要 | 62 |
| 第2節 基本的層序 | 62 |
| 第3節 千日遺跡の包含層の遺物 | 64 |

| | |
|-----------------------------|----|
| 第6章 宮上遺跡の調査 | 65 |
| 第1節 調査の概要 | 65 |
| 第2節 A・B地区の基本的層序 | 65 |
| 第3節 A地区の遺構 | 67 |
| 第4節 B地区の遺構 | 69 |
| 第5節 A・B地区の遺物 | 71 |
| 第7章 梨子谷遺跡第1地区Cの噴砂痕について | 82 |
| 第8章 自然科学分析　—梨子谷遺跡の噴砂痕の粒土分析— | 87 |
| 第9章 まとめ | 91 |
| 引用・参考文献 | 95 |

挿図目次

| | |
|-----------------------------------------|----|
| 第1図 細野遺跡、梨子谷遺跡、千日遺跡、宮上遺跡の位置図 | 1 |
| 第2図 細野遺跡、梨子谷遺跡、千日遺跡、宮上遺跡の位置図（琵琶湖との関係から） | 6 |
| 第3図 細野遺跡、梨子谷遺跡、千日遺跡、宮上遺跡周辺の接峰面図 | 7 |
| 第4図 細野遺跡、梨子谷遺跡、千日遺跡、宮上遺跡周辺の地質図 | 8 |
| 第5図 春日村内の遺跡位置図 | 11 |
| 第6図 細野遺跡周辺地形図 | 13 |
| 第7図 細野遺跡第1地区グリッド設定図 | 14 |
| 第8図 細野遺跡第2地区グリッド設定図 | 14 |
| 第9図 細野遺跡第1地区5列西壁セクション図 | 15 |
| 第10図 細野遺跡第1地区発掘図 | 16 |
| 第11図 細野遺跡第1地区包含層出土遺物 | 17 |
| 第12図 細野遺跡第2地区D列北壁セクション図 | 18 |
| 第13図 細野遺跡第2地区遺構全体図 | 19 |
| 第14図 第2地区集石遺構検出状況 | 20 |
| 第15図 第2地区土器集中区（S U）検出状況 | 21 |
| 第16図 第2地区土器集中区（S U）出土遺物 | 22 |
| 第17図 第2地区炭化物集中区（C U）検出状況 | 22 |
| 第18図 第2地区包含層出土遺物 | 25 |
| 第19図 梨子谷遺跡周辺地形図 | 27 |
| 第20図 梨子谷遺跡第1地区グリッド設定図 | 28 |
| 第21図 梨子谷遺跡第2地区グリッド設定図 | 29 |
| 第22図 梨子谷遺跡第1A地区、第1B地区セクション図 | 29 |

| | | |
|------|----------------------------|----|
| 第23図 | 梨子谷遺跡第1C地区15列西壁セクション図 | 30 |
| 第24図 | 梨子谷遺跡第1C地区B列、F列、L列北壁セクション図 | 31 |
| 第25図 | 梨子谷遺跡第1地区遺構全体図 | 33 |
| 第26図 | 第1C地区集石遺構（S I）検出状況 | 35 |
| 第27図 | 第1C地区土器集中区1（SU1）検出状況 | 36 |
| 第28図 | 第1C地区土器集中区1（SU1）出土遺物 | 37 |
| 第29図 | 第1C地区土器集中区2（SU2）検出状況 | 38 |
| 第30図 | 第1C地区土器集中区2（SU2）出土遺物 | 39 |
| 第31図 | 第1C地区不明遺構1（SX1）検出状況 | 40 |
| 第32図 | 第1C地区不明遺構1（SX1）出土遺物 | 41 |
| 第33図 | 第1C地区土坑検出状況 | 42 |
| 第34図 | 第1A地区包含層出土遺物 | 45 |
| 第35図 | 第1B地区包含層出土遺物 | 46 |
| 第36図 | 第1C地区包含層出土遺物（1） | 48 |
| 第37図 | 第1C地区包含層出土遺物（2） | 50 |
| 第38図 | 第1C地区包含層出土遺物（3） | 53 |
| 第39図 | 第1C地区包含層出土遺物（4） | 54 |
| 第40図 | 第1C地区包含層出土遺物（5） | 55 |
| 第41図 | 第1C地区包含層出土遺物（6） | 57 |
| 第42図 | 第1C地区包含層出土遺物（7） | 58 |
| 第43図 | 第1C地区包含層出土遺物（8） | 58 |
| 第44図 | 梨子谷遺跡第2地区D列セクション図 | 59 |
| 第45図 | 梨子谷遺跡第2地区発掘図 | 60 |
| 第46図 | 第2地区包含層出土遺物 | 61 |
| 第47図 | 千日遺跡周辺地形図およびトレンチ設定図 | 62 |
| 第48図 | 千日遺跡トレンチA・B東壁セクション図 | 63 |
| 第49図 | 千日遺跡包含層出土遺物 | 64 |
| 第50図 | 宮上遺跡周辺地形図及びグリッド設定図 | 65 |
| 第51図 | 宮上遺跡A地区西壁セクション図 | 66 |
| 第52図 | 宮上遺跡B地区西壁セクション図 | 67 |
| 第53図 | 宮上遺跡A・B地区遺構全体図 | 68 |
| 第54図 | A地区土坑（SK）検出状況 | 69 |
| 第55図 | B地区土器集中区1（SU1）検出状況 | 69 |
| 第56図 | A地区包含層出土遺物（1） | 72 |
| 第57図 | A地区包含層出土遺物（2） | 74 |
| 第58図 | B地区土器集中区および包含層出土遺物（1） | 75 |
| 第59図 | B地区包含層出土遺物（2） | 76 |

| | |
|-------------------------|----|
| 第60図 梨子谷遺跡第1C地区検出噴砂痕平面図 | 83 |
| 第61図 噴砂の断面図と粒土分析試料採取位置 | 84 |
| 第62図 梨子谷遺跡第1C地区噴砂の粒度グラフ | 85 |
| 第63図 各資料の粒度組成 | 90 |

表目次

| | |
|---------------------------------------|----|
| 第1表 春日村内の縄文遺跡一覧 | 10 |
| 第2表 細野遺跡第2地区集石遺構一覧表 | 23 |
| 第3表 細野遺跡第2地区炭化物集中区一覧表 | 23 |
| 第4表 細野遺跡第2地区土器集中区一覧表 | 23 |
| 第5表 細野遺跡第2地区ピット一覧表 | 23 |
| 第6表 梨子谷遺跡第1C地区集石遺構一覧表 | 42 |
| 第7表 梨子谷遺跡第1C地区土器集中区一覧表 | 42 |
| 第8表 梨子谷遺跡第1C地区不明遺構一覧表 | 42 |
| 第9表 梨子谷遺跡第1C地区土坑一覧表 | 42 |
| 第10表 梨子谷遺跡第1C地区ピット一覧表 | 43 |
| 第11表 宮上遺跡A地区土坑一覧表 | 70 |
| 第12表 宮上遺跡B地区土器集中区一覧表 | 70 |
| 第13表 宮上遺跡A・B地区ピット一覧表 | 70 |
| 第14表 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土縄文土器観察表(1) | 77 |
| 第15表 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土縄文土器観察表(2) | 78 |
| 第16表 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土縄文土器観察表(3) | 79 |
| 第17表 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土縄文土器観察表(4) | 80 |
| 第18表 細野遺跡・梨子谷遺跡・宮上遺跡出土土器観察表 | 81 |
| 第19表 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土古代以降の土器 | 81 |
| 第20表 粒土分析による統計的指標値 | 88 |
| 第21表 細野遺跡第2地区集石遺構の礫観察表(1) | 93 |
| 第22表 細野遺跡第2地区集石遺構の礫観察表(2) | 93 |
| 第23表 梨子谷遺跡第1C地区集石遺構の礫観察表(1) | 93 |
| 第24表 梨子谷遺跡第1C地区集石遺構の礫観察表(2) | 93 |

図版目次

| | |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 図版1 | 1. 細野遺跡全景 2. 細野遺跡第1地区発掘前の状況 3. 第1地区作業風景 4. 第1地区セクション 5. 第1地区縄文土器出土状況 6. 第1地区完掘状況 7. 第1地区完掘状況(空撮) |
| 図版2 | 1. 第2地区発掘前の状況 2. 第2地区作業風景 3. 第2地区34Dセクション 4. 第2地区集石遺構1平面 5. 第2地区集石遺構1半剖 6. 第2地区集石遺構2平面 |

7. 第2地区集石遺構2半剖 8. 第2地区炭化物集中区2平面

- 図版3 1. 第2地区炭化物集中区3平面 2. 第2地区土器集中区(全体)
3. 第2地区土器集中区(拡大) 4. 第2地区完掘状況 5. 第2地区完掘(空撮)

- 図版4 1. 梨子谷遺跡第1地区全景 2. 第1A地区発掘前の状況
3. 第1A地区3Rセクション 4. 第1A完掘状況 5. 第1A地区完掘(空撮)

- 図版5 1. 第1B地区発掘前の状況 2. 第1B地区10V北壁セクション
3. 第1B地区作業風景(溝) 4. 第1B地区完掘状況 5. 第1B地区完掘(空撮)

- 図版6 1. 第1C地区発掘前の状況 2. 第1C地区作業風景
3. 第1C地区D列15~18北壁セクション 4. 第1C地区集石遺構1(SI1)平面
5. 第1C地区集石遺構1(SI1)半剖 6. 第1C地区集石遺構2(SI2)平面
7. 第1C地区集石遺構2(SI2)半剖

- 図版7 1. 第1C地区集石遺構3(SI3)平面 2. 第1C地区集石遺構3(SI3)半剖
3. 第1C地区集石遺構4(SI4)平面 4. 第1C地区集石遺構4(SI4)半剖
5. 第1C地区集石遺構5(SI5)平面 6. 第1C地区集石遺構5(SI5)半剖
7. 第1C地区集石遺構6(SI6)平面 8. 第1C地区集石遺構6(SI6)半剖

- 図版8 1. 第1C地区土器集中区1(SU1)平面 2. 第1C地区土器集中区1(SU1)半剖
3. 第1C地区土器集中区2(SU2)平面 4. 第1C地区不明遺構1(SX1)平面
5. 第1C地区不明遺構1(SX1)半剖 6. 第1C地区噴砂痕セクション
7. 第1C地区噴砂痕平面 8. 第1地区C完掘状況

- 図版9 1. 第1C地区完掘(空撮1) 2. 第1C地区完掘(空撮2)
3. 第1A、B、C地区完掘(空撮)

- 図版10 1. 梨子谷第2地区発掘前の状況 2. 第2地区作業風景
3. 第2地区D列北壁セクション 4. 第2地区自然流路平面
5. 第2地区自然流路掘削中 6. 第2地区完掘状況 7. 第2地区完掘(空撮)

- 図版11 1. 千日遺跡発掘前の状況 2. 千日遺跡表土除去後の状況
3. トレンチA北壁セクション 4. トレンチA完掘状況 5. トレンチB北壁セクション
6. トレンチB完掘状況

- 図版12 1. 宮上遺跡全景 2. A地区発掘前の状況 3. A地区作業風景
4. A地区西壁セクション 5. A地区石器出土状況
6. A地区土坑1(SK1)完掘状況 7. A地区土坑2(SK2)完掘状況

- 図版13 1. A地区積雪状況 2. A地区倒木痕検出状況 3. A地区完掘状況
4. A地区完掘(空撮)

- 図版14 1. 宮上遺跡B地区発掘前の状況 2. B地区作業風景 3. B地区西壁セクション
4. B地区土器集中区検出状況 5. B地区完掘状況 6. B地区完掘(空撮)

- 図版15 細野遺跡第1・第2地区出土縄文土器

- 図版16 梨子谷遺跡第1C地区SU1・2出土縄文土器

- 図版17 梨子谷遺跡第1C地区SU1・2およびSX1出土縄文土器 外面

- 図版18 梨子谷遺跡第1C地区S U 1・2およびS X 1出土縄文土器 内面
図版19 梨子谷遺跡第1A・B地区包含層出土縄文土器
図版20 梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器(1)
図版21 梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器(2)外面
図版22 梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器(2)内面
図版23 梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器(3)外面
図版24 梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器(3)内面
図版25 梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器(4)外面および内面
図版26 梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器(5)
梨子谷遺跡第2地区包含層出土縄文土器 千日遺跡包含層出土縄文土器
図版27 宮上遺跡A地区・B地区土器集中区および包含層出土縄文土器
図版28 宮上遺跡A地区・B地区包含層出土縄文土器
図版29 1. 細野・梨子谷・宮上遺跡出土剝片石器 2. 細野・梨子谷・宮上遺跡出土礫石器
図版30 細野・梨子谷・千日・宮上遺跡出土古代以降の土器

写真

写真1 梨子谷遺跡第1C地区噴砂痕セクション写真

附図目次

- 附図1 細野遺跡第2地区遺構全体図(1/150)
附図2 梨子谷遺跡第1C地区遺構全体図(1/200)

凡 例

1. 出土遺物の実測図の縮尺は、土器1/3、石器は2/3、1/2、1/3のいずれかである。
2. 遺物番号は、縄文土器は1番から、石器は201番から、須恵器・土師器・山茶碗・陶器等は301番からそれぞれ通番を付した。
3. 調査で用いたグリッドは、細野遺跡・千日遺跡・宮上遺跡が地形にあわせて設定した。梨子谷遺跡は国土座標を基準とした。また、細野遺跡・梨子谷遺跡は、4m×4mのグリッドを設定したが、千日遺跡は2m×5m、宮上遺跡は単に4m間隔でグリッド設定をした。
4. 遺構実測図の縮尺は、1/40、1/100を基本とした。
5. 遺構の略号は下記の通り用いた。

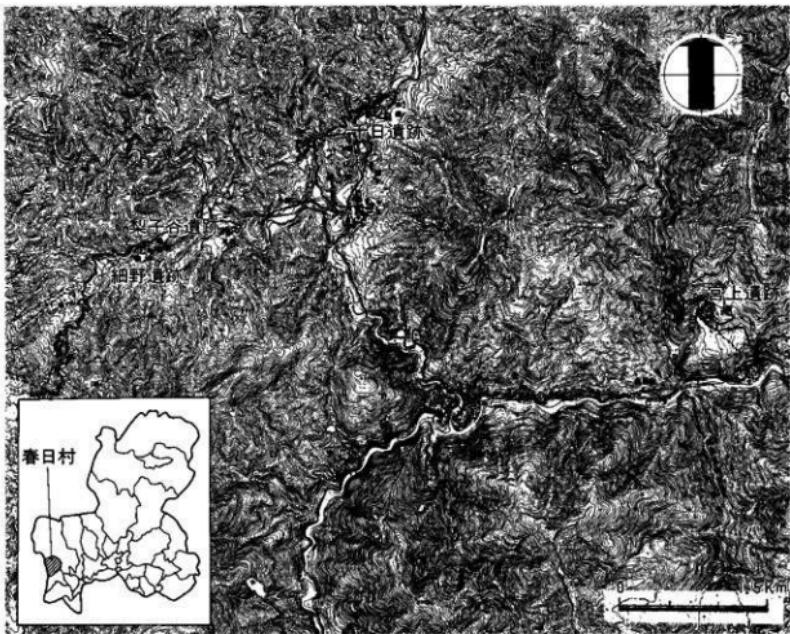
| | | | | | | | | | |
|--------|-----|-----|-------|-----|-----|----|-----|-----|-----|
| 集石遺構 | ··· | S I | 土器集中区 | ··· | S U | 土坑 | ··· | ··· | S K |
| 炭化物集中区 | ··· | C U | 柱穴、小穴 | ··· | P | | | | |
6. 縄文土器の分類は、同じ遺跡でも、距離、地形的にへだたりのある所は、地区ごとに分類した。
7. 土層および遺物の色調観察は、小川正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』(1996, 1997)を参照した。

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡は揖斐郡春日村大字美東および同村大字六合に位置し、揖斐土地改良事業所による中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査の一環として、平成8年度に発掘調査をおこなった。以上の4遺跡のうち、細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡については、平成7年7月に春日村大字美東字日橋で、縄文時代早期の遺物が採集され、日橋遺跡と認定された。これをきっかけに、平成7年度から始められた美東地区の圃場整備区域内で、春日村教育委員会が試掘調査を行った。その結果、4つの地区で縄文時代や中近世の遺物が出土し、岩井谷遺跡を含め細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡が確認された。宮上遺跡の所在する地域は小島城跡に関わりのある地域で、中山間地域農村活性化総合整備事業の一環として、幅4mの道路が作られることになり、平成7年9月より道路とそれに付随する側溝部分に、春日村教育委員会が試掘調査を行った。その結果、縄文時代～中近世の遺物が出土し宮上遺跡として確認された。

本格的な発掘調査は、細野遺跡(1256m²)・梨子谷遺跡(2094m²)・千日遺跡(20m²)・宮上遺跡(200m²)の順番で、平成8年度に行なった。



第1図 細野・梨子谷・千日・宮上遺跡位置図
(国土地理院発行 1:25000地形図「美東」を縮小)

第2節 発掘調査の経緯

5月10日に調査始め式を実施し、細野遺跡第1地区より調査を開始した。以後細野遺跡第2地区梨子谷遺跡第2地区、梨子谷遺跡第1地区、千日遺跡、宮上遺跡の順で調査を行った。全体の調査は平成9年2月5日に終了した。以下、各遺跡地区ごとに調査の経緯を記述する。なお、調査区域およびその周辺部については、圃場整備事業の関係から表土及び敷土を事前に重機で除去した。各調査区のグリッドは4m×4mで設定した。細野・千日・宮上の各遺跡は地形にあわせてグリッドを設定し、梨子谷遺跡については、座標軸にあわせてグリッドを設定した。

細野遺跡第1地区

平成7年度の試掘調査で周辺の試掘坑より、縄文土器・土師器・中世陶器などが出土し、事業によって破壊される部分を調査対象地区とした。

5月10日から発掘調査を開始した。傾斜地を切って耕作面を形成しているため、表土・敷土を除去した段階で地山が露出している場所が見られた。

5月15日までに第4層の中世耕作面を除去し、第7層（黒褐色土）の掘削にはいった。掘削中に、中央部から南北端に向かって傾斜が見られることがわかった。南側は、自然流路になっており、砂層と黒褐色土が混じった層が多く見られ、湧き水も多かった。北部は、黒褐色土が厚く堆積する所もあったが礫も多く、遺物はほとんどみられなかった。全体を通して遺構らしきものはなく、黒褐色土中に、石鎚・縄文土器数点と自然流路から山茶碗が1点出土した。

6月14日、空中写真撮影と各グリッドの写真撮影、周辺部の調査を行い調査を終了した。

細野遺跡第2地区

平成7年度の試掘調査で、調査区内の試掘坑より縄文土器・石器が出土した。

6月13日から発掘調査を開始した。第1地区と同じく耕作面を形成するため傾斜地が削られており、表土・敷土除去の段階で地山が露見している部分があった。層位を再度確認するため、調査区の東西南北に幅1mのサブトレンチを入れた。礫が多く手掘りでおこなった。サブトレンチにより場所によって第3層（黒褐色土）の下に第4層（暗黄褐色土）がある部分と、第3層の下に第5層（明黄褐色土）がある部分を確認した。

6月20日、35Dグリッドのサブトレンチ第5層直上より縄文時代早期の押型文土器3点が出土した。

7月3日、第3層（黒褐色土）の掘削を開始し、31B・33Eグリッド第3層から縄文土器が出土し、30Dグリッドから石器が出土した。

7月11日、34Cグリッド第4層で集石遺構を確認。集石遺構の検出を進めると共に、第4層の範囲確認をした。

7月24日、35Dグリッド第5層直上より縄文時代早期の押型文土器が多数出土した。

8月2日、33Gグリッド第3層（巨礫近く）より、縄文土器の底部など数点出土した。

8月6日、31D・33E・35Dグリッド第5層表面で炭化物集中区を確認した。

8月7日。33Fグリッド第5層より小型の集石遺構を確認した。

8月8日。空中写真撮影を行い、9日遺構検出・写真撮影および周辺部の調査を行い発掘調査を終了した。

梨子谷遺跡第2地区

平成7年度の試掘調査で、調査区内の試掘坑から石器や中世陶器などが数点出土した。

調査は、7月12日より表土除去を開始し、8月5日にブレハブを設置した。手掘りによる作業は、8月19日より開始した。

8月22日。8Aグリッドより9Dグリッドにかけて幅1m~1.5mの自然流路を確認した。

8月下旬より9月上旬にかけて、第3層（黒褐色土）・第4層（黄褐色土）・第5層（暗黄褐色土）まで掘削したが遺物及び遺構は確認できなかった。

9月5日・6日と8Bグリッドから10Cグリッドにかけて縄文土器数点が出土した。

9月25日空中写真撮影を行い、26日調査区の写真と周辺部の調査を行って発掘調査を終えた。

千日遺跡

平成7年度の試掘調査では、調査区周辺の試掘坑より縄文土器・石器が数点出土した。

調査は、南北に幅2m長さ5mのトレンチを2本設定し、掘削は重機によって層位ごとに行った。

調査は9月27日・10月1日に行った。第3層（黒褐色土）より縄文土器・石器・山茶碗等が数点出土した。遺構は確認できなかった。トレンチのセクション図と写真撮影を行い調査を終了した。

梨子谷遺跡第1地区（A・B・C地点）

平成7年度の試掘調査で、調査区内の試掘坑から縄文土器・石器・土師器・陶器類が出土した。

調査は7月24日より重機による表土除去を行い、7月30日よりグリッド設定のための杭打ちを行った。

（C地区）

手掘りによる調査は、9月18日より開始した。重機によって第1層（表土）および第2層（敷土）を除去した段階で第3層（灰褐色土）・第4層（黒褐色土）が削られ、地山に達する部分もあった。第3層・第4層の順で掘削を行った。

10月2日。15Kグリッド第4層中に集石遺構を確認した。

10月11日。20Jグリッド第4層に集石遺構を確認した。

10月15日。各グリッド第4層中から縄文土器が出土した。

10月18日。18Bグリッド第4層中に不明遺構を確認し、その周辺に縄文土器が多数出土した。

10月24日。17Bから18Bグリッド第4層に縄文土器の集中区を確認した。

10月29日。16Mグリッド第5層直上・19Bグリッド第4層・15Fグリッド第4層で集石遺構を確認した。また、16Nグリッド第5層で押型文土器を4点確認した。

10月30日。調査区北西部に広がる地割れ状の模様を、「噴砂痕」として認識した。

10月31日。17Dグリッド第4層で縄文土器集中区を確認した。また、18・19Cグリッド第4層で倒木痕を確認した。

11月28日。噴砂痕の流土分析のためのサンプリングをおこなった。

11月29日。セクション用の畦を取り除いた時点で、21A・Bグリッド第4層から集石遺構を検出し

4 第1章 発掘調査の経過

11月29日。セクション用の珪を取り除いた時点で、21A・Bグリッド第4層から集石遺構を検出した。11月中は雨が多く作業能率が低下した。

12月2日。大量の雪で調査区がうまる。積雪量は80cmを越えた。

12月3日・4日。雪解けのため調査進まず。

12月上旬までに調査区内に設定したセクション図をとり、珪をはずす。

12月18日。空中写真撮影。A・B地点と共に全体写真をとる。

12月24日。噴砂痕の砂の出所を確認するため、重機で2mほど掘り下がたが確認できず。

12月25日。調査区内と周辺部の確認調査を行い、用具の運搬を行った。

12月26日。調査終了。

(A・B地点)

手掘りによる調査は、10月31日から行った。C地点と同様で、表土除去の段階で、地山が見えているところがあった。

第III層・第4層を掘削したが、遺構は検出できなかった。B地点では、自然流路と考えられる部分が調査区の北部にみられた。

両地点とも、数点の縄文土器・石器・中近世陶器が出土した。

12月18日。C地点と共に空中撮影と調査区全体の撮影を行った。

12月25日。調査区内と周辺部の確認調査を行い調査を終了した。

宮上遺跡

平成8年9月24日から10月16日までの試掘調査によって、縄文土器・石器・中近世陶器など多数の遺物が出土した。

調査は12月9日からおこなった。プレハブを設置し、重機で表土除去を11日まで行った。約3m×36mと約3m×33mの2本のトレーナーを南北方向に設置した。調査区がまっすぐではないのでグリッドは南北方向に4m間隔で設定し、南側をA地区北側をB地区とした。

12月13日。グリッド設定のための杭打ちを行い、包含層を手掘りで始めた。B地区では、第1層(表土)と第2層(黒褐色土)との間に、平地を作るための盛り土をした部分を確認した。

12月17日・19日・20日。雨のため作業中止。

12月25日。A地区4・5・6グリッド第2層より縄文土器出土。

12月26日。仕事納め。1月8日仕事始め。

1月9日。A地区3グリッドで倒木痕を確認した。8・9グリッドに土坑を確認した。

1月13日。B地区19グリッド・21グリッド第2層より押型文土器出土。

1月16日。A地区5グリッド第3層直上に石器(ポイント)出土。B地区16グリッド第2層に縄文土器が集中して出土。

1月21日・22日・23日・24日・27日・29日・30日雪または雨のため作業中止。

2月4日。A・B地区的セクション図・遺構図を取り終えて、空中写真撮影の準備。

2月5日。空中写真撮影終了。調査区内の写真撮影、確認調査、周辺部の確認調査を終えてすべての発掘調査終了。

第2章 遺跡の環境

第1節 地形・地質環境

調査地域は4ヶ所あり、いずれも緩傾斜面上に位置する。しかし、遺跡を構成する面の形成過程は異なる。そこで、まず4遺跡周辺の地形・地質の概略を述べ、その後で細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡について分けて述べる。

1 調査地域周辺の地形と地質

今回調査した4遺跡が存在する春日村は、岐阜県の西端の村の一つであり、西隣は滋賀県である。村の北端には貝月山（標高1234m）があり、西南端には伊吹山（標高1377m）がある。本調査地域周辺の接峰面図（国土地理院発行1:50,000「長浜」を使用し、一辺2km方眼の最高点の標高に基づいて等高線作図）を第3図に示した。この地域は、標高約1400mの伊吹山から西は標高約85mの琵琶湖まで存在し、高度差の大きい地域である。特に、伊吹山頂から南西方向は高度差が激しく、水平距離約4kmに対して高度差が約1200mもある。伊吹山は調査遺跡から南西の方向に位置している。伊吹山周囲の尾根は、約1100～1300mの高さをもち、北西から南西方向にかけて弧を描いて分布している。そのため、西との交通は高い山々によってさえぎられやすかったと考える。

4遺跡は、いずれも柏川の支流沿い、もしくは支流近辺に位置している。柏川は、春日村美東周辺でいくつかの支流が合流したのち、南東へ流れ、途中で東へ方向を変え、春日村の東の揖斐川町で揖斐川に合流する。支流をも含めて柏川の河岸の様子は、美東の集落を境にして上流と下流で大きな違いが見られる。美東より上流（特に西）は、深い谷は見られず河岸に平地や緩斜面が広く存在する。一方、下流は深い谷をつくりており、局部的に河原が見られるにすぎない。これは、地質の違いを反映しており、美東より上流部に居住に適した場所が多くあると考えられる。

第4図に、春日村周辺の地質図を示した。春日村には、第四紀の堆積物をのぞけば、岐阜県美濃地方に広く分布する美濃帯堆積物と貝月山を中心として広がる花こう岩が分布する。美濃帯堆積物は、古生代から中生代にかけての海洋性堆積物の付加体から成っている。中・古生層である砂岩、泥岩、チャート、石灰岩、玄武岩質溶岩および火山碎屑岩などが複雑に絡み合った状態で分布する。

一方、花こう岩は貝月山花こう岩と呼ばれ、春日村とその西方の滋賀県坂田郡伊吹町に、直径約1kmのほぼ円形に分布する。この花こう岩は、主に中～粗粒の黒雲母花こう岩であり、一部に角閃石を含み、斑状の部分もある。岩体内には、ペグマタイト・アブライトのレンズ・岩脈が多数ある。岩体の周囲に分布する美濃帯は約2.5～3kmの範囲で接触変成をうけており、ホルンフェルス化した岩石も見られる。

2 各調査地域の地形・地質

細野遺跡・梨子谷遺跡

この2つの遺跡は、柏川の支流である尾西谷沿いに位置し、その尾西谷は西から東に流れる。上流

の分水嶺を越すと滋賀県になる。

2遺跡は、貝月山花こう岩体の中に位置する。花こう岩体は、美濃帯堆積物と比べて風化や侵食がされやすく、谷密度も高くなっている。特に2遺跡は、侵食された谷に上流から運ばれた礫や花こう岩が風化してできた砂が堆積した埋積谷の上に立地している。このため、水にも恵まれ、遺跡としての立地には適していたと思われる。

細野遺跡の約300m上流に、埋積谷を構成する地層の露頭が見られたので、ここに記載をする。この地層は、亜角礫および亜円礫からなる河成堆積物であり、6m以上の層厚をもつ。礫の大きさに関しては、平均径は5~20cmであり、観察できる限り最大径をもつものは約300cm×140cmの花こう岩であった。また、1m弱の径をもつ礫も多く入っている。礫種は、ホルンフェルス化した泥岩が多く、続いて花こう岩である。礫のオリエンテーションはみられ、ほぼ水平に並んでいる。マトリックスは、中粒砂~細礫からなり、一部でクロスラミナが見られる。

後述するが、梨子谷遺跡では、花こう岩が風化してできた砂（まさ土）が地震により液状化し、遺物包含層である黒色土を貫いた噴砂が観察された。

千日遺跡

千日遺跡は、柏川の支流である表川沿いに位置する。表川は、北から南に流れており、表川の支流が東や西の山地部から流れこんでいる。この一帯には貝月山花こう岩が分布しており、砂や礫など上流部からの供給物が多い。そのため、表川沿いには、東斜面のいくつかの支流によって運ばれ堆積した扇状地が存在し、その上に本遺跡がある。



第2図 細野・梨子谷・千日・宮上遺跡位置図
(国土地理院発行1:50000地形図「長浜」を縮小)

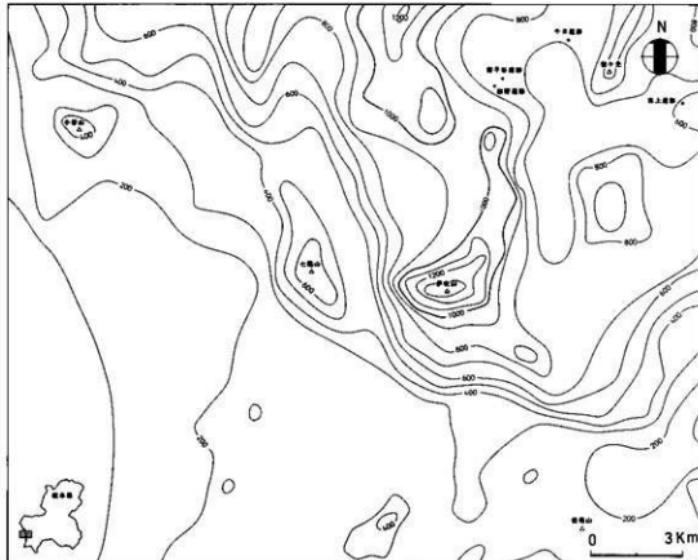
宮上遺跡

宮上遺跡は、柏川の支流である高橋谷川の東方約400mに存在する緩斜面上に位置する。高橋谷川は、北から南に流れている。

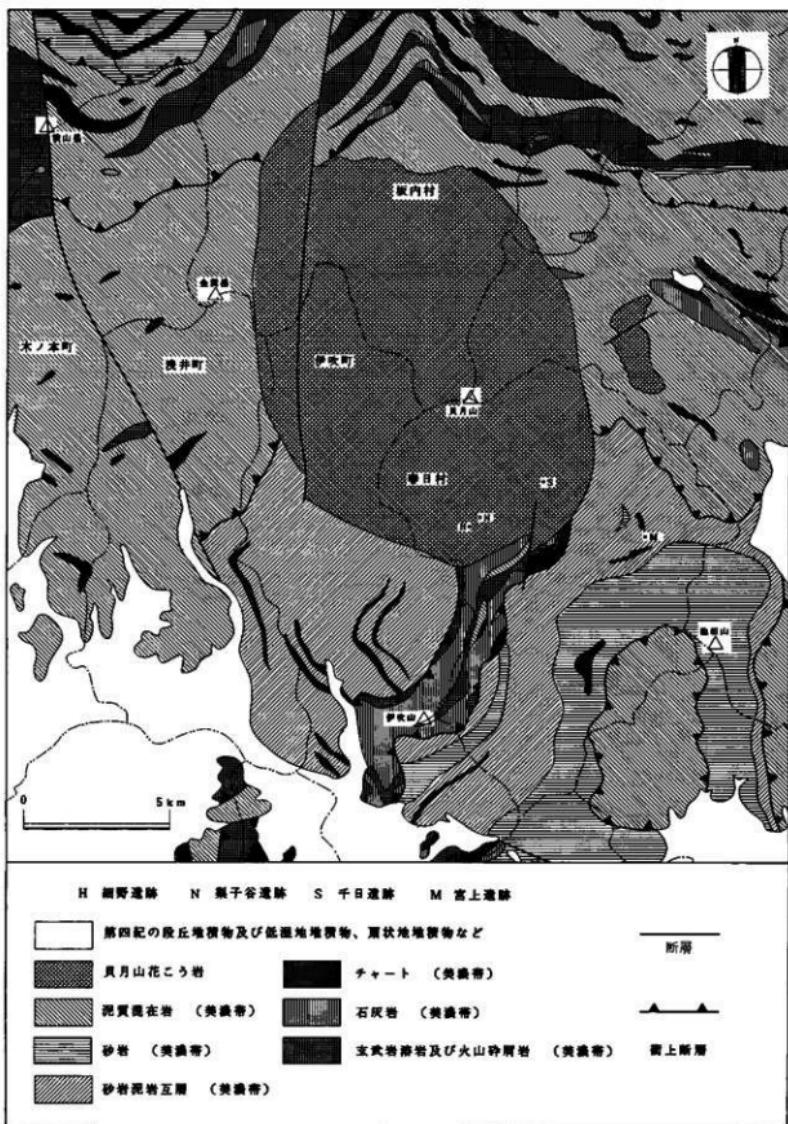
宮上遺跡の周辺は、一見、扇状地のように見えるが、地形や現地で見られる露頭からすると、崩積成堆積物と思われる。宮上遺跡周辺の地形の特徴は、以下の通りである。扇状地をつくるほどの谷が存在しないこと、現在緩斜面の両端に谷が存在するが、西の谷は緩斜面の上部で西に湾曲し緩斜面の方向とは違う高橋谷川と合流していること、扇頂部近くにあたるところがやや小山状になっていること、緩斜面の南部に起伏部が2ヶ所見られることである。

緩斜面の中央部で露頭が見られるが、この露頭は角礫による堆積物からなっている。角礫は、大きいもので数m、平均で5~20cm径ある。礫種はホルンフェルス化した泥岩およびチャートである。マトリックスは、淘汰が悪いシルト~細礫からなる。数cmの角礫が方向性をもって横方向に並んでいるように見える部分もある。その方向は露頭断面が一方向であるためはっきりとわからないが、測ったところN20°W20°Sであった。また、緩斜面南部にある起伏部の表面には、数mの径をもつ巨礫がいくつか見られる。

このような地形、表層の地質から考えると、宮上遺跡が位置する緩斜面は大規模な崩積成堆積物、もしくは地すべり堆積物によるものである。このため、宮上遺跡周辺は、水はけのよい場所であり、南斜面であるため日当たりのよい場所であると考えられる。谷水も近くにあり、水にも恵まれていたと考えられる。



第3図 細野・梨子谷・千日・宮上遺跡周辺の接峰面図
(1:50000地形図「長浜」を1辺2km方眼の最高点の標高にもとづいて等高線作図)



第4図 4遺跡周辺の地質図
(通産省工業技術院地質調査所「20万分の1地質図岐阜」(1992)を一部改変)

第2節 歴史的環境

1 春日村の縄文時代の遺跡

春日村の縄文時代の遺跡は、近年その数を増やしている。從来から知られていた遺跡は、1933年開墾の際に遺物が出土し、遺跡と確認された長者平遺跡と、神社の西側の緩斜地から遺物が発見された津島神社遺跡である。その後、1949年～1950年頃に長者平遺跡で試掘が行われ遺物が出土したが、その後しばらくは春日村の遺跡確認はされていなかった。

1981年村内で踏査が行われ、池戸・下平・長者（長国寺跡）・寺本で縄文時代の遺物が、上ヶ流で中世の遺物が表採された。

1995年、美東地区字口橋で田畠の斜面に縄文時代早期のものと思われる縄文土器が見つかり、日橋遺跡として確認された。この後、春日村全体を対象とした中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う試掘調査が行われ、細野・梨子谷・岩井谷・千日で縄文時代の遺物が出土し、遺跡として確認された。さらに、村民からの情報で、縄文土器が出土していた市瀬と向良が遺跡として確認された。1996年には、中世の遺跡である小島城跡の近くで試掘調査が行われ、縄文時代や中世の遺物が出土し、遺跡として確認された。そのほかにも、1997年大字六合字上瀬で農道の拡張工事の際にその周辺から縄文土器が表採され、遺跡として確認された。

このように、春日村の縄文時代の遺跡は、近年の調査等によってかなり明確になってきた。しかし、調査の対象地域が春日村の北西部にかたよっており、これから調査等でさらに遺跡の数が増える可能性がある。

2 春日村の弥生時代以降の遺跡

春日村の弥生時代以降の遺跡は、弥生時代の遺物があったといわれている寺本遺跡。鎌倉時代の寺院跡といわれている長国寺跡、室町時代を中心に中世城郭があった小島城跡。この3つがあげられている。この中で小島城は、美濃国守護土岐頼貞の子頼清によって築城されたといわれ、頼清の子頼康（土岐家三代目の美濃守護）が居城としていた。頼康の養子康行が四代目の守護となつたが、幕府の反感をかい、1390年美濃守護職を免ぜられ、小島城も廃城となった。

3 春日村周辺の縄文時代の遺跡

春日村周辺の縄文時代の遺跡は、春日村を含む揖斐郡内の遺跡にまで広げるとかなり多くなる。特に徳山ダム建設で知られる藤橋村旧徳山地区では30遺跡が確認されている。また、「長吉・普賢寺遺跡」の報告書にも揖斐郡内の縄文時代の遺跡の概要説明があり、詳しくはそちらを参考にされたい。

揖斐郡内の各町村の遺跡数をあげると、次のようになる。（「長吉遺跡・普賢寺遺跡」による）

揖斐川町・・・7 池田町・・・12 藤橋村・・・34（内旧徳山地区30）

坂内村・・・10 久瀬村・・・11 谷汲村・・・9 大野町・・・なし

さらに範囲を春日村の南にある垂井町・閔ヶ原町あるいは滋賀県境の伊吹町まで広げると次のようになる。

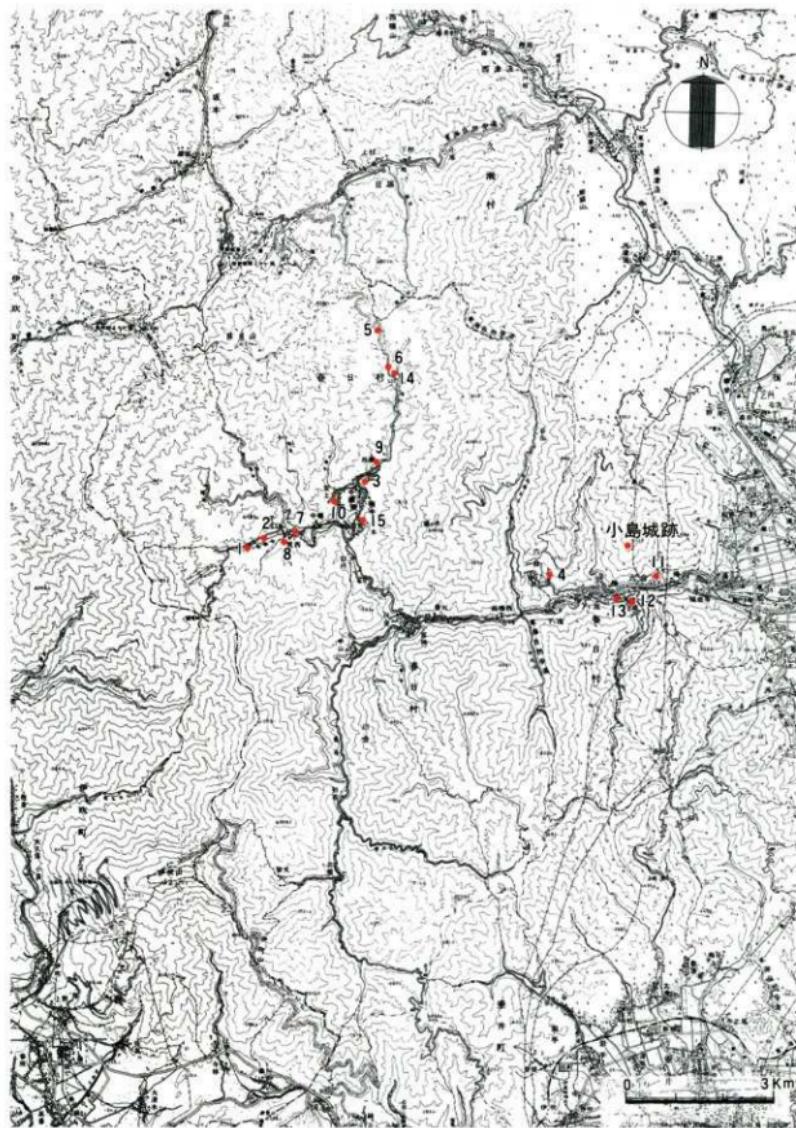
垂井町・・・1 関ヶ原町・・・27 伊吹町（滋賀県）・・・21

このように春日村周辺地域でも多くの縄文時代の遺跡が確認されており、春日村内の遺跡がこれら周辺地域の遺跡と深く関わっていた可能性が高い。

第1表 春日村内の縄文遺跡一覧

| No | 遺跡名(表採地名) | 所 在 地 | 遺構・出土遺物 |
|----|-----------|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 細 野 | 大字美東字細野 | 縄文時代早期の集石遺構 縄文時代早期・中期・後期の土器、石鎌、石匙、山茶碗 |
| 2 | 梨 子 谷 | 大字美東字梨子谷 | 縄文時代早期の集石遺構 縄文時代早期・中期の土器、石鎌、石匙、スクレイバー、打製石斧、敲石、中近世の土器 |
| 3 | 千 日 | 大字美東字千日・松田 | 縄文時代早期の土器、山茶碗 |
| 4 | 宮 上 | 大字六合字宮上 | 縄文時代早期・前期・中期の土器、ポイント、スクレイバー、須恵器、中近世の土器 |
| 5 | 長 者 平 | 大字美東字長者平 | 縄文時代早期・晚期の土器、敲石 |
| 6 | 津 島 神 社 | 大字美東字長者平 | 縄文土器 |
| 7 | 日 橋 | 大字美東字日橋 | 縄文土器 |
| 8 | 岩 井 谷 | 大字美東字岩井谷 | 縄文時代早期の集石遺構、縄文時代中期・後期の住居跡、立石遺構、集石遺構、埋設土器 縄文時代早期・前期・中期・後期の土器、土偶、石棒、石鎌、石錘、石匙、スクレイバー・中近世の土器 |
| 9 | 市 漸 | 大字美東字市漸 | 縄文土器 |
| 10 | 向 良 | 大字美東字向良 | 縄文土器 |
| 11 | 上 瀧 | 大字六合字上瀧 | 縄文土器 |
| 12 | 池 戸 | 大字六合字池戸 | 石匙 |
| 13 | 下 平 | 大字六合字下平 | フレイク、スクレイバー |
| 14 | 長者（長国寺跡） | 大字美東字長者平 | 縄文土器 |
| 15 | 寺 本 | 大字美東字北野 | 縄文土器、フレイク |

注) 12, 13, 14, 15については1981年に行われた踏査による表採で遺跡として位置づけをしてある。



第5図 春日村の遺跡位置図
(国土地理院発行 1:50000地形図「長浜」「大垣」「横山」谷汲を縮小)

第3章 細野遺跡の調査

第1節 調査の概要

細野遺跡は、千疋集落から西方へ800mほどの古田谷右岸段丘上に位置し、古田谷との比高差は15mにおよぶ。削平と埋土により耕作面を造成したため、遺跡全体として遺構の残存は不良であった。遺跡は、標高510m前後の第1地区と標高500m前後の第2地区に分かれる。

発掘調査にあたり地区の設定は、傾斜に合わせて第7図や第8図のように、4m×4mのグリッドを設け、北から南へA・B・Cとし、東から西へ1・2・3と番号を付けてグリッド名を表すことにした。

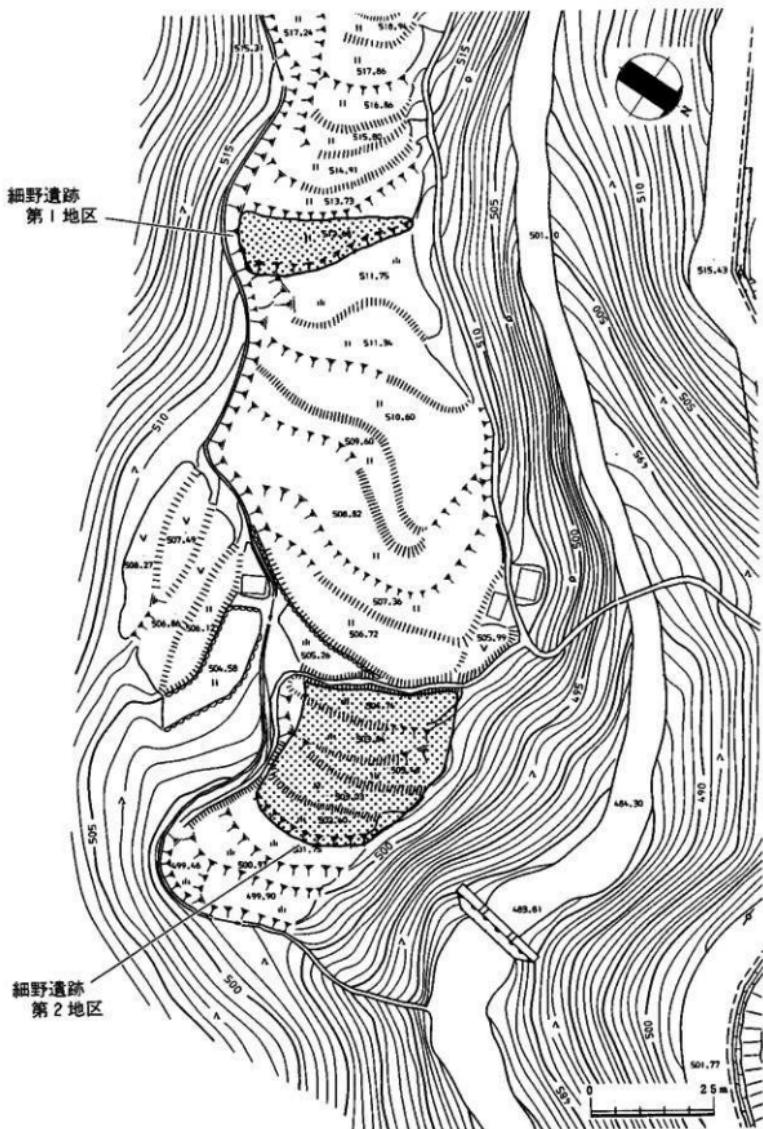
第1地区の場合、旧地形は西から東へ傾斜しているだけでなく、遺跡の中心から南北へも傾斜していた。特に、南側は落ち込んだところが自然流路になつており、砂の堆積層がみられた。この地区では遺構は確認できず、縄文時代の遺物と中世の山茶碗が出土した。

第2地区は、北西から南東に向かって傾斜していたが、遺跡の北西部分が特に深く削平され、耕作土と敷土を除去すると、花こう岩の巨礫を含む地山がみられた。この地区では、第4層に集石遺構を1基、第5層に集石遺構1基と土器集中区1カ所と炭化物集中区を3カ所検出した。

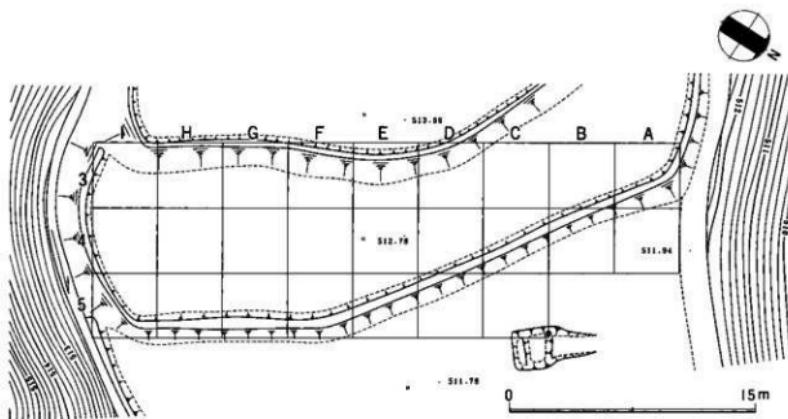
第2節 第1地区の基本的層序

土層は、耕作土である第1層が約20~25cmあり、その下に敷土の第2層が約5~10cmある。第4層が中世の耕作土で鉄分の沈殿層を含み、中世の耕作面であると考えられる。第5層以下が包含層と考えられるが、南側の自然流路については、各層位が混在しているため、土色と土壤の状態のみ記載する。

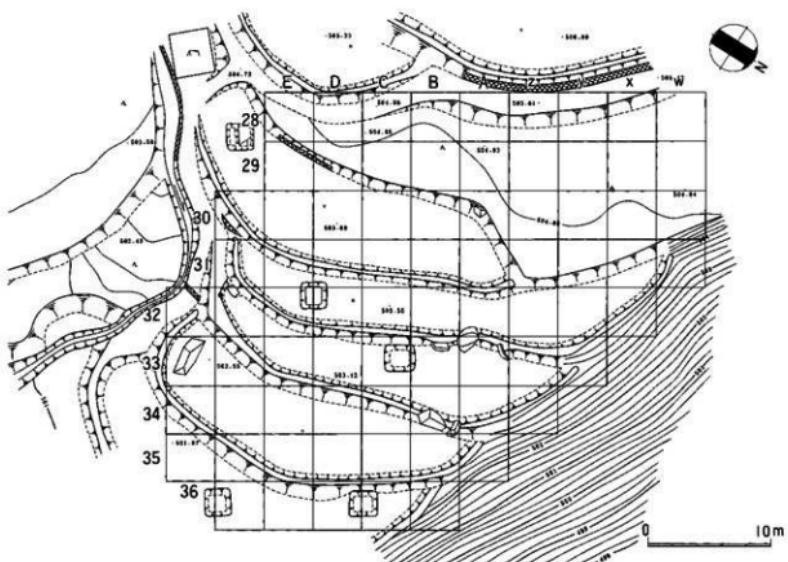
- 第1層 黒褐色土 (10YR4/1) 耕作土
- 第2層 黄褐色土 (10YR5/6) 敷土
- 第3層 にぶい黄橙色土 (10YR7/4) 花こう岩の風化した小礫を多く含む
- 第4層 褐灰色土 (10YR4/1) 炭化物や、下面には赤褐色の鉄分を多く含む 中世耕作面
- 第5層 にぶい黒褐色～にぶい灰褐色土
- 第6層 灰褐色～赤褐色土 砂礫層で鉄分を含む
- 第7層 にぶい黒褐色～褐灰色土
- 第8層 乳白色砂層
- 第9層 黑褐色土 (10YR3/2) 炭化物を含む
- 第10層 黒色～黒褐色土 植物の根を多量に含む
- 第11層 黄褐色～赤褐色砂層 鉄分を含む
- 第12層 灰白色～赤褐色砂層
- 第13層 灰白色礫層 径10cm以上の礫を含む



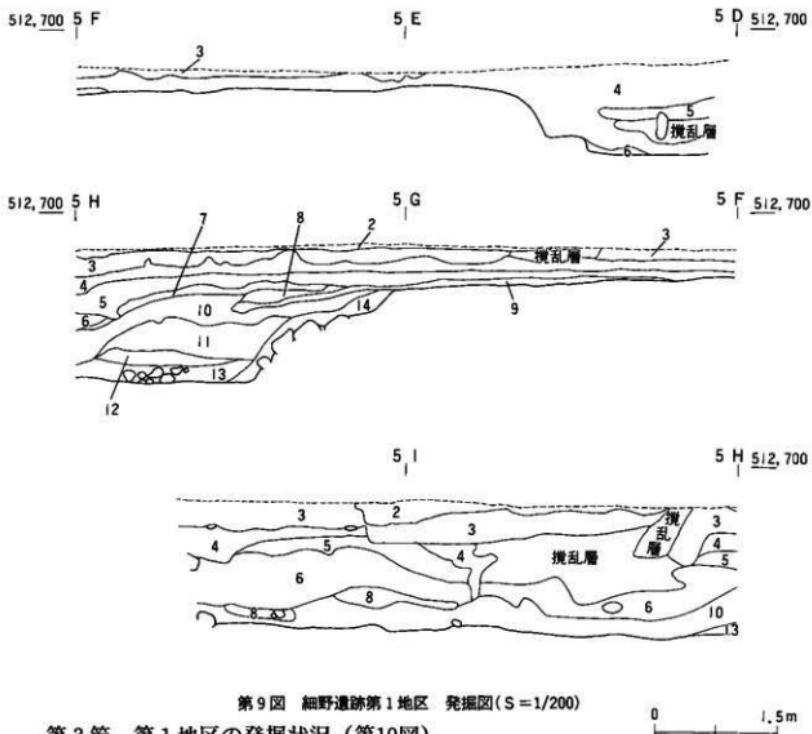
第6図 細野遺跡周辺地形図($S=1/1000$)



第7図 細野遺跡第1地区 グリッド設定図($S=1/300$)



第8図 細野遺跡第2地区 グリッド設定図($S=1/400$)

第9図 細野遺跡第1地区 発掘図 ($S=1/200$)

第3節 第1地区の発掘状況 (第10図)

0 1.5m

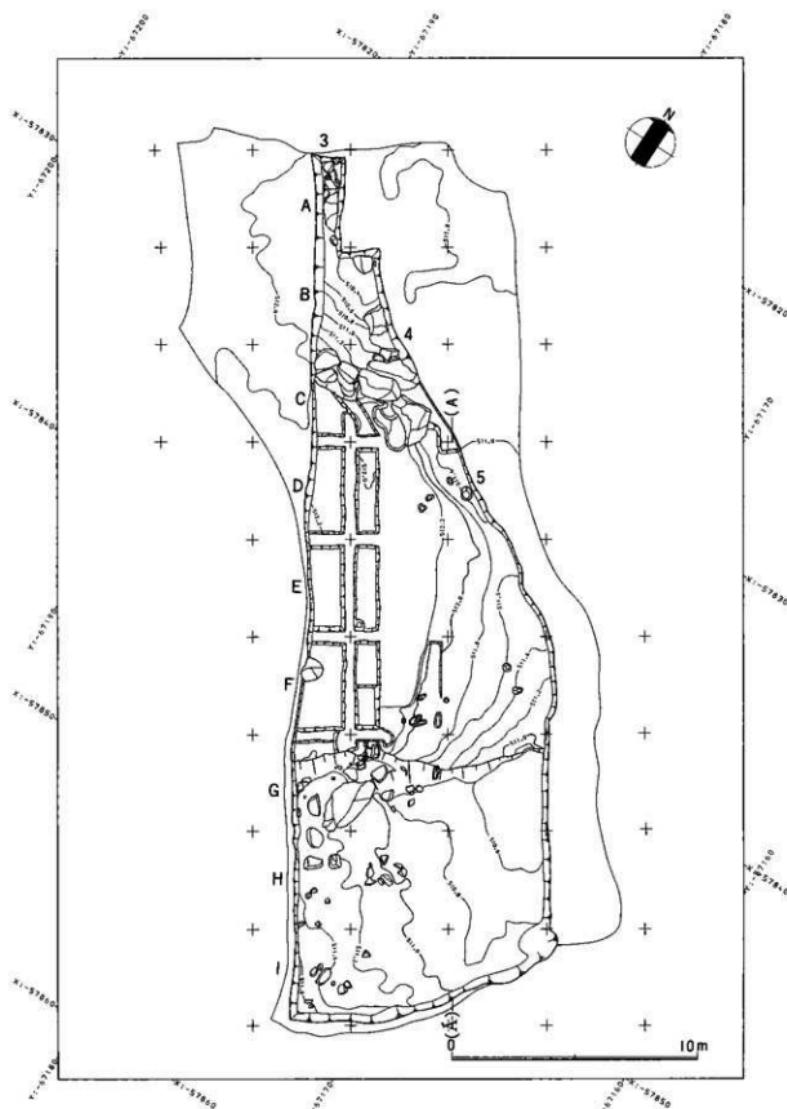
第1地区は南北に長い約300mの発掘区である。中心部から南北に傾斜し、北側は発掘区の北側にある古田谷に向かって傾斜していくものと考えられる。完掘した状況で花こう岩の巨石がみられる。

南側の傾斜地は中心部から約8mほどで平坦になる。このあたりは、自然流路であったようで、中心部から1.5mほどの比較差があり、大量の砂が1mほどの層になって残っていた。最下部の第10層には、植物の根が大量に残っていた。

この地区で、遺構らしきものは確認できなかったが、縄文土器・石器・中世の山茶碗などが出土していることから、近くに居住区域があったものと考えられる。

第4節 第1地区の遺物

第1地区は、遺構を確認できなかったので、包含層の遺物のみを掲載した。



第10図 細野遺跡第1地区 発掘図 ($S = 1/200$)

1 繩文土器

第3層・第6層と第7層から出土した土器を6点掲載した。

第I群 (第11図1、図版15)

1は、器表面に深浅の縄文を施した胴部片。縄文時代中期中葉の船元IV式に併行するものと思われる。

第II群 (第11図2、図版15)

2は口縁が外反し、外面に斜め方向の沈線を施す。縄文時代中期後葉の沈線文土器かと思われる。

第III群 (第11図3、図版15)

3は、縄文時代後期初頭の中津式土器の胴部片。RLの単節斜縄文を施し、沈線で区画した後で縄文を磨消している。J字の文様が2段になる。

第IV群 (第11図4～6、図版15)

4～6は、横方向または斜め方向に円棒状工具や先の細い工具で施した土器の胴部片。外面は撫でて調整している。内面には、指の痕が見られる。器厚は6mm前後と薄い。縄文時代後期中葉の加曾利B式の注口土器の一部に類似している。

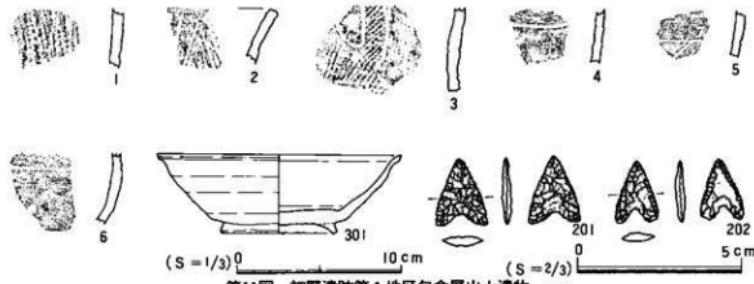
2 石器 (第11図201・202、図版29上)

201は、薄手の円基無茎鎌で、全体に剥離調整を施している。202は、下方からの打点を有する薄手の剥片を素材としている。正面全体に剥離整形をした後、両側縁に微細な剥離調整を施している。裏面に主剥離面を大きく残す。

3 古代以降の土器 (第11図301、図版30)

本地区からは山茶碗1点、瀬戸美濃1点、合計2点が出土し、そのうち山茶碗1点(301)を図示した。(以下、古代以降の土器については、破片数は接合前の数値を示し、大窯期の遺物は「大窯」、連房期の遺物は「瀬戸美濃」、瀬戸美濃以外の近世陶磁器を「近世陶磁器」と記す。)

301は、荒肌手山茶碗であり個体の約半分が残存している。胎土中には、白色粒、乳白色粒、灰色粒などがみられ、白色粒の割合が高い。口縁部はわずかに外反し、端部にはほぼ垂直な面を有する。底部内面周縁はヘラ状工具により断面三角形に凹んでおり、凹みの頂点にはひび割れがみられる。器形的には藤澤編年第5～6型式に併行するであろうが、胎土と器面、整形方法など他の尾張型の山茶碗とは違う可能性があるため、その生産地は不明である。



第11図 細野遺跡第1地区包含層出土遺物

第5節 第2地区の基本的層序

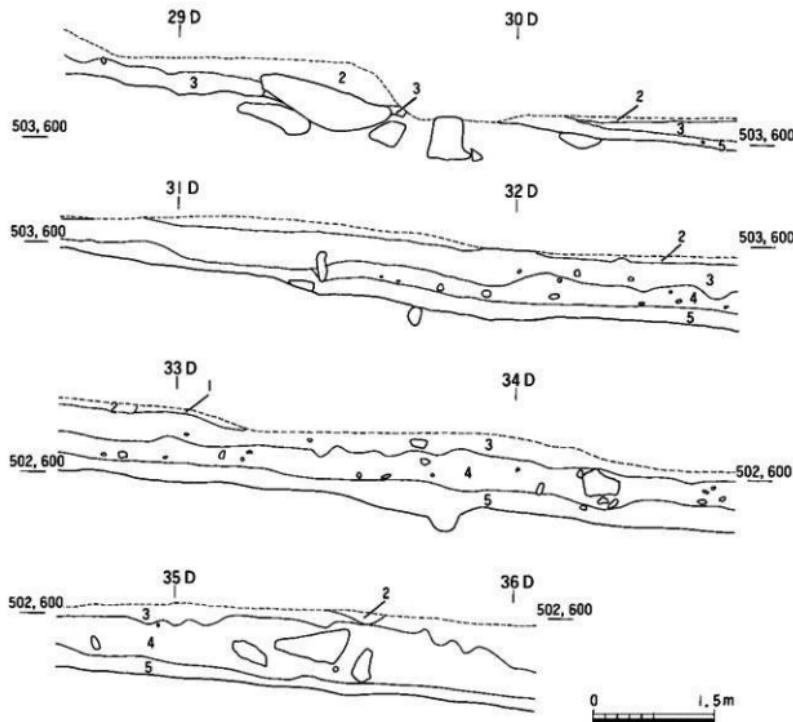
第2地区は、発掘前に重機で耕作土（第1層）と敷土（第2層）のほとんどを除去したので、図に第1層・第2層は十分掲載されていない。層位については次のとおりである。

第1層 黒褐色土（10YR3/2）珪土も含む耕作土。花こう岩が風化した径5mmの乳白色小礫を含む粘質土。

第2層 褐色（7,5YR4/4）～黒褐色土（10YR3/2）敷土。径5mmの小礫を含む。

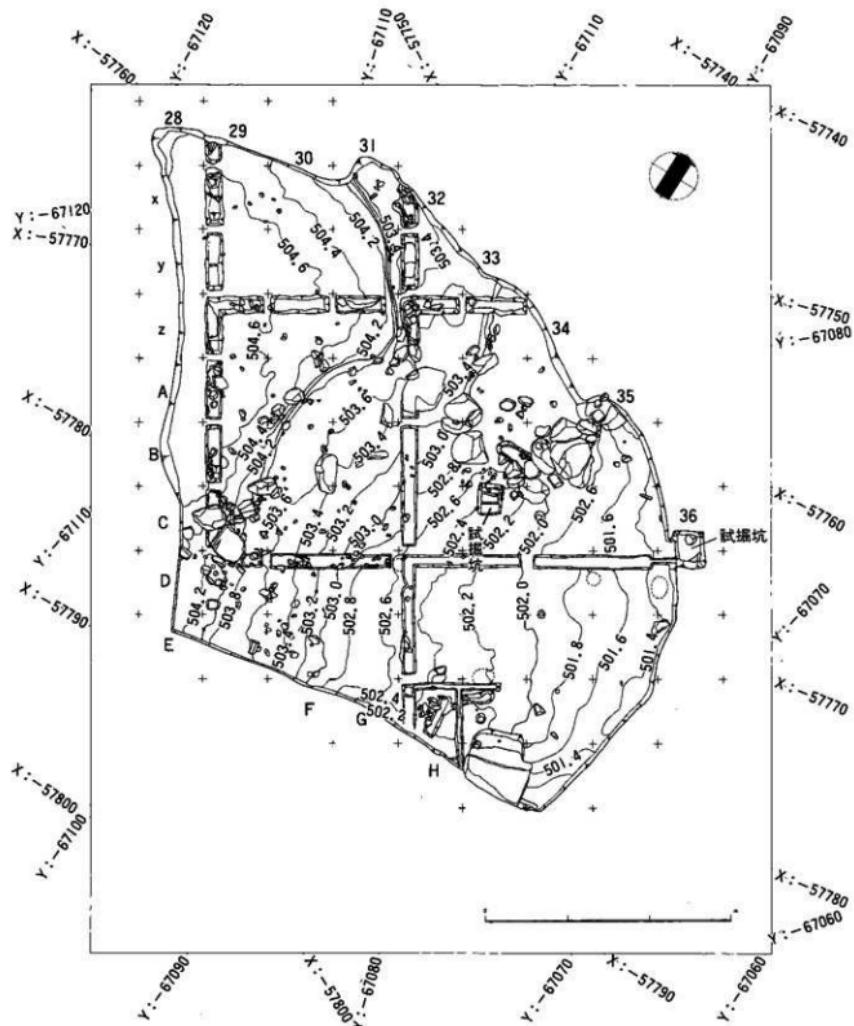
第3層 黒色土（10YR1,7/1）土そのものは、きめの細かいシルト層だが、第1・第2層と同じで径5mm程度の花こう岩が風化した小礫を含む。

第4層 にぶい黄褐色土（10YR5/4）花こう岩の風化した小礫を大量に含み、金雲母もみられる。土の質はきめの細かいシルト質。



第12図 細野遺跡第2地区D列北壁セクション図(S=1/60)

第5層 灰黄褐色土 (10YR4/2) 第4層と同じく花こう岩の風化した小礫を含むが、第4層ほどではない。



(遺構の配置は付図1にあり)

第13図 細野遺跡第2地区 遺構全体図 (S=1/300)

第6節 第2地区の遺構と遺物

(1) 集石遺構 (SI)

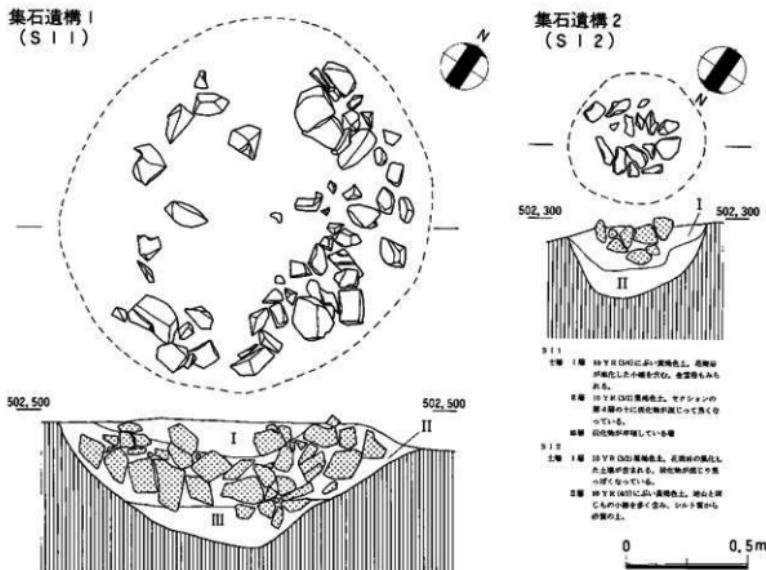
集石遺構を2基検出した。1基は比較的大型で、第4層中より検出した。もう1基は小型で第5層より検出した。

SI1 (第14図、図版2)

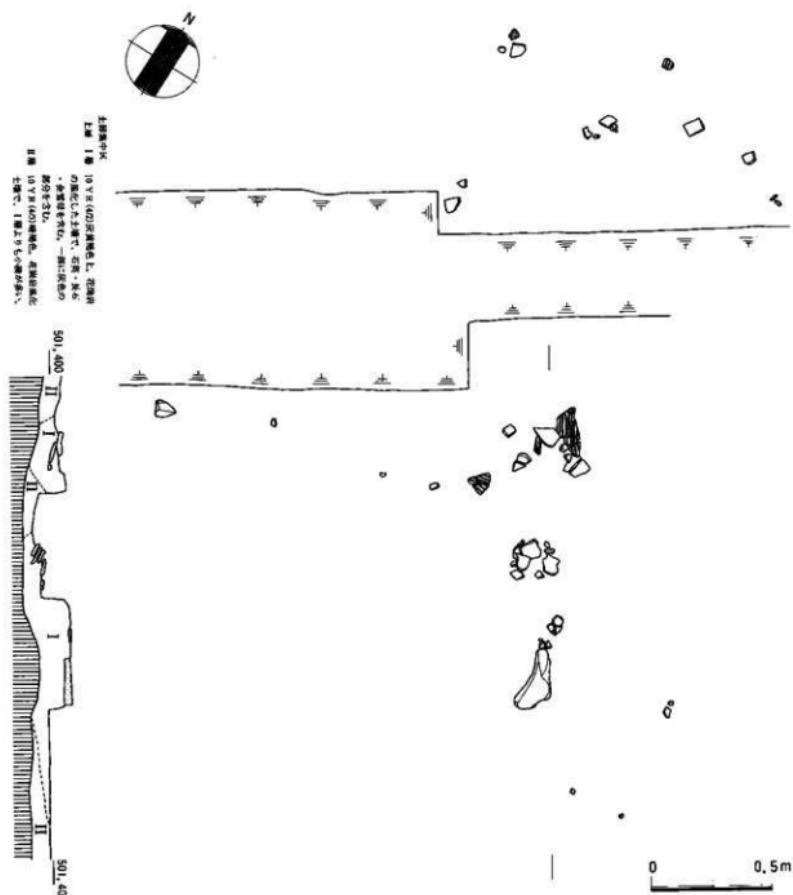
34Cグリッド西よりの地点で、第4層中より検出した。径1.4m深さ0.5mほどのすり鉢状のもので、1000個近い礫があった。火を使ったと思われ、底の部分に大量の炭化物が付着していた。礫は角礫が多く、石材は変成岩であったが、花こう岩のような被熱に弱い礫などもあった。中に1点だけ縄文土器がみられたが、無文で大変小さなため、時期はわからなかった。底の部分にみられた炭化物は、"C年代測定法によると、6390±120年という結果がでた。

SI2 (第14図、図版2)

33Fグリッド第5層で検出した。径0.6m深さ0.3mほどの小型の集石遺構で、中に含まれていた礫も20数個であった。多くが角礫で、半数ほどの礫が被熱を受けていることが確認できた。石材は、花こう岩質のものが多くみられた。



第14図 第2地区集石遺構検出状況 (S=1/20)



第15図 第2地区土器集中区(SU)検出状況(S=1/20)

2 土器集中区 (SU) (第15図、図版3)

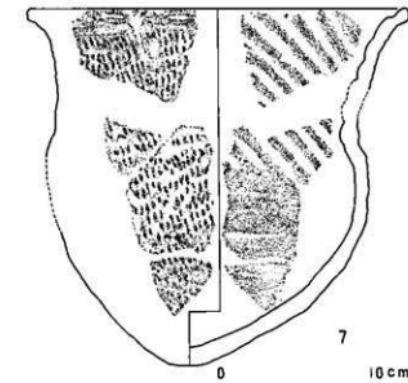
SU1 調査区東端に位置し、35Dグリッドを中心に、35C・36C・36Dグリッドに一部かかる所から多数の縄文土器が出土した。文様・器形などから縄文時代早期中葉の高山寺式土器かと思われる。土器片は摩耗が少なく、その地点で使用されたか廃棄されたものと考えられる。周りからも、多くの炭化物が検出された。炭化物の¹⁴C年代測定の結果は、 7500 ± 220 yrBPとでた。

出土土器について（第16図7、図版15）

7は、口縁直径約31.2cm高さ29.5cmの深鉢型の土器。器形は、口縁部が外反し、口縁部から頸部に

かけてくびれ、胸部が膨らむ。底部は尖底で、器厚は約1cmをこえる。尖底部はやや中心からはずれる。外面には口縁部から肩部にかけて縱方向に押型文が施されている。押型文の一粒のサイズは、縦10mm横4mmである。内面は、口縁部から頸部にかけて斜行沈線が左上から右下方向へ施され、頸部で沈線がねけている。沈線と沈線の間は口縁部で1.9cm、頸部で1cmである。沈線そのものも沈線間も断面が丸みをおびている。外面口縁部から頸部にかけてと内面の底部付近に炭化物の付着がみられる。

3 炭化物集中区(CU)



第16図 第2地区土器集中区(SU)出土遺物 (S=1/3)

CU 1 (第17図)

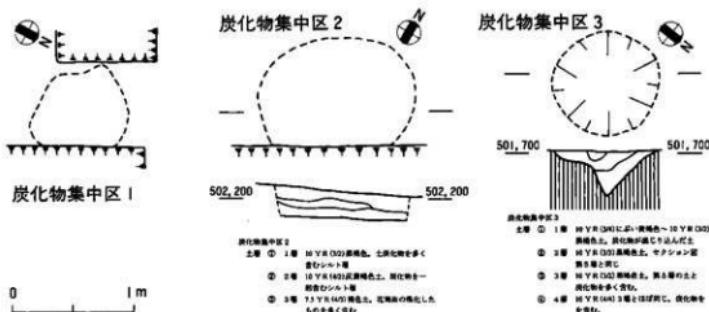
32Dグリッド第5層より、炭化物集中区を確認した。炭化物の粒は約1~2mm程度の大きさでその広がりは0.3~0.4mの範囲である。平面的に広がっている。炭化物¹⁴C年代測定では 3510 ± 90 yrBPと出た。

CU 2 (第17図、図版2)

33Fグリッド第5層北側より炭化物が集中して検出された。径は約1~2mm程度のもので、1.3mほどの範囲に広がっている。深さは0.2m前後で、2層に分かれた両方の層位で確認された。

CU 3 (第17図、図版3)

35Dグリッド第5層で、炭化物の集中区が確認された。約1mの範囲で深さ0.4m前後の掘込みの中で確認された。



第17図 第2地区炭化物集中区(CU)検出状況 (S=1/80)

第2表 細野遺跡第2地区集石遺構一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|-----|----|---------|-------|--------------------------------------------------|
| SI 1 | 34C | 4層 | 1.4×1.2 | 0.5 | 礫1000個近く。炭化物多数 ¹⁴ C測定値6390±120yrBP |
| SI 2 | 33F | 5層 | 0.6×0.6 | 0.3 | |

第3表 細野遺跡第2地区土器集中区一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|-----|----|----------------|-------|----------------------------------------------|
| SU 1 | 36D | 5層 | 1.2×0.3(3×1.5) | | 周間に炭化物多数出土 ¹⁴ C測定値7500±220yrBP |

第4表 細野遺跡第2地区炭化物集中区一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|-----|----|---------|-------|-------------------------------|
| CU 1 | 32D | 5層 | 0.8×0.6 | | ¹⁴ C測定値3510±90yrBP |
| CU 2 | 33E | 5層 | 1.3×0.9 | 0.2 | |
| CU 3 | 35D | 5層 | 0.9×0.9 | 0.4 | |

第5表 細野遺跡第2地区ピット一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|-----|-----|----|-----------|-------|----|
| P 1 | 34D | 5層 | 0.44×0.54 | 0.16 | |
| P 2 | 34F | 5層 | 0.24×0.24 | 0.11 | |
| P 3 | 31C | 5層 | 0.24×0.20 | 0.32 | |
| P 4 | 31C | 5層 | 0.22×0.26 | 0.25 | |
| P 5 | 30B | 5層 | 0.34×0.24 | 0.11 | |

第7節 第2地区の包含層遺物

1 縄文土器

第I群 (第18図8・9、図版15)

8は、横4.5mm×縦3mmの楕円押型文を横方向に施文した土器。器厚は12mmほどある。径1mm前後の粗砂を10%ほど含む。焼成はあまりよくない。9は横4mm×縦8mmの楕円押型文を縦方向に施文した土器。器厚は10mmほどある。どちらも、内面に斜行沈線はないが、高山寺式土器の胴部片と思われる。

第II群 (第18図10~14、図版15)

10~14は、どれも胎土に繊維痕がみられ、内外面に条痕調整のあとを残すことから、縄文時代早期後葉の条痕文土器と思われる。10~13は胴部片。14は底部近くと思われる。

第III群 (第18図15、図版15)

15は、やや外反する無文土器の胴部片。胎土に繊維を含むと思われる。外面は、繊維束のようなもので横方向に調整し、内面は撫調整してある。胎土に繊維痕が見られることから縄文時代早期後葉の土器と思われる。

第IV群 (第18図16~18、図版15)

16~18は、縄文時代中期後葉の土器の胴部片と底部。16は、幅1mmほどの先の角張った工具で斜め方向に器面調整を行った土器の胴部片。内面は、丁寧に撫でてあり、外面に炭化物が付着している。17は、幅4mm程度の先の丸い工具で縦方向に沈線を施したやや外反する土器の胴部片。胎土に径0.5mm前後の金雲母を5%ほど含む。18は、径8cm前後の底部に網代痕がみられる。

第V群 (第18図19、図版15)

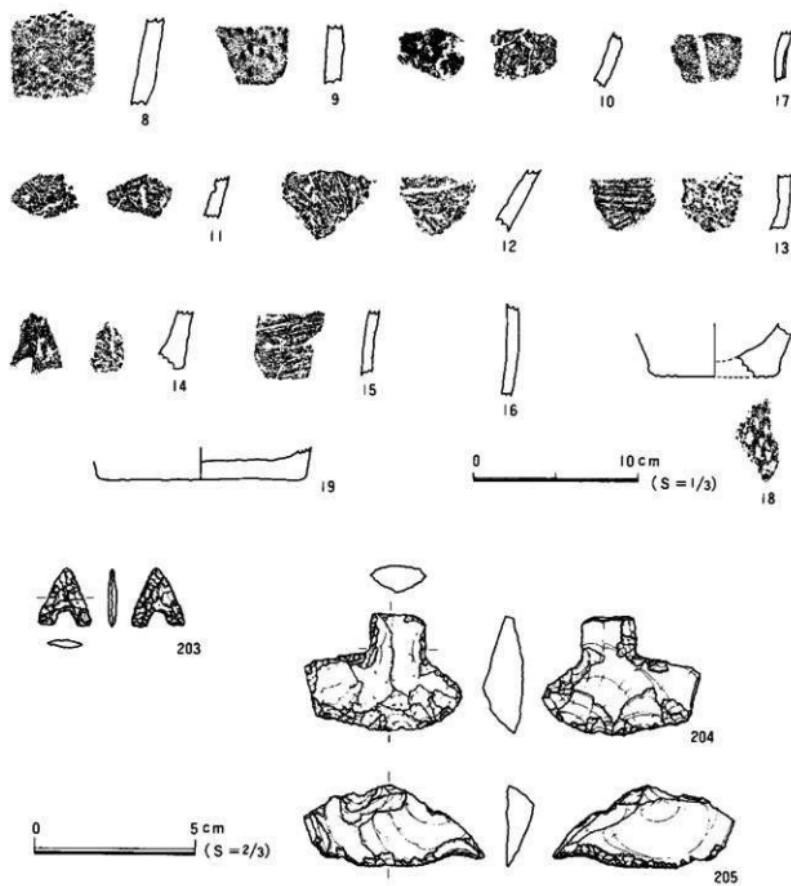
19は、径12.7cmの土器の底部。文様や調整痕はなく、底部がヘラ状の工具でなめらかに調整してある。底部の器厚は10mmを越え、胎土に径1mm~1.5mm程度の長石・泥岩の粗砂が10%ほど見られる。底部の調整などから、縄文時代後期の土器底部ではないかと思われる。

2 石器 (第18図203~205、図版29)

203は、薄手の凹基無茎鐵で、全体に剥離調整を施している。204は、下方を打点とする横長のやや厚手の剥片を素材とし、やや大きめに剥離でつまみ部、刃部を作り出している。さらに、細かな剥離で全体を調整している。205は、剥離面を打面とする横長剥片の下方の表・裏面に細かな剥離調整で刃部を作り出している。右下の角は錐状に加工しており、錐の可能性がある。

3 古代以降の土器

本地区からは瀬戸美濃2点が出土したが、いずれも細片であり図示していない。



第18図 第2地区 包含層 出土遺物

第4章 梨子谷遺跡の調査

第1節 調査の概要

梨子谷遺跡は、千疋集落から西方にあり古田谷左岸段丘上に位置し、古田谷との比高差は20mほどになる。水田・畑地等の耕作面を形成するため、削平と埋土により遺構の存在が不良の部分があった。遺跡は、480m前後から450m前後の4地点にあったが、工事によって削平をうける476m前後の地区と454m前後の地区を第1地区・第2地区として発掘をおこなった。発掘にあたっての地区設定は、国土座標を基準に第20図や第21図のように、4m×4mの区画を設け、北から南へA・B・C、東から西へ1・2・3と番号を付けてグリッド名を表すことにした。

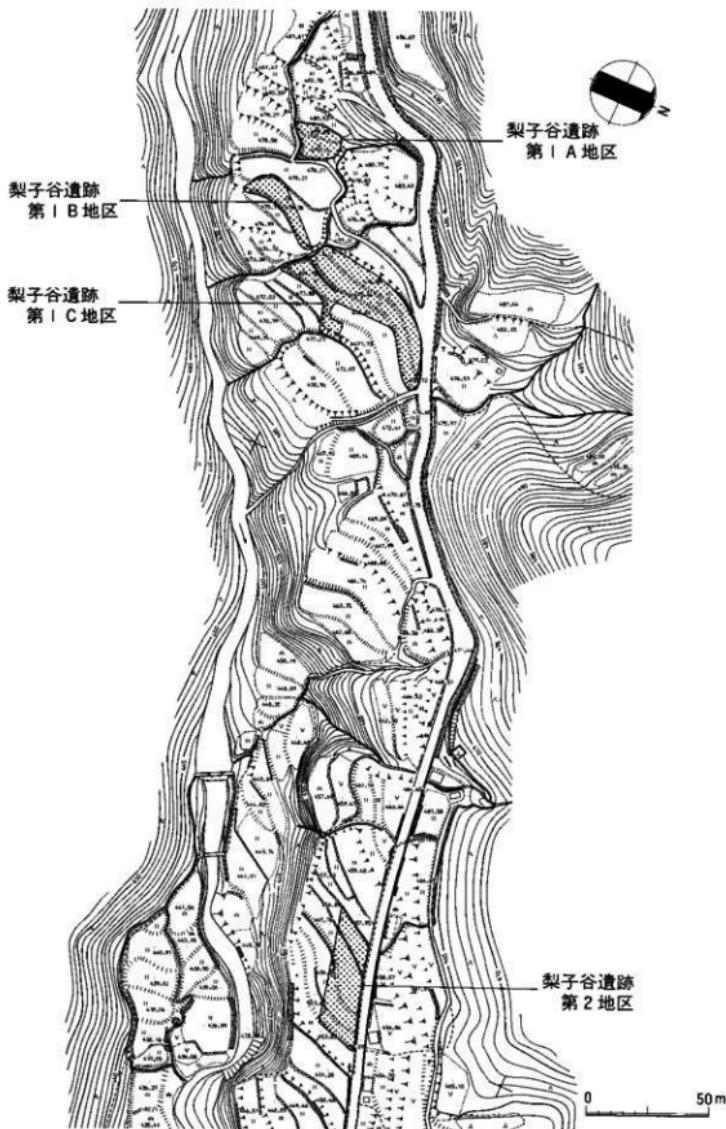
第1地区は、さらに1A・1B・1Cに分けた。1A・1B地区は、縄文時代や中世の遺物が出土したが、遺構らしいものは検出できなかった。1C地区は、縄文時代の遺物が多く出土し、中世の遺物も多少出土した。遺構は、集石遺構を6基、土坑を4基、不明遺構を1、土器集中区を2ヶ所検出した。

第2地区は、東西に長い区域でかなり田面の高低差があった。耕作面の造成や耕作で、以前の地形が削平をうけ、遺構らしきものを検出する事はできず、少量の遺物が出土しただけであった。

第2節 第1地区の基本的層序

土層は、第1層が耕作土(畦土を含む)。第2層が敷土。第3層が中近世を中心とした層で、第4層・5層が縄文時代の包含層と考えられる。

| | |
|---------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1層 黒褐色土 (10YR4/1) | 耕作土。花こう岩風化土壤を含むシルト層。 |
| 第2層 褐灰色土 (7.5YR4/1) | 花こう岩が風化した径5mm程度の石英の礫を含む土壤。金雲母も含まれる。 |
| 第3層 黒褐色土 (10YR3/1) | 花こう岩風化土壤のため、径5mm前後の石英や、径0.5mm程度の金雲母なども含まれる。全体的にシルト質から砂質に近い。 |
| 第4層 黒色土 (10YR1.7/1) | 径2mm～5mmほどの花こう岩が風化し石英の粒が多く見られる土壤。また、径2mm前後の金雲母もみられる。土質はやや粘質のシルト層で、かなり厚く堆積している場所もある。第4層の中でも下方の第5層との境に花こう岩が風化した石英の粒が多い。 |
| 第5層 斧黃褐色土 (10YR4/2) | 第4層と同様に花こう岩が風化したものが多く含まれる。石英、金雲母などが目立つが、第4層との境がはっきりしない部分もある。土質はシルト層が中心で一部砂層の部分もある。 |



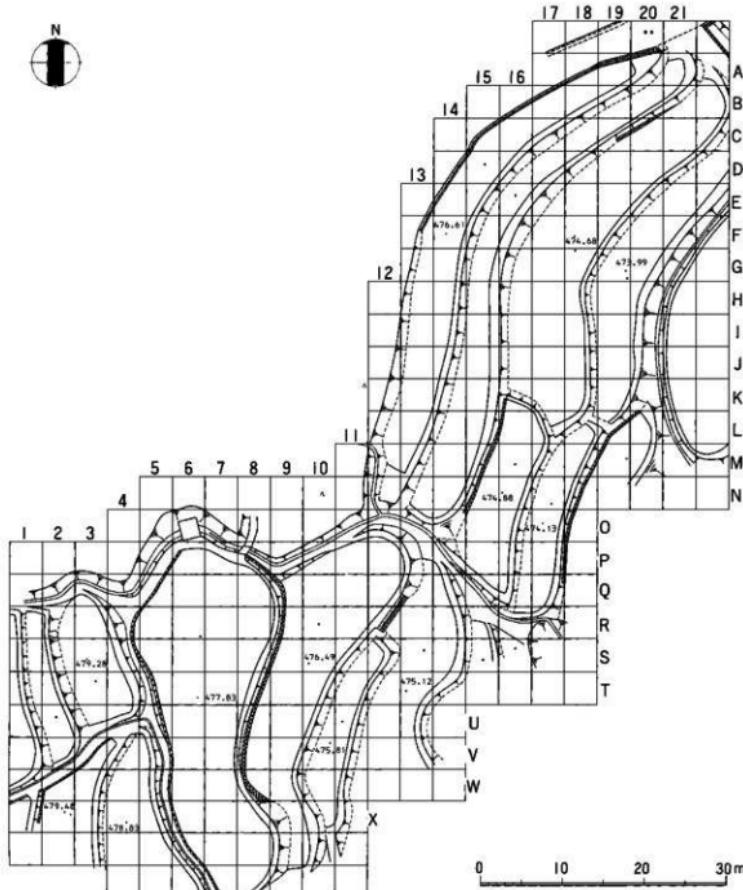
第19図 梨子谷遺跡周辺地形図 (S = 1/2000)

第6層 にぶい黄褐色土（地山）
(10YR4/3)

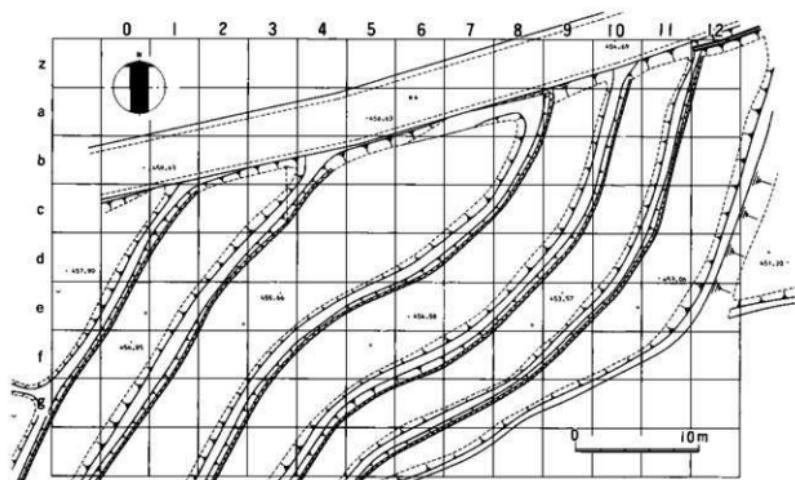
* 噴砂痕(F)にぶい黄褐色土

花こう岩風化土壌で、径5mm前後の石英を含む。土質はシルト質～砂質。（噴砂痕との比較から）

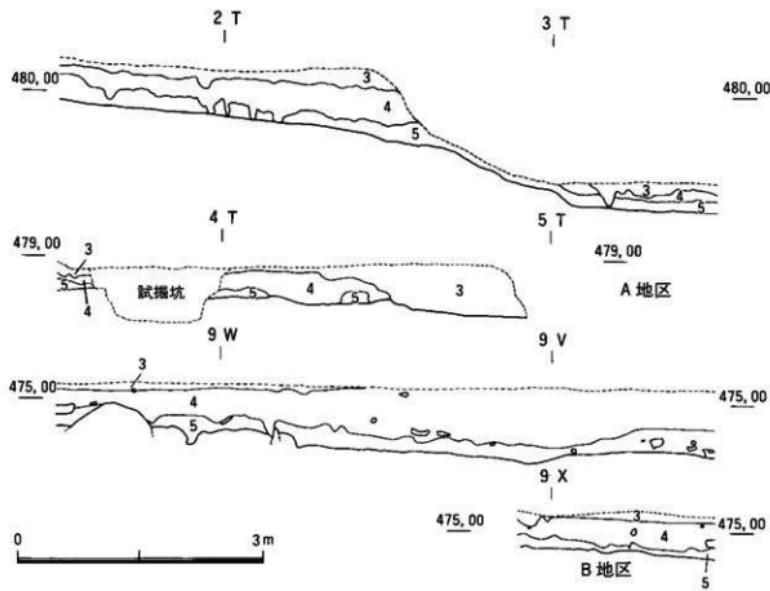
第4層と第6層(地山)に入りこむように黄褐色土が広がっている。セクションで見ると、垂直方向ではなく、やや斜め方向にのびている。噴砂の粒子はそろっていないようである。



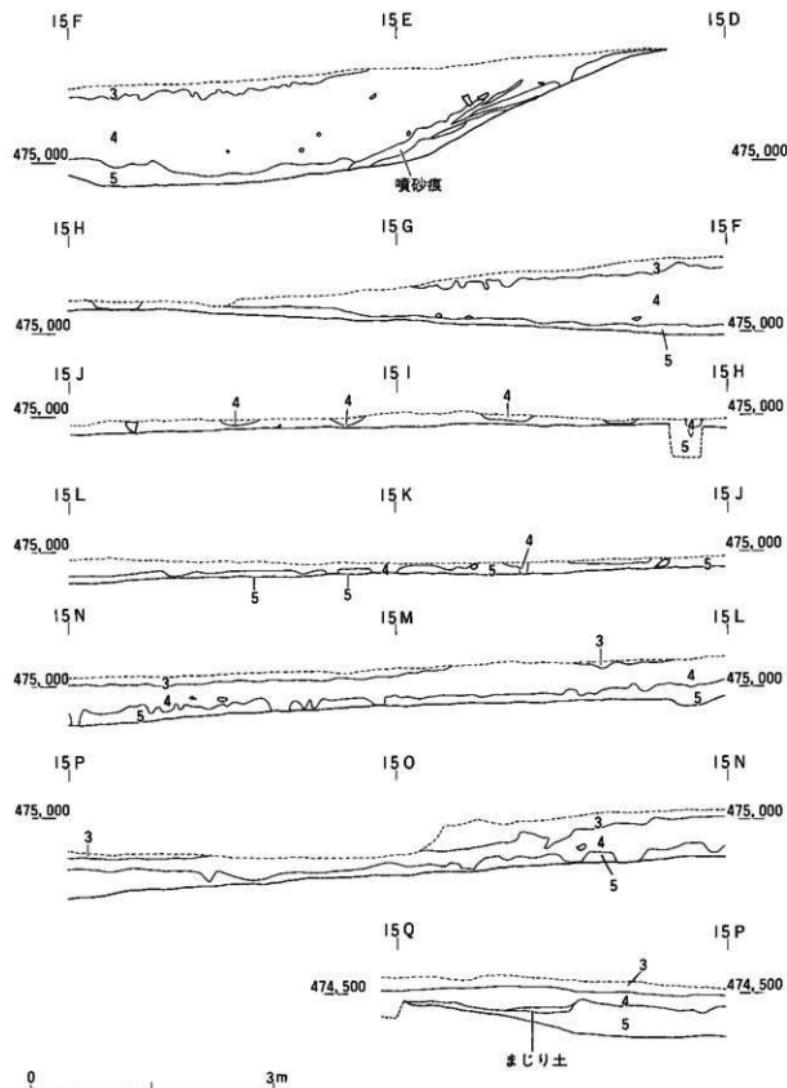
第20図 梨子谷遺跡第1地区 グリット設定期(S=1/600)



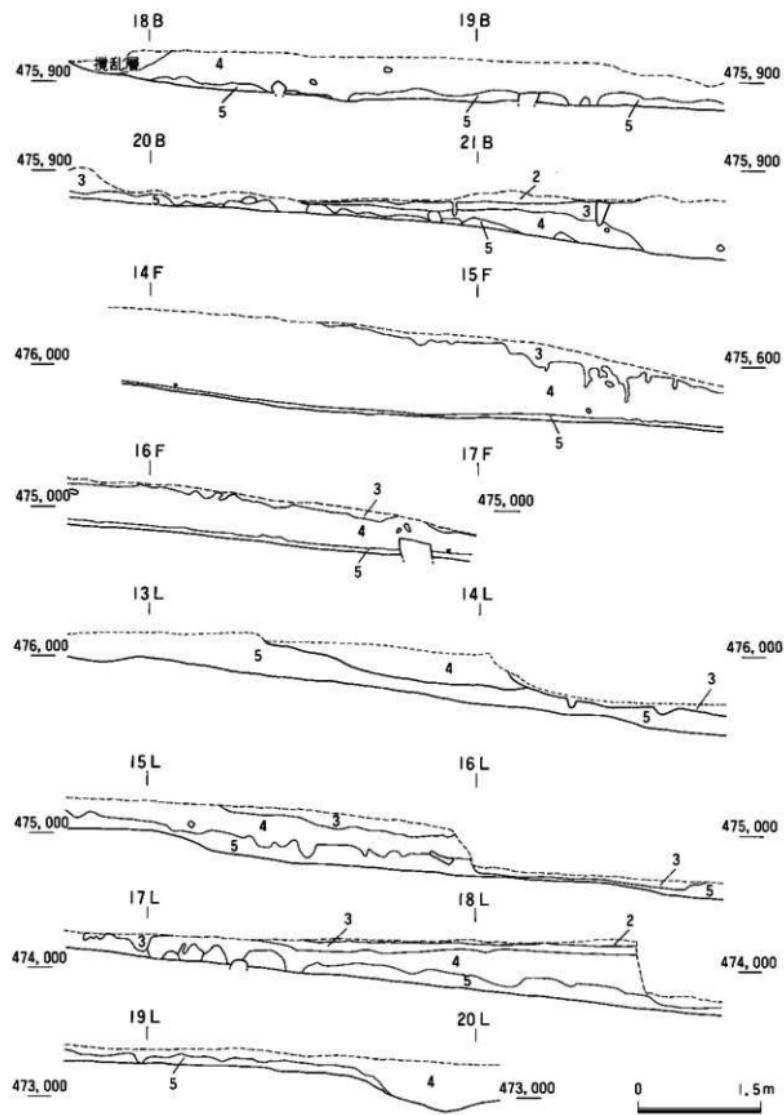
第21図 梨子谷遺跡第2地区 グリット設定図($S = 1/400$)



第22図 梨子谷遺跡第1A地区、第1B地区セクション図($S = 1/60$)



第23図 梨子谷遺跡第1C地区15列西壁セクション図(S=1/60)



第24図 梨子谷遺跡第1C地区 B列、F列、L列、北壁セクション図(S=1/60)

第3節 梨子谷遺跡第1地区の遺構と遺物

1 概要

梨子谷遺跡第1地区(1A・1B・1C)の中で遺構が確認できたのは、第1C地区だけであった。そこで、1A・1B地区は完掘状況を掲載した。ただ1B地区については、地区の北部で自然流路を確認した。

2 遺構に伴う遺物の分類について（包含層も含む）

梨子谷遺跡第1地区の遺構に伴う遺物は、すべて縄文土器であった。包含層からは、中近世の遺物も出土したが、ここでは、遺構に伴う縄文土器の分類を掲載する。なお、包含層出土の縄文土器についても、これから掲載する分類によって行った。梨子谷第2地区との関係は、やや遺跡間に差があり、出土遺物の様相も違うので、出土遺物の分類は別に行った。

縄文土器の分類

この地区からは、縄文時代早期から後期までの遺物が出土しているので、次のように分類を記号化した。

S-○群（縄文時代早期） Z-○群（縄文時代前期）

C-○群（縄文時代中期） K-○群（縄文時代後期）

S-I群 器表面に押型文を施す縄文時代早期の土器。

1類 やや薄手で山形の押型文と格円の押型文を組みあわせたもの

2類 表裏に格円押型文を施すもの

3類 外面に格円または山形の押型文を施し、内面の口縁直下に縦方向の櫛状文を施す土器

4類 外面の口縁直下に斜行沈線を施し、その下に格円押型文を施すもの

5類 外面に格円押型文を施し、内面の口縁から胴部中程まで斜行沈線を施すもの

6類 押型文土器に伴うと思われる無文土器

S-II群 器表面を条痕で調整し、棒状工具で刺突文や押し引きによる文様を施す土器。口縁部と胴部の間に屈曲する段を持ち、胎土に繊維を含む。関東の茅山下層式土器に類するもの。

S-III群 器表面を条痕で調整し、口縁部と胴部に屈曲する段を持つか、段を意識して器表面に刺突を施すもの。胎土に繊維を含む。口縁部から胴部にかけて横方向に連続する刺突文や爪形文を施し、その間に鋸歯状の刺突文・爪形文、縄文などを施す土器。東海地方で八ヶ崎I式と呼ばれているものに相当する。

1類 口縁部から胴部にかけて屈曲する段があり、口縁や段に平行に連続刺突文を施し、口唇部直下の刺突文と口縁と胴部を区画する刺突文の間に、鋸歯状の刺突文を施す土器。

1a類 先の不定形な工具で刺突したもの

1b類 先が丸い工具で刺突したもの

2類 口縁部から胴部にかけて屈曲する段があり、1類に見られた文様が連続爪形文になってい

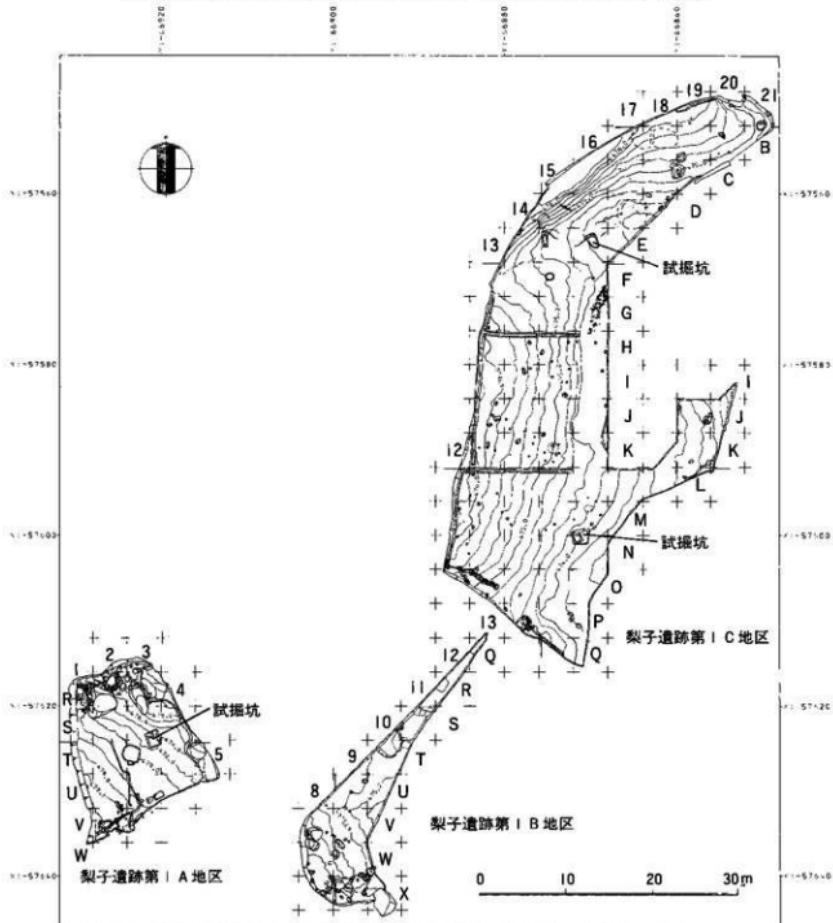
るもの。

2 a類 細長い爪形文を施すもの

2 b類 幅のあるやや大きめの爪形文を施すもの

3類 口縁部から胴部にかけて屈曲する段があり、1類に見られた文様が、貝殻による刺突文になっているもの。

4類 口縁部から胴部にかけての屈曲する段は明確には認められないが、口縁部上端や段がつくと予想されるところに連続する爪形文を施し、その間に網文を施文するもの。



第25図 梨子谷遺跡第1地区 遺構全体図 ($S=1/600$)

(遺構の配置は付図2にあり)

S-IV群 器表面を条痕で調整するが、口縁部と胴部の間に屈曲や段ではなく、S-II群のように文様も顕著に見られない土器。関東の茅山上層式に類するもの。

S-V群 器表面を条痕で調整し、口縁部と胴部の間に屈曲や段がみられない土器。器表面や内面に、口縁に平行に刺突文や爪形文などを施す土器。東海地方の柏原式に類似する土器。

S-VI群 早期の土器かと思われるが、S-I群からS-V群までに当たるまらない土器

S-VII群 胎土に纖維を含み、縄文のみを施した土器

S-VIII群 S-II群からS-IV群に該当する条痕調整をした土器の胴部片。

S-IX群 S-II群・S-III群・S-IV群のものと思われる土器の底部。

Z-1群 胴部に二段の爪形を施す土器。

C-I群 沈線・隆帯・押し引きによる文様を持つ縄文時代中期後葉の土器。

1類 沈線文土器

1a類 沈線のみの土器

1b類 沈線に刺突と縄文を伴う土器

2類 隆帯を伴う土器

3類 押し引きを伴う土器

C-II群 縄文時代中期後半のものと思われる土器の底部。

K-I群 縄文を沈線によって区画した土器

K-II群 口唇部を肥厚させた土器

3 梨子谷遺跡第1C地区の遺構と遺物

1 集石遺構(SI)

第1C地区では、6基の集石遺構を検出した。いずれも第4層の下方である。

SI 1(第26図、図版6)

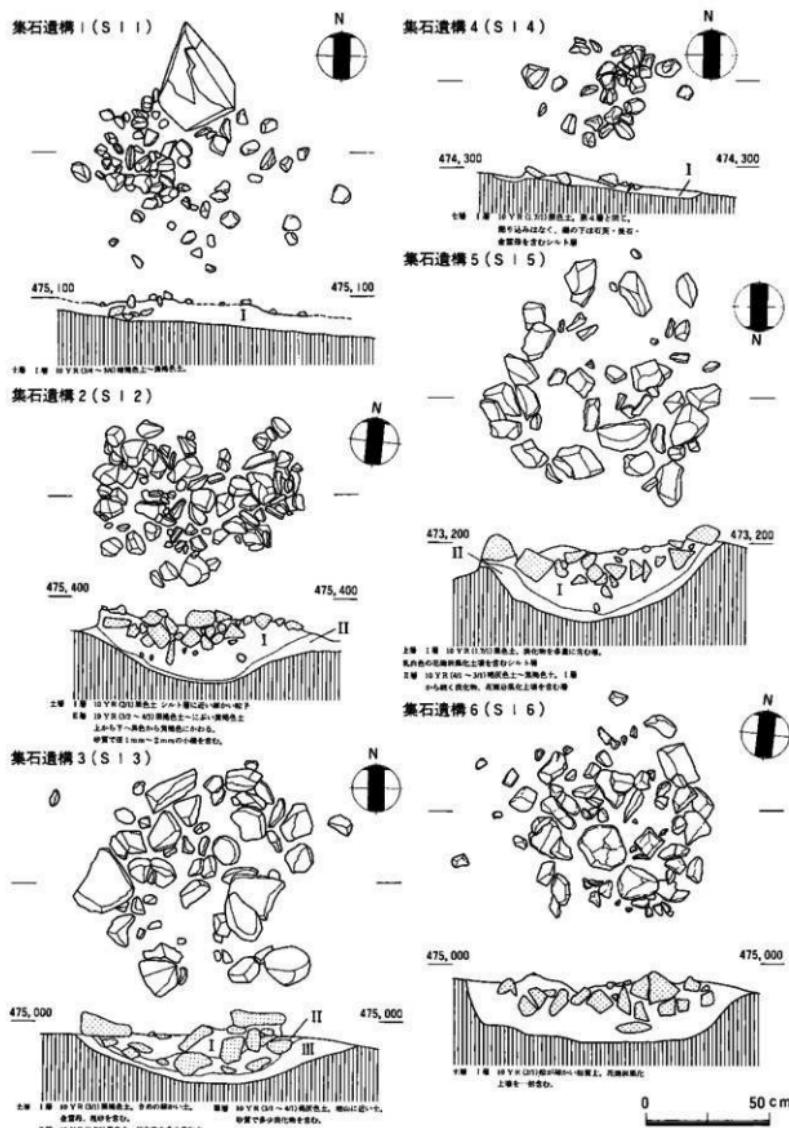
調査区内15Kグリッド中央の第4層の下の方で、直径1.1mの範囲に円碟に近いものと角碟に近いものを半々ぐらい含んだ集石遺構を検出した。掘り込みはなく石を表面に並べたような遺構である。碟の表面に炭化物が付着したもののがいくつかあったが、周辺の土から炭化物はみつからなかった。

SI 2(第26図、図版7)

調査区内16Mグリッド第4層直下第5層直上で、直径0.9mに集石遺構を検出した。碟は多くが角碟または亜角碟である。掘り込みはみられず、表面に並べたような遺構である。遺構周辺から縄文時代早期の押型文土器が出土した。

SI 3(第26図、図版7)

調査区内19Bグリッド第4層の下方で、長さ0.9m×0.7mの大きさの集石遺構を検出した。深さ0.25mほどの掘り込みもあり、碟が200個以上はうり込まれていた。碟の多くは、花こう岩の角碟または亜角碟で、被熱を受けもろくなっているものもあった。掘り込みの下の方に炭化物が付着しており、火を使っていたことがわかった。集石遺構の平面形がいびつである。北からの傾斜に対し東西に幅が



第26図 第1C地区集積遺構(S1)検出状況

広く南北に幅が狭い遺構になっている。周辺部から、無文土器と押型文土器1点が出土した。

SI4 (第26図、図版7)

調査区内19Jから20Jグリッド第4層下方で、直径1mほどの大きさの集石遺構を検出した。深さ0.25mほどの掘り込みがあり、底の方に炭化物も残っていた。150個を越える花こう岩の角礫または亜角礫があった。大きなものは20cm近くのものもあった。被熱した礫はもうかかった。

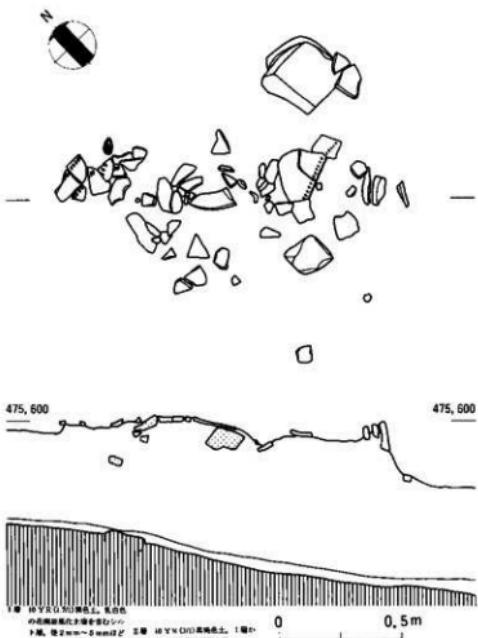
SI5 (第26図、図版7)

調査区内15Fグリッド第4層下方で、直径1.1mほどの大きさの集石遺構を検出した。深さ0.25mほどの掘り込みがあり、底部に炭化物が残っていた。礫は、最上部に平らな礫を2個据えてある。掘り込みの中には、100を越える礫が残っており、その多くが角礫または亜角礫である。炭化物の付着している礫も多く、被熱によって表面が赤くなっているものもある。

SI6 (第26図、図版7)

調査区内21グリッド第4層下方で、直径0.9mほどの集石遺構を検出した。深さ0.25mほどの掘り込みがあり、底部に炭化物が少しあった。礫は、ほとんどが角礫または亜角礫で、炭化物が付着しているものもあった。石材は、花こう岩や花こう閃緑岩のものが多かった。

2 土器集中区(SU)



第27図 第1C地区土器集中区(SU 1)検出状況(S=1/20)

第4層中に2ヶ所繩文土器が集中して出土した。いずれも、第4層が厚く堆積している場所で、集石遺構3(SI3)の近くである。

SU 1 (第27図、図版8)

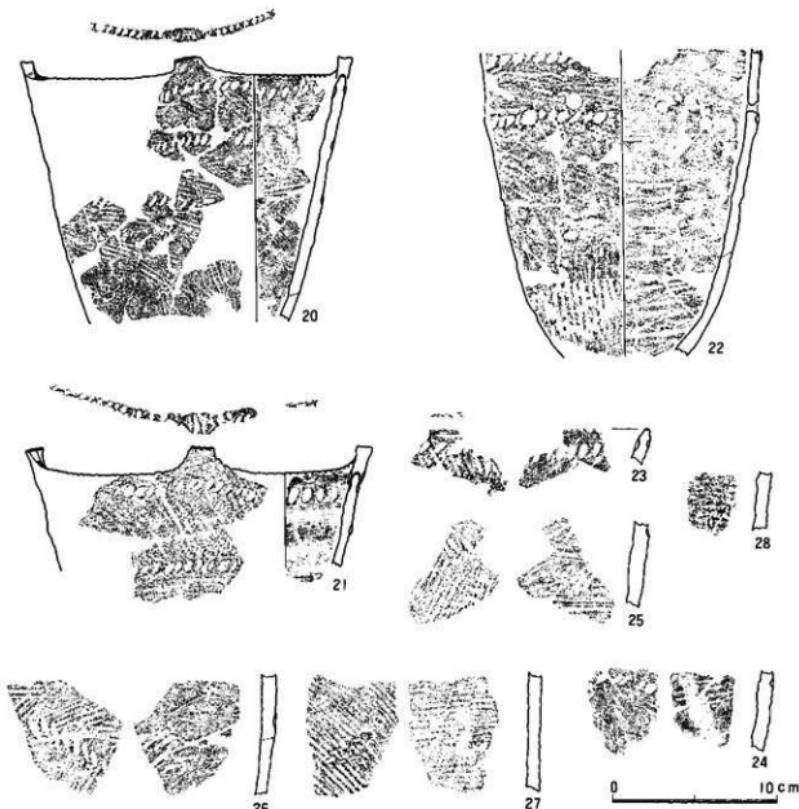
17Bから18Bグリッドにかけて半径0.8mの範囲内に繩文土器が集中して出土した。南北に傾斜しているので、北西から南東にかけて破片が動いたものと推測される。断面でもわかるように、第4層黒色土中層である。

SU 1出土遺物 (第28図20~28、図版16・17)

SU 1からは、70点近い繩文土器が出土した。すべて、繩文時代早期の条痕文土器である。

20は、口径27cmの波状口縁をもつ深鉢型土器。主文様として、器表面には口縁に対し平行にヘラ状

工具で、連続爪形文を3列施している。地文として、1列目と2列目の爪形文の間には、RLの単節斜繩文が施されている。また、2列目と3列目の間には、横方向に貝殻条痕を施し、その上から一部撫でている。3列目以下の胴部には、横方向の貝殻条痕がみられる。波頂部には、 $2 \times 1\text{ cm}$ の小判形の突起がついており、突起上面は貝殻によると思われるキザミが施されている。口唇部内面は一部削られ、その上から撫を施して、少しとがらせた口唇部を上からへラ状の工具で斜めにキザミをいれている。内面は、口縁に沿って1列連続爪形文を施し、他の部分は撫でて仕上げている。断面形をみると、2列目・3列目の爪形文付近に、段を意識したような屈曲もある。底部は無いが、比較的小径の平底底部が予想される。胎土は、石英・金雲母と特に長石を多く含み、纖維痕が認められる。焼成は良好である。土器の特徴から、八ツ崎I式にあたる土器ではないかと思われる。21は、1とほぼ同じであるが、爪形文や、口唇部のキザミの形から20とは、別個体かと思われる。22は、半径11.5cmの深

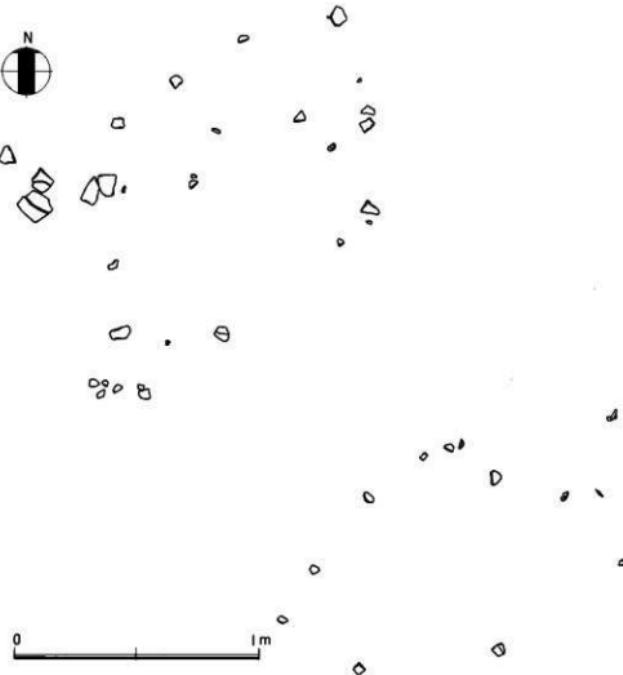


第28図 第1C地区土器集中区(SU 1)出土遺物(S=1/3)

鉢形土器の胴部。連続爪形文を2列持つが、20・21の土器から考えて口縁部にはもう1列爪形文があるものと思われる。2段目と3段目の爪形文の間には、貝殻条痕が施され、3段目の爪形文以下には、横方向の条痕や斜め方向の条痕がみとめられる。23は、20と同一個体ではないかと思われる口縁部。24・25は、20と同一個体ではないかと思われる胴部片。26は、外面に斜め方向、内面に横方向の貝殻条痕を施したもの。条痕の上から蛇行する連続爪形文を施している。27は、横方向の刺突列を持つ条痕文土器の胴部片。刺突列の下は貝殻条痕で斜め方向に調整されている。内面は横方向に条痕調整されている。28は、21と同一個体ではないかと思われる口縁部。外面は、RLの網文を転がしている。どの遺物も外面に炭化物が付着している。20~24・28は、S-III群4類に該当する。25は、S-V群に該当する。26・27は、S-III群2b類または、S-V群に該当すると思われる。

SU 2(第29図、図版8)

17Dグリッド第4層下方で、半径1.6mほどの範囲に、縄文土器が散在した状態で出土した。層位は第5層に近く、黒色土が徐々に薄くなっていくところであった。北からの傾斜がやや緩やかになったところで、やや散らばりがあった。

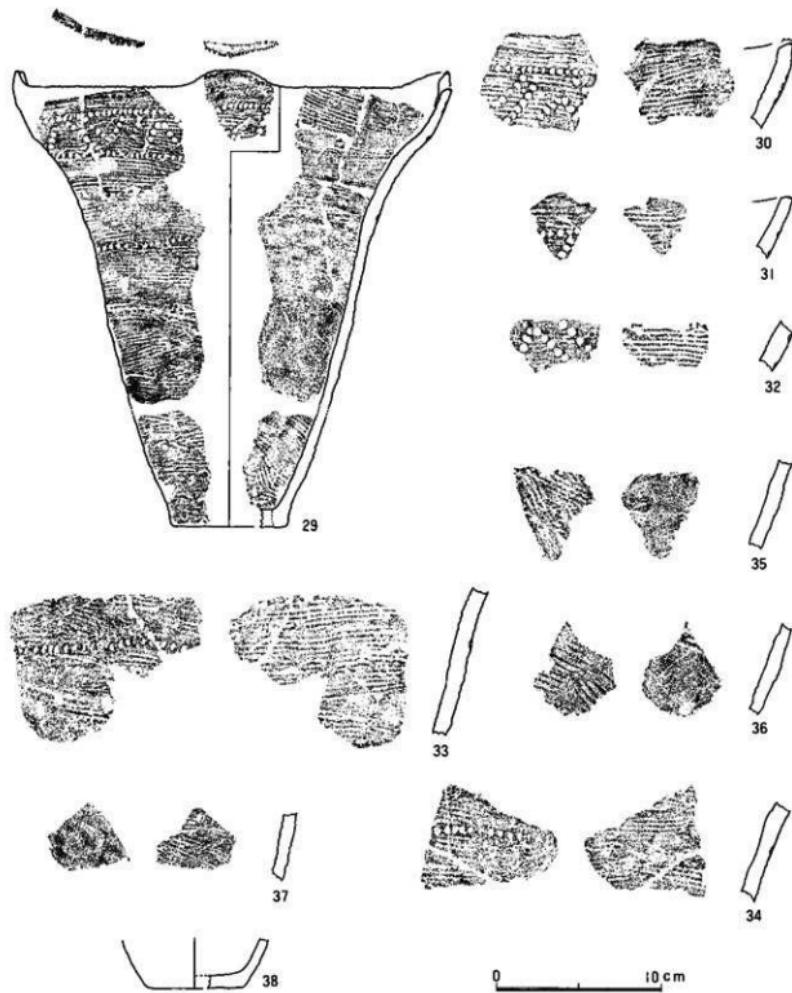


第29図 第1C地区土器集中区2(SU 2)検出状況(S=1/20)

SU 2 出土遺物(第30図29~38、図版16・17)

SU 2 からは、約50点近い縄文土器が出土している。すべて縄文時代早期の条底文土器である。

29は、口径36cm高さ約37cmの波状口縁となる深鉢形土器。器表面には、主文様として口縁に平行に円棒状工具で連続刺突列を3列施している。また、口縁から1列目の刺突列と2列目の刺突列の間に同じ工具で鋸歯状に連続刺突列を施している。この刺突は、円棒状工具をそのまま垂直にたてて文様



第30図 第1C地区 土器集中U 2 (SU 2) 出土遺物 (S = 1/3)

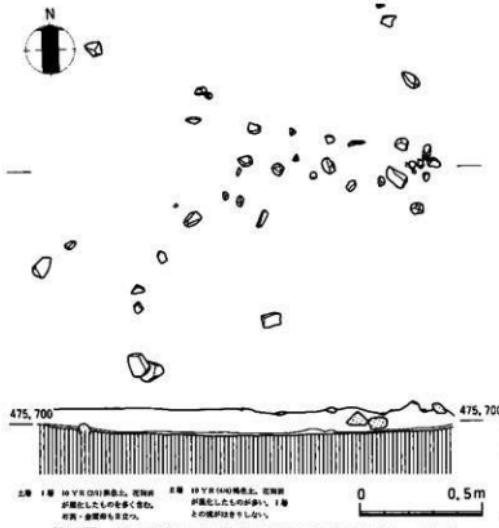
を描いている部分と少し斜めにして押し引き状に施文している部分がある。3列の幅は、鋸歯状の文様を施した1列目と2列目の幅よりも、2列目と3列目の幅の方が広い。さらに、口縁から胴部・底部にかけて、貝殻条痕で調整している。口縁から3段目の刺突列の下までは、横方向に施しているが、胴部下方から底部にかけては斜め方向に施している。口唇部内面は斜めに削られ、少しとがった口唇端にキザミが施されている。内面は、横方向や斜め方向に貝殻条痕で調整されている。断面の形状は、2列目の刺突列でやや段がありその下はバケツ状にさがってくる。底部は、やや小さめの平底底部である。器厚は、厚いところで10mmほどある。胎土は、径0.2mm程度の石英・長石・金雲母を含む。また、纖維痕がみられる。焼成は、普通である。文様や断面の形状、底部の形状などから、八ツ崎I式の段階のものではないかと思われる。30・31・32・33・34は、29と同一個体かと思われる。35は、表面を貝殻条痕で調整した胴部片。36・37も胴部片であるが、29のものよりも器壁が薄く7mm程度である。38は底部である。底の部分は、厚み15mmほど、径8cmほどの小さめの底部である。29-34はS-III群1b類、35・36・37はS-VII群、38は、S-IX群に該当する。

3 不明遺構(SX1) (第31図、図版8)

調査区内の18Bグリッド第4層中に5~15cmほどの角礫が東西方向に並んでいた。角礫はほとんど花こう岩で列の東の方は被熱し割れたものかと思われる。遺構そのものに掘り込みはなく、平面的である。礫集中部より縄文土器片4点が出土した。

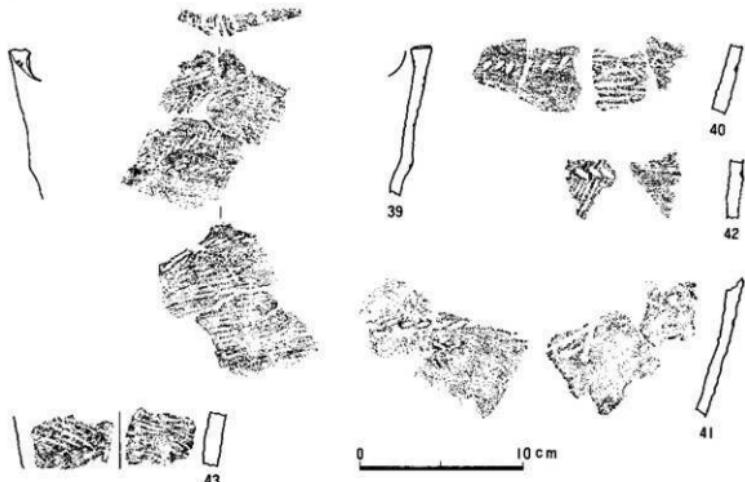
不明遺構出土土器(第32図39~43、図版8)

不明遺構からは、約20点あまりの縄文土器が出土している。39は、波状口縁を持つ深鉢型土器の口縁部。ヘラ状工具を使用し、口縁に平行して連続爪形文を2列施文している。実際には3列あった可能性もある。1列目と2列目の連続爪形文の間には、同じ工具で鋸歯状の爪形文が施されている。爪形文の形状は、SU1で出土した土器の文様に比べ、幅が狭く小さくなっている。口縁部から2段目の爪形文までは、貝殻条痕で調整した後に撫でられ、その上から爪形文が施文されている。2段目の下は、貝殻条痕によって横方向に調整されている。内面には、口縁部に平行に1列の連続爪形文が施されている。内面は、貝殻条痕によって横方向に調整されている。口縁部は、波頂部に小判状の突起がつき、その上から貝殻を使って、



第31図 第1C地区不明遺構(SX1) 検出状況(S=1/20)

キザミが施されている。他の口唇部にも同じように、キザミが施されている。断面の形状は、口唇部内面が削られ、口唇部が少しとがったような形状になっている。また、2列目の連続爪形文のある部分に段があり、逆「く」の字のようになっている。胎土は、細かい石英なども含まれるが、特に長石が多い。また、繊維痕もみられる。焼成は良好である。色調は、外面が黒褐色であるが、内面はにぶい赤褐色に近い。文様や断面の形状などから、八ツ峰I式の新しい段階のものではないかと考えられる。40・41・42は、SU1出土土器の文様に近い連続爪形文を持つ土器の胴部片。何列目の爪形であるかは不明である。40は、比較的綾長の爪形を持ち、41は、40よりも斜めに施した爪形である。42は、斜め方向に貝殻条痕で器表面を調整した後、爪形文を施している。いずれも、繊維痕がみられる。40と42は、内面に貝殻条痕がみられる。42は、SU1の25と同一個体かと思われる。41は、内面も外面と同様に撫が施されている。43は、繊維痕が見られ、内外面を貝殻条痕で調整後撫でて仕上げられている胴部片。39はS-III群2a類、40~42はS-III群2b類又はS-IV群、43は、S-V群に該当する。



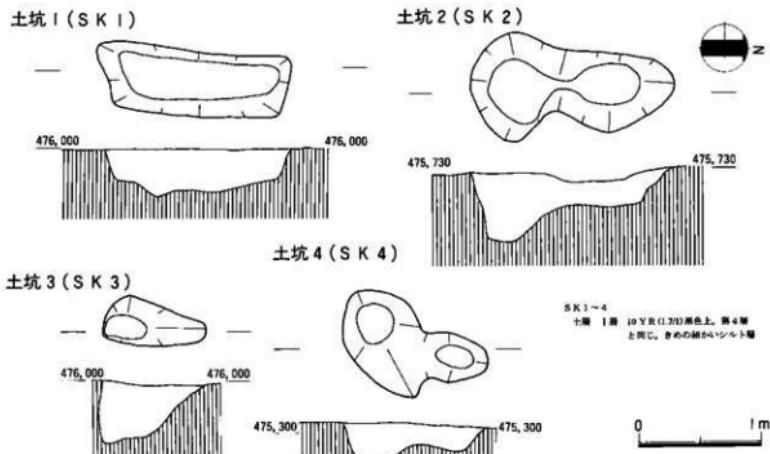
第32図 第1C地区不明遺構(SX 1)1出土遺物(S=1/3)

4 土坑(SK)(第33図)

土坑は全部で4つ検出した。いずれも、不定形である。土坑内の土層はいずれも単層で、第4層黒色土がはいった。遺物は、どの土坑にもなかった。

5 ピット(附図2)

梨子谷遺跡第1C地区からは、全部で28のピットを確認した。いずれのピットも土層は単層でセクションにみられる第4層と同じであった。ピットの中に遺物はみられなかった。



第33図 第1C地区土坑(SK)検出状況(S=1/90)

第6表 梨子谷遺跡第1C地区集石遺構一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|-----|----|---------|-------|---------------------------------------------------------|
| SI 1 | 15K | 4層 | 1.1×1.1 | — | 礫表面に炭化物の付着あり |
| SI 2 | 16M | 5層 | 0.9×0.5 | — | 付近の第5層から押型文土器出土 |
| SI 3 | 19B | 4層 | 0.9×0.7 | 0.25 | 炭化物多数出土。付近より椎円押型文土器出土 ¹⁴ C測定値6750±130yrBP |
| SI 4 | 19J | 4層 | 1.0×1.0 | 0.25 | 炭化物多数出土 ¹⁴ C測定値6120±130yrBP |
| SI 5 | 15F | 4層 | 1.1×1.1 | 0.25 | 炭化物多数出土 ¹⁴ C測定値8400±160yrBP |
| SI 6 | 21A | 4層 | 0.9×0.9 | 0.25 | 炭化物出土 ¹⁴ C測定値7510±200yrBP |

第7表 梨子谷遺跡第1C地区土器集中区一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|-----|----|---------|-------|---------------|
| SU 1 | 17B | 4層 | 1.5×1.0 | — | 第4層の中層位から出土した |
| SU 2 | 17D | 4層 | 1.5×1.5 | — | 第4層の下層位から出土した |

第8表 梨子谷遺跡第1C地区不明遺構一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|-----|----|---------|-------|----|
| SX 1 | 18B | 4層 | 1.0×0.4 | — | |

第9表 梨子谷遺跡第1C地区土坑一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|------|----|---------|-------|----|
| SK 1 | 13K | 5層 | 1.1×1.1 | 0.4 | |
| SK 2 | 14 I | 5層 | 0.9×0.5 | 0.6 | |
| SK 3 | 13G | 5層 | 0.9×0.7 | 0.5 | |
| SK 4 | 15H | 5層 | 1.0×1.0 | 0.3 | |

第10表 梨子谷遺跡第1C地区ピット一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|------|----|-----------|-------|----|
| P 1 | 15K | 5層 | 0.18×0.18 | 0.25 | |
| P 2 | 15K | 5層 | 0.18×0.16 | 0.12 | |
| P 3 | 15K | 5層 | 0.2×0.18 | 0.25 | |
| P 4 | 15K | 5層 | 0.2×0.19 | 0.25 | |
| P 5 | 15K | 5層 | 0.4×0.25 | 0.7 | |
| P 6 | 13K | 5層 | 0.24×0.16 | 0.18 | |
| P 7 | 13J | 5層 | 0.5×0.4 | 0.14 | |
| P 8 | 14 I | 5層 | 0.26×0.16 | 0.08 | |
| P 9 | 14H | 5層 | 0.5×0.4 | 0.15 | |
| P 10 | 13H | 5層 | 0.2×0.16 | 0.19 | |
| P 11 | 15 I | 5層 | 0.3×0.22 | 0.08 | |
| P 12 | 16H | 5層 | 0.28×0.16 | 0.1 | |
| P 13 | 16H | 5層 | 0.16×0.08 | 0.15 | |
| P 14 | 15 I | 5層 | 0.24×0.18 | 0.1 | |
| P 15 | 15 I | 5層 | 0.24×0.16 | 0.17 | |
| P 16 | 13L | 5層 | 0.24×0.2 | 0.1 | |
| P 17 | 14 L | 5層 | 0.26×0.18 | 0.1 | |
| P 18 | 13M | 5層 | 0.44×0.39 | 0.59 | |
| P 19 | 13M | 5層 | 0.16×0.16 | 0.15 | |
| P 20 | 13M | 5層 | 0.28×0.2 | 0.06 | |
| P 21 | 15H | 5層 | 0.36×0.2 | 0.06 | |
| P 22 | 16 F | 5層 | 0.30×0.28 | 0.14 | |
| P 23 | 15M | 5層 | 0.28×0.24 | 0.2 | |
| P 24 | 16H | 5層 | 0.32×0.24 | 0.11 | |
| P 25 | 16M | 5層 | 0.24×0.24 | 0.25 | |
| P 26 | 16M | 5層 | 0.22×0.16 | 0.1 | |
| P 27 | 16 L | 5層 | 0.18×0.18 | 0.08 | |
| P 28 | 16 L | 5層 | 0.18×0.18 | 0.16 | |

第4節 第1地区包含層の遺物

第1地区は、1A地区・1B地区・1C地区の3地区に分かれている。そのうち、1A地区・1B地区については、それぞれ、53点・20点あまりの遺物しか出土していない。1C地区については、1200点あまりの遺物が出土している。3地区とも隣接しており、3地区を一括して分類をした。

1 出土状況

第4層・第5層より出土している。

2 梨子谷遺跡第1A地区の遺物

(1) 縄文土器

S-I群 縄文時代早期の押型文土器（第34図44～53、図版19）

3類 外面に楕円または山形の押型文を施し、内面口唇部直下に縦方向の櫛状文を施す土器。黄島式併行の土器かと思われる。

44は、外面に原体を横方向に転がし、 $3\text{ mm} \times 5\text{ mm}$ の楕円文を施している。口縁内面には、 $30\text{ mm} \times 4\text{ mm}$ の櫛状文を施している。これは、原体の様子から、横方向に転がした押型文の可能性が高い。45・46は、ほぼ同じタイプの押型文の胴部片。器厚は 10 mm ほどある。

47は、横方向に転がした $3\text{ mm} \times 7\text{ mm}$ の押型文をもつ縁部。内面には櫛状文が見られるが、その長さは44より短く $20\text{ mm} \times 3\text{ mm}$ である。48・49は、同じタイプの胴部片。48は、内面に炭化物が付着している。

50・51は、 $6\text{ mm} \times 6\text{ mm}$ の円に近い押型文を持つ土器。口縁内面に $20\text{ mm} \times 3\text{ mm}$ の櫛状文をもつ。

外面の押型文は、口縁近くになると消えている。

52は、 $5\text{ mm} \times 8\text{ mm}$ の比較的大きめの押型文を持つもの。

53は、山形押型文を施す土器の胴部。器厚は 10 mm と比較的の厚い。

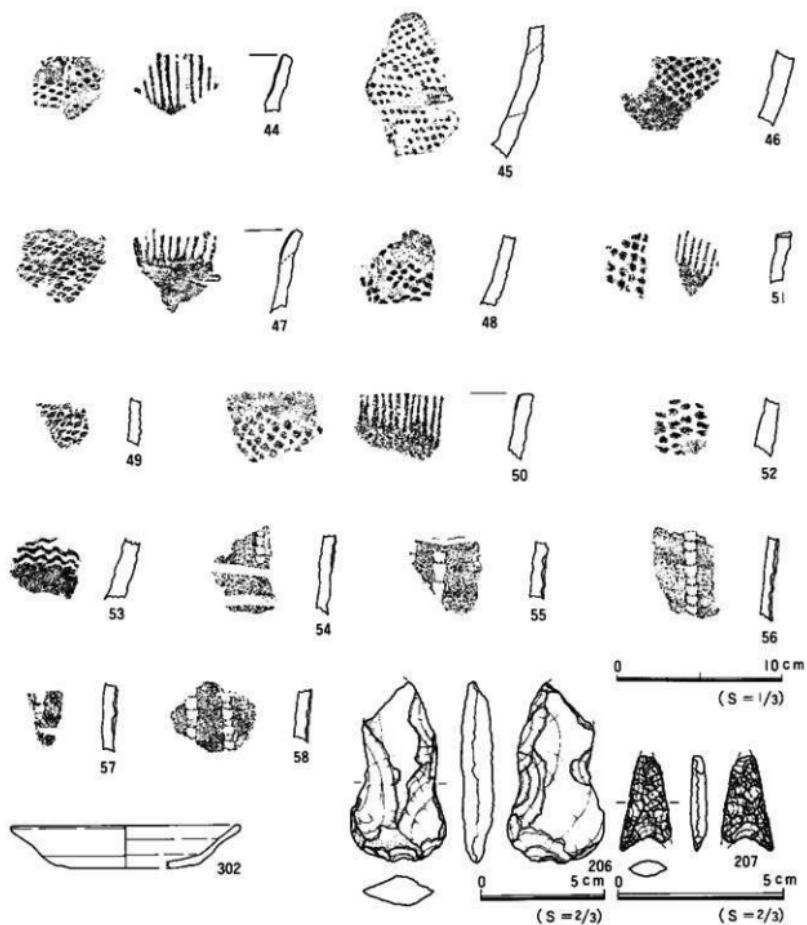
C-I群 沈線・隆帯・押し引きによる文様を持つ縄文時代中期後葉の土器。（第34図54～58、図版19）

3類 押し引きを伴う土器。北白川C式に併行するのではないかと思われる。

54～58は、幅 5 mm から 6 mm 前後の先の丸い工具により縦方向に押し引きを施したもの胴部片。どれも、外反している。押し引きにより、内面には、押さえられた粘土の盛り上がりが見られる。54は、押し引き以外に、同じ工具による横方向の沈線も見られる。胎土は、径 0.5 mm から 1 mm 前後の金雲母が、土器片全体の5%ほどみられる。

(2) 石器(第34図206・207、図版29)

206は打製石斧で、表面に自然面を残す横長剥片を素材とし、側縁部に粗い調整剝離を施している。基部は折損している。207は、厚手の凹基無茎鎌。全体に丁寧な剝離調整を施している。先端部・基部は折損している。



第34図 第1 A地区包含層出土遺物

(3) 古代以降の土器(第34図、図版30)

本地区からは、土師器9点、大甕3点、近世陶磁器2点、合計14点が出土し、そのうち1点(302)を図示した。

302は、土師器である。薄手の作りで、体部外面の強い撫でにより体部が内反り気味に立ち上がり、口縁部は丸く收められている。底部は丸底気味で、底部内面周縁には浅い凹みが認められる。器種は皿ないしは壺で、時期は不明である。

3 梨子谷遺跡第1B地区の遺物

(1) 繩文土器

S-I群 繩文時代早期の押型文土器（第35図59～61、図版19）

3類 外面に楕円または山形の押型文を施し、内面口唇部直下に縦方向の櫛状文を施す土器黄島式併行の土器かと思われる。

59は、4mm×8mm前後の原体を縦方向に転がして施文した押型文土器の胴部片。器厚は、8mm前後ある。60・61は、4mm×8mmの原体を横または、斜め方向に転がして施文した、押型文土器の胴部片。器厚は、10mm前後である。どの土器も、赤褐色をしており、1A地区の土器に類似している。

(2) 石器(第35図208、図版29)

208は、厚手の凹基無茎鎌で、全体に丁寧な剥離調整を施している。

(3) 古代以降の土器(第35図303、図版30)

本地区からは山茶碗9点、瀬戸美濃1点、合計10点が出土し、そのうち山茶碗1点（303）を図示した。

303は、荒肌手山茶碗でありほぼ完存している。外面は底部周辺を除き煤が付着しており、内面は底部が平滑であばた状の凹みが多数ある。さらに黒褐色～褐灰色を呈する有機物が器面にしみ込んでいることから、煮沸具として使用していた時期があるものと思われる。

4 梨子谷第1C地区の遺物

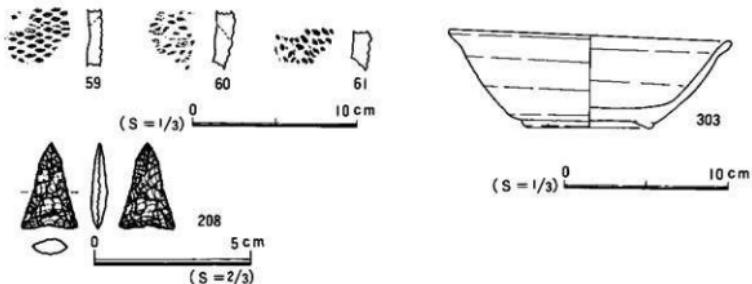
(1) 繩文土器

S-I群 器表面に押型文を施す縩文時代早期の土器。（第36図62～83、図版20）

1類 山形の押型文と楕円の押型文を組み合わせた土器で、細久保式に類似したものと思われる。

62と63は、横方向に山形押型文と楕円押型文を密接して施文している。山形の幅は、15mmほどであるが、原体の幅ははっきりしない。62は、胸部でも下の方でやや斜めに施文してある。

楕円押型文は、3mm×6mmほどの楕円を横方向に転がしている。器厚は、6mm度と薄く、色調は、赤褐色をしている。胎土は、金雲母を比較的多く含み、内面には、炭化物が付着している。



第35図 第1B地区包含層出土遺物

64・65も胴部片である。山形の押型文は見られないが、焼成・胎土・色調などから、同じタイプの土器であると判断した。

2類 表裏に楕円押型文を施す土器で、1類と同様細久保式に類似した土器と思われる。

66は、表裏に $3\text{mm} \times 7\text{mm}$ の大きさの楕円押型文を横方向に転がした口縁部。口縁に屈曲はなく砲弾型の器形になると思われる。色調は褐色で胎土には比較的長石を多く含む。67は同じタイプの土器の口縁部より若干下にあたる。内面にも一部横方向の楕円押型文が確認できる。66では、はっきりと確認できなかったが、胎土に纖維を含む。また、胎土では長石が目立つ。外面の施文は、横方向と斜め方向に施文している。器厚は66よりもやや厚く 8mm ほどある。外面には炭化物が付着している。67も同じタイプの胴部片。66と同じように胎土に纖維が確認できた。

4類 外面の口縁直下に斜行沈線を施し、その下に楕円押型文を施す土器。1類・2類と同様に細久保式に類似した土器ではあるが、押型文の施文方向や口縁部の沈線使用などから1・2類のものよりもやや新しいものではないかと思われる。

69は、口縁部に幅 3mm の沈線を一部施文し、その下に $3\text{mm} \times 7\text{mm}$ の大きさの楕円押型文を、斜め方向に施文している。器形はやや外反している。器厚は 7mm 程度で、胎土に長石が目立つ。色調は褐色で、外面に炭化物が付着している。70も口縁部だが、口縁がやや傾斜し弱い波状口縁になっている。口縁には、幅 3mm ほどの沈線が右斜め方向と一部左斜め方向に施文している。沈線直下には、 $3\text{mm} \times 6\text{mm}$ の楕円押型文を横方向に施文している。68・71~77は、横方向または、斜め方向に楕円押型文を施文する胴部片。楕円の大きさはどれも $3\text{mm} \times 7\text{mm}$ 前後である。器厚は、胴部の位置によって多少異なるが、 8mm から 10mm 程度ある。どれも内面は、撫でによって調整され、胎土に纖維を確認できるものもあった。また、径 0.5mm 程度の長石を多く含み、径 1mm 前後の石英もみられる。

5類 外面に楕円押型文を施し、内面の口縁から胴部中程まで斜行沈線を施す土器で、高山寺式土器に相当する。

78・79は、内面に幅 15mm ほどの斜行沈線を施す土器の胴部片。78は、外面の状態がはっきりしないが、79は、 $6\text{mm} \times 3\text{mm}$ の縱方向に転がした楕円文を施文している。器厚は、 12mm 前後で、外面は明褐色、内面はにぶい黄橙色をしている。胎土では、径 1mm 以上の石英が目立つ。80は、同じタイプの胴部片だが、内面に斜行沈線は見られず、外面には方向のさだまらない押型文が施文されている。器厚は 10mm 前後で、胎土では径 1mm 前後の石英や径 0.5mm 前後の長石が目立つ。

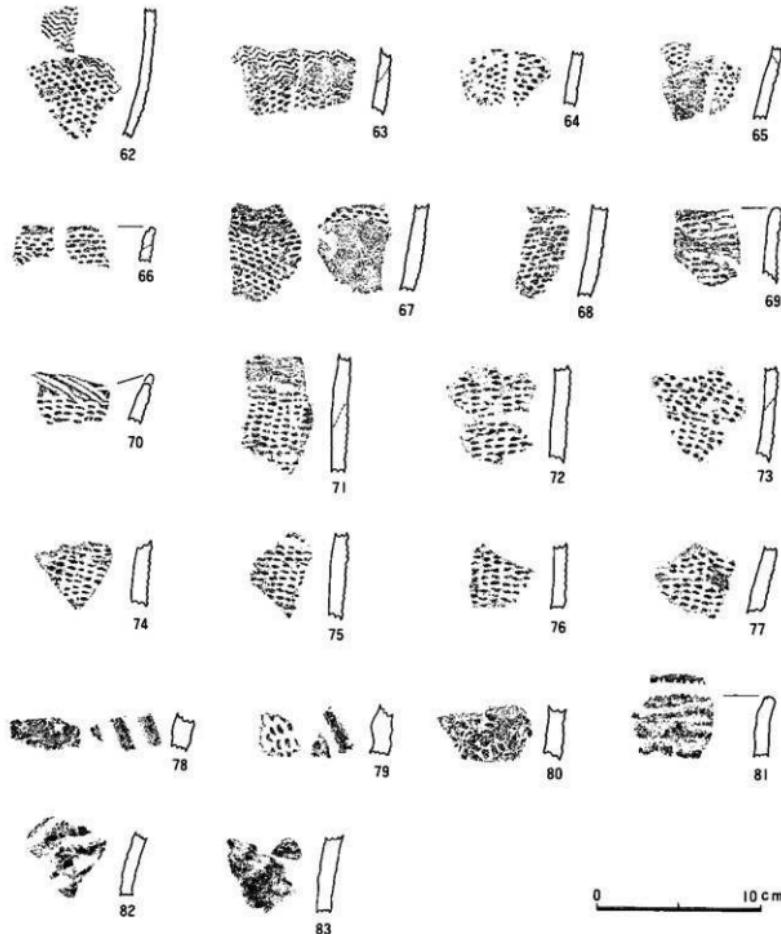
6類 押型文土器に伴うと思われる無文土器

81は、やや外反する土器。口唇部は面取りをし、内面にキザミを施している。内外面とも撫でて調整してある。胎土には、径 1mm 前後の石英が目立つ。色調は、内面が赤褐色で外面が黒褐色をしている。82・83は、同じタイプの土器の胴部片。82は、外反しているため口縁部に近いと思われる。内面に指頭痕のような浅く幅の広い沈線が入っている。83は、断面に径 7mm の丸い礫か木の実のようなものが入っていた痕がみられた。

S-II群 器表面を条痕で調整し、棒状工具で刺突文や押し引きによる文様を施す土器。口縁部と胴部に屈曲する段を持ち、胎土に纖維を含む。茅山下層式土器に類するもの。

(第37図84・85、図版21・22)

84は、口縁部から胴部にかけて段を持つもの。外面には、径2mm程度の円棒状工具を使って口縁に平行に沈線を引き、さらに口縁から同じ工具で半円状に沈線を引いて区画し、その中を押し引き状に刺突を施している。口唇部はヘラ状の工具で面取りをし、口唇部内側を削っている。また、同じ工具で内面を調整している。内外面とも色調は、黒褐色に近い。胎土には径0.



第36図 第1C地区包含層出土物(1)(S=1/3)

2mm程度の金雲母を含むほか、繊維痕が認められる。焼成は良好でかたい。段を持つことから、茅山下層式に相当する土器ではないかと思われる。85は、84に近い段を有する土器の屈曲部分。先端部がやや削れた円棒状工具で段に対し平行または斜状に刺突を施し、口縁との間を区画している。区画内部には、先端がやや空洞になった円棒状工具を曲線的に刺突している。また、区画外は、沈線を引いたものと同じようにやや押し引き状に刺突している。内面は、撫でて調整されている。胎土には、径0.5mmほどの長石が目立つ。84と同じ時期に相当する土器かと思われる。

S-III群 器表面を条痕で調整し、口縁部と胴部に屈曲する段を持つか、段を意識して器表面に刺突を施すもの。胎土に繊維を含む。口縁部から胴部にかけて横方向に連続する刺突文や爪形文を施し、その間に鋸歯状の刺突文・爪形文・縄文などを施す土器。東海地方でハッ崎I式と呼ばれているものに相当する。（第37図86~100、図版21・22）

1類 口縁部から胴部にかけて屈曲する段があり、口縁や段に平行に連続刺突文を施し、口唇部直下の刺突文と口縁と胴部を区画する刺突文の間に、鋸歯状の刺突文を施す土器。

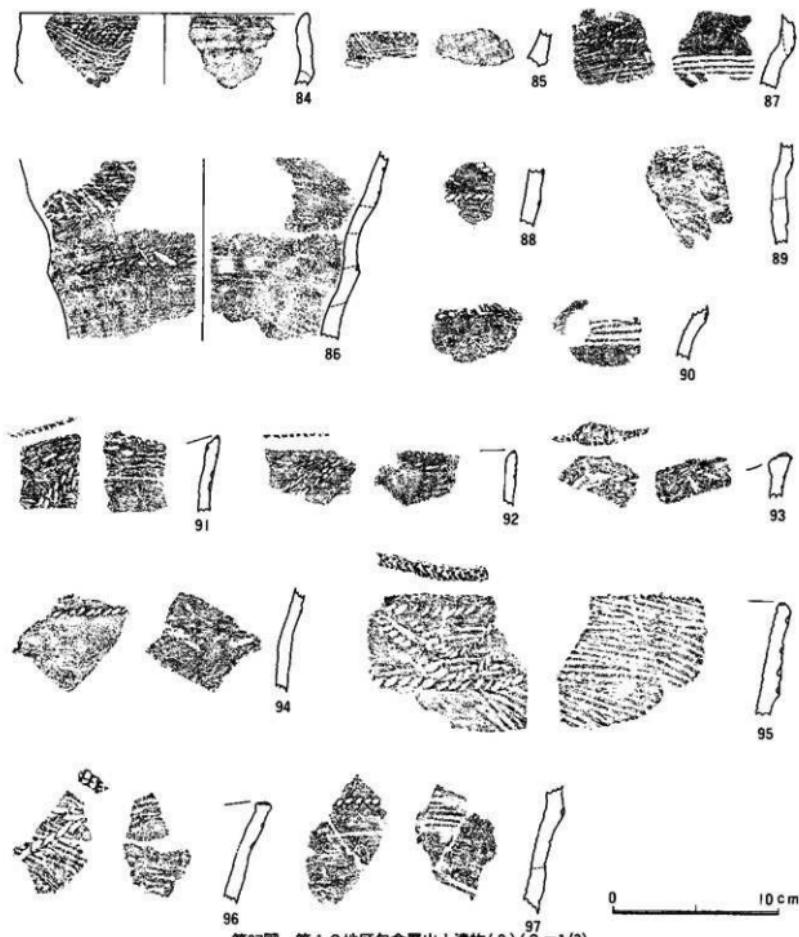
1a 先の不定形な工具で刺突したもの

86は口唇部は欠けているが、口縁と胴部の境および胴部に屈曲した段を2段持ち、段の上から連続刺突文を施している。また口縁部には、鋸歯状の連続刺突文を施している。胴部の段の間や内面は、撫によって調整されている。外面には、炭化物が付着している。胎土には径0.5mm程度の長石や石英が目立つ。また、多数の繊維痕が見られる。87は、段を有し、段の上から連続した楕円状の刺突列を施したもの。その上のおそらく口縁部と思われる部分に鋸歯状になると思われる刺突列を施している。段の上の部分は、内外面とも撫でて調整してあるが、段の下は条痕調整が見られる。胎土には、繊維痕がみられ、径0.1mm以下の石英や長石・金雲母がみられる。88も87と同様であるが、段は弱い。89・90は段を有するが、87・88に比べると連続する刺突列の形が細く、使用した工具が細くより小さなものであることがわかる。

2類 口縁部から胴部にかけて屈曲する段があり、1類に見られた文様が連続爪形文になっているもの

2a 細長い爪形文を施すもの

91は、やや外反する口縁に横方向の連続爪形文と、鋸歯状の爪形文を施すもの。明確に段があったかはわからないが、口縁部の外反の様子から、段をもつ可能性がある。口縁は波状になっている。口唇部は、内面に向かってヘラ状の工具でけずり口唇部をとがらせ、その上から口唇部にキザミをいれている。また、口唇部近くの内面には、1列爪形文が施されている。胎土に繊維痕が見られ、径0.2mm前後の石英・長石が目立つ。外面は、撫でて調整してあり、内面は、条痕調整のあとでている。92は91とはほぼ同じタイプであるが、連続する爪形文がやや狭く口縁部は外反していない。このため、この土器は段を持たないタイプかもしれない。内面にも口縁に沿って爪形文を施している。93は、波状口縁になり、楕円状の突起を口唇部にもつもの。口唇部にキザミが入っている。94は、口縁部と胴部の間に段を有し、その上に連続した爪形文を施す。口縁部に鋸歯状の爪形文が有るかどうかは、不明である。



第37図 第1C地区包含層出土遺物(2)(S=1/3)

2 b 幅のあるやや大きめの爪形文を施すもの

95は、口縁部と刷部の間に段を持ち、口唇部近くと段の上に長さ10mm幅5mm程度の、やや大型の連続爪形文を施し、その間に鋸歯状の爪形文を施している。口唇部は、全面に斜めのキザミを入れている。また、口唇部外面は、連続爪形文に沿って撫でられている。外面は、爪形文以外の部分は、条痕調整の痕がみられ、内面も斜め方向にはっきりと条痕調整の痕がみられる。胎土には繊維痕がみられ、径30mm程度の長石や径1mm前後の石英・金雲母もみられる。焼

成は良好で堅い。

3類 口縁部から胴部にかけて屈曲する段があり、1類に見られた文様が、貝殻による刺突文になっているもの

96は、波状口縁にやや外反する口縁部をもつもの。口縁部と胴部の境と思われる部分がやや屈曲し、段のようになっている。段に対し平行に口縁上部に二枚貝の口の部分を押し当てたような刺突が施してある。また、口縁と胴部の間には鋸歯状と思われる刺突列がみられる。これも貝殻によるものと思われる。口唇部は上面を平らにし、上から貝殻による刺突を施している。口縁部内面にも刺突列が施してある。外面は、条痕による調整痕が見られるが、内面は横方向に撫でてある。胎土には纖維痕がみられ、径1mm以下の石英・長石・金雲母が含まれる。

97は、口縁部と胴部の境に段を有し、段上に貝殻による刺突列を施している。口縁部の鋸歯状の文様は不明である。外面は、撫でて調整してあり、内面は条痕で調整している。

4類 口縁部と胴部の間に屈曲する段を有するかどうかは明確ではないが、わずかに段があると想定できる場所に、横方向の連続爪形文を施し、口縁直下の爪形文と口縁部と胴部を区画した爪形文の間に繩文を施す土器。

98は、LRの半節繩文を施したあと、口縁に平行に連続した爪形文を施している。器表面には外側から孔があけられている。口唇部は丸く仕上げられており、その上からキザミを施している。内面は撫でて調整してある。胎土に纖維を含み、径0.5mm以下の石英や0.2mm前後の長石・石英がみられる。99は、口縁上部は不明であるが、やや外反し、横方向の連続した爪形文を2段もつ。1段目の上にRLの半節繩文を施している。外面は、文様以外の部分は、撫でて調整してある。内面は、条痕調整がみられる。胎土に纖維を含み、径0.1mm前後の石英・長石・角閃石を含む。100は、横方向に連続した爪形文を施し、その上にLrの無筋繩文を横方向に転がして施文している。段ははっきりとみられない。胎土に纖維をふくみ、0.1mm以下の石英・長石を含む。焼成が良好で堅い。内外面とも纖維束のようなもので撫でて調整をしている。

S-V群 器表面を条痕で調整するが、口縁部と胴部の間に屈曲や段ではなく、S-II群のような文様も顕著に見られない土器。関東の茅山上層式に類するもの。

(第38図101・102、図版23・24)

101は、段を持つのか不明であるが、口縁部が緩やかな波状口縁で、波頂部直下に径5mm程度の円棒状工具で、半円状に沈線を施し、その下に2列沈線を横方向に施している。2本目の沈線の下には、横方向に転がしたRLの繩文がかすかにみられる。口唇部は、波頂部を中心に、円棒状工具で押さえ、一部2枚貝の背圧痕がみられる。平らになった両端を円棒状工具で刻んでいる。胎土には、径1mm前後の石英が多く見られるほか、纖維を含む。内面に条痕を施した後撫でている。102は、口唇部を平らにし、外面を刻んでいる。内外面は、条痕のみ施している。焼成が良好で堅い。101・102とも、同じ時期の土器かと思われる。

S-V群 器表面を条痕で調整し、口縁部と胴部の間に屈曲や段がみられない土器。器表面や内面に、口縁に平行に刺突文や爪形文などを施す土器。東海地方の柏原式に類似する土器。

(第38図103~111、図版23・24)

103は、波状の口縁にやや外反する器形をもつ。横方向に連続する大きめの爪形文を有する。口唇部はややとがっていて、キザミを施している。口縁内面にも横方向の爪形文を施す。内外面とも撫でによる調整が見られる。胎土には纖維痕がみられ、径0.5mm以下の石英・長石を含む。104は、口縁に平行して、横方向の2段の爪形文を施している。段ではなく、やや外反するような器形である。口唇部にキザミらしきものもみられる。外面面とも、条痕調整の痕がみられる。胎土には纖維痕もみられ、径0.5mm前後の長石や1mm前後のチャートも見られる。105も段は確認できず、口縁に平行して連続した爪形文がみられる。口唇部は丸く、キザミをを施している。胎土には、纖維痕や石英・長石が目立つ。106・109は、横方向に連続した刺突列を持つ胴部片。内外面とも撫でて調整してある。胎土に纖維を含み、径0.5mm前後の長石・石英がみられる。107は、蛇行する連続した爪形文を持つ土器の胴部片。胎土に纖維を含み、径2mm前後のチャート・径0.2mm前後の石英・長石がみられる。108・110・111は、横方向に連続した爪形文を施した胴部片。108・110は、やや外反する。どれも胎土に纖維を含み、径0.2mm前後の長石を多く含む。

S-VI群 早期の土器かと思われるが、S-I群からS-V群までに当てはまらない土器

(第38図112、図版23・24)

112は、口縁下に斜め方向の沈線を施し、その下に円棒状工具で横方向に刺突列を施している。口唇部はキザミを施している。内面は、撫でて調整してある。色調は、黒褐色で他の土器と異なる。胎土は、0.1mm前後の細かい石英・長石を含む。

S-VII群 胎土に纖維を含み、繩文のみを施した土器 (第39図113~117、図版23・24)

113から117は同一個体の可能性がある。土器の外面全体に繩文を施してある。RLの撫りで0段多条の繩文原体を横方向に転がし、その上から、同じ原体を縄に対してやや斜めに力を加えて、1つの筋がやや細長くなるように転がしている。胎土に纖維がみられ、0.1mm以下の石英・長石がみられる。

S-VIII群 S-II群からS-IV群に該当する条痕調整をした土器の胴部片。

(第39図118~130、図版25・26)

118~120は、胎土に纖維を多量に含み0.5mm前後の長石が目立つ。120は器厚が10mm以上ある。条痕による調整は見られるが、その上から撫でによる調整が施されている。121~129は、胎土に纖維を含む胴部片。121~125・129は、内面の条痕が目立つ。126~128は内面の条痕が目立たない。130は、胎土に纖維を含むが、条痕調整は、内外面とも確認できない。器壁が厚く、焼成も良好である。外面には、撫でによって指の跡が確認できる。



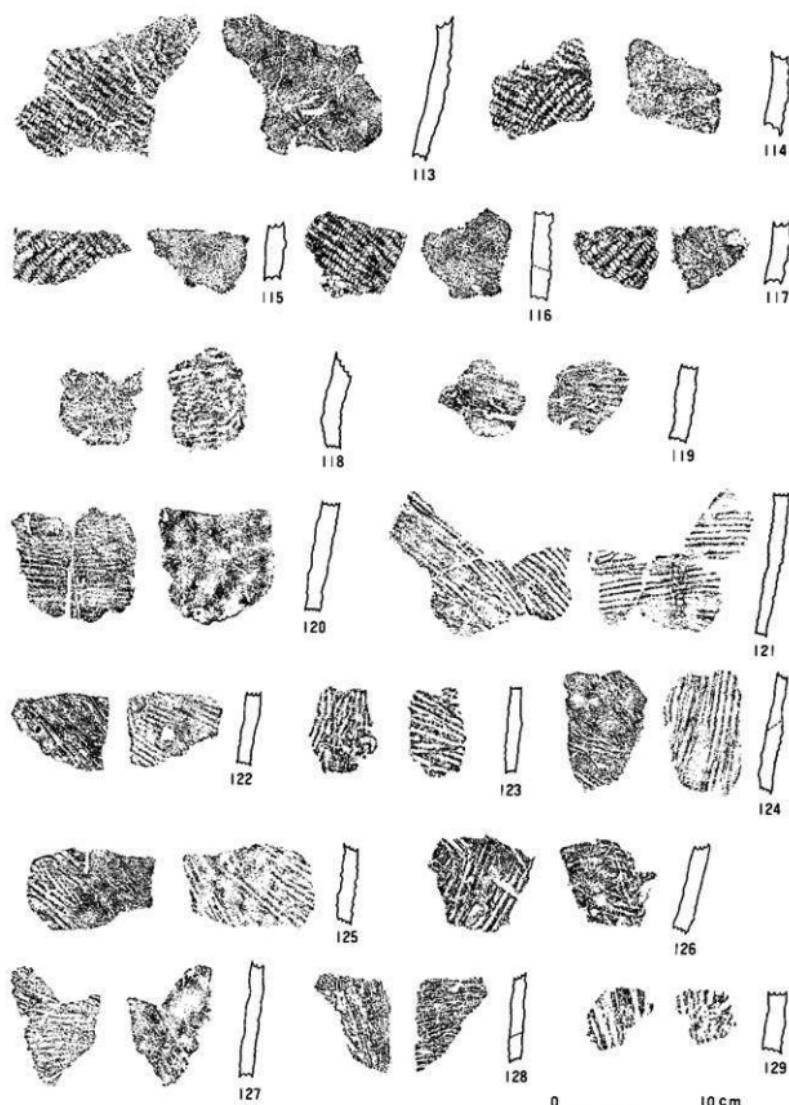
第38図 第1C地区包含層出土遺物(3)(S=1/3)

S-IX群 S-II群・S-III群・S-IV群のものと思われる土器の底部。

(第40図131~135、図版26)

131は、径10cmほどの底部。胴部から急に径が小さくなりやや小さめの底部になっている。

胎土に含まれる繊維は明確ではない。径0.5mmほどの石英・長石・砂岩を含む。132は径7.4cmの小さめの底部。底の部分がやや上げ底になっている。胎土に繊維痕が見られ、径0.1mm以下の長石が目立つ。133~135までは、胎土に繊維を含む底部の一部。134・135は、器壁がやや薄



第39図 第1C地区包含層出土遺物(4)(S=1/3)

く、0.6cm前後である。

Z I 群 脊部に二段の爪形を施す土器。（第40図136、図版26）

136は、頸部から胴部にかけて幅13mmの爪形文を横方向に2段ならべたもの。器壁は薄く、7mmほどである。

C I 群 沈線・隆帯・押し引きによる文様を持つ縄文時代中期後葉の土器。

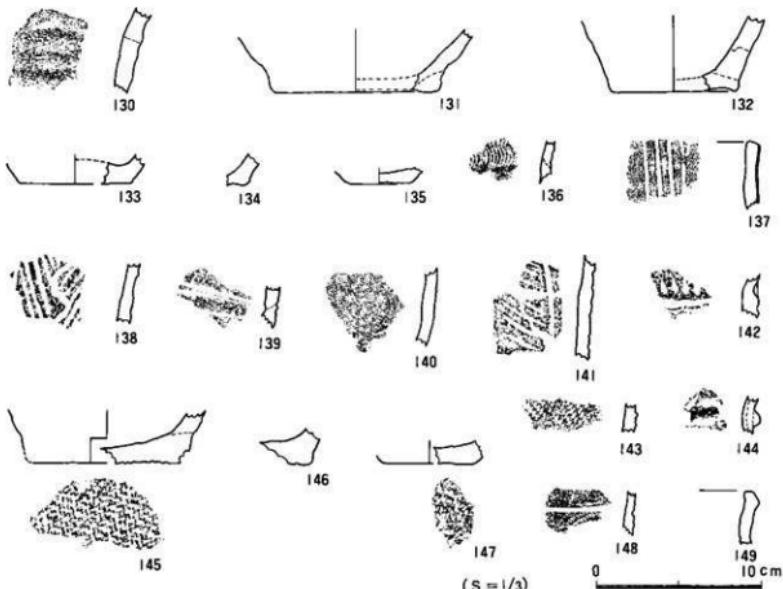
（第40図137～144、図版26）

1類 沈線文土器

1 a 沈線のみの土器

137は、やや外反する口縁から、円棒状工具で縦方向に施文された沈線と串状の工具で斜め方向に施文された土器。口唇部は平らになっており、胎土に径1mmから2mm程度の金雲母を含む。138は、円棒状工具で斜め方向に沈線を施文したあと、縦方向に蛇行する沈線を施した土器の胴部片。径1mm前後の長石・金雲母が目立つ。139は、縦方向の沈線を施した土器。140は、斜め方向に細い条線状の施文をしたもの。いずれも、縄文時代中期後半の土器かと思われる。

1 b 沈線に刺突と縄文を伴うもの



第40図 第1地区包含層出土遺物(5)(S=1/3)

141～143は、同一個体と思われる。141は、沈線による縦長の区画を施した後、区画内に斜め方向の沈線をほどこしたもの。142は、横並びの刺突の下に、横方向の沈線を2段施文したもの。143は、RLの単節繩文を横方向に転がして文様をつけたもの。いずれも、径1mm前後の長石や砂岩を含む。

2類 隆帯を伴う土器

144は、頸部に横方向の張り付け隆帯を施したもの。

C-2群 繩文時代中期後半のものと思われる土器の底部。（第40図145～147、図版26）

145は、径9.6cmの土器の底部。底に網代痕をもつ。外面は、撫でて調整してある。胎土は、径2mm前後の石英・長石・金雲母を含む。146・147も石英・長石・金雲母を含む底部。

K-1群 繩文を沈線によって区画し、磨消した土器（第40図148、図版26）

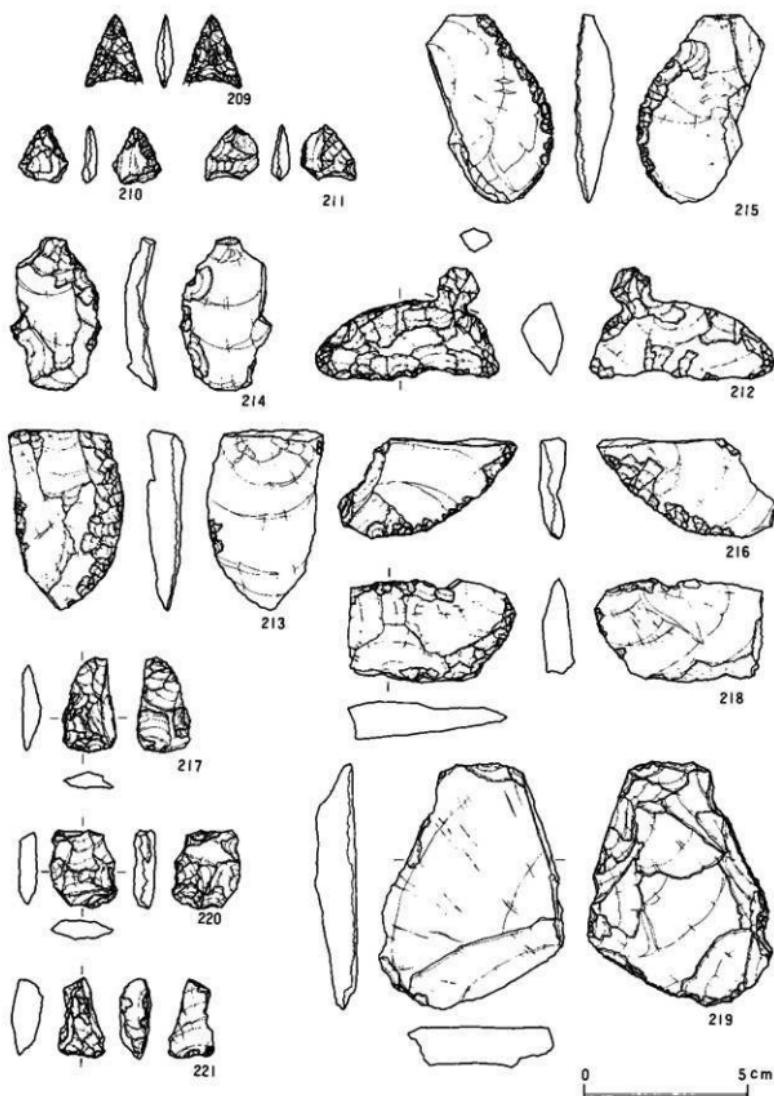
148は、LRの単節繩文を横方向に転がし、横方向の沈線で区画したもの。器壁が薄く5mmほどである。繩文後期初頭の土器ではないかと思われる。

K-2群 口唇部を肥厚させた土器（第40図149、図版26）

149は、口縁部に粘土をたして、口縁部をやや肥厚させた土器。肥厚させた部分は、撫でて調整してある。

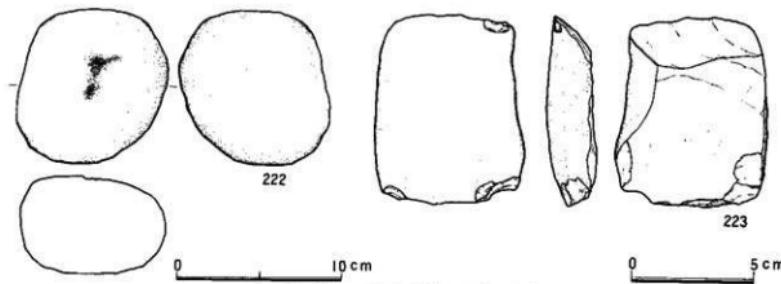
(2) 石器(第41・42図209～223、図版29)

209は、厚手の凹基無茎鐵で、全体に剥離調整をした後さらに微細な剥離を施している。210は、やや厚手の剥片を素材とし、両側辺に粗い剥離を施し、先端部、基部を作り出している。石鐵の未製品と考えられる。211は、やや厚手の剥片を素材とし、右側辺に粗い剥離を施し、全体を整形している。石鐵の未製品と考えられる。212は石匙で、上方を打点し正面に自然面をわずかに残す横長のやや厚手の剥片を素材としている。やや大きめの剥離で、つまみ部、刃部を作り出し、さらに細かな剥離で全体を整形している。213は削器で、剥離面を打面とする縦長剥片を素材とし、表面の右側縁部に剥離調整を施している。右側縁部と左側縁部中央に使用痕とも考えられる微細な剥離痕あり。214は搔器で、自然面を打面とする縦長剥片の上方から右側縁部にかけて粗い剥離調整を施している。表面に自然面が残る。215は削器で、剥離面を打面とする縦長剥片を素材とし、右側縁部の表・裏面に剥離調整を施している。右側縁下方に微細な剥離痕あり。216は削器で、節理面を打面とする厚手の剥片を素材とし、右側辺に剥離調整を施している。217はくさび形石器で、厚手の剥片の対になる辺に中央まで達する大きめの剥離を残す。ただし、側辺には微細な剥離痕を残すことから両極技法によって全体を剥離整形したあとに搔器として使われたものと思われる。218は削器で、上方を打面とする縦長剥片を素材とし、表面に大きな剥離痕と上方の一部と右側縁部に粗い剥離調整が施されている。下方に自然の面が残る。219は削器で、左側縁を打面とする剥片を素材とし、下方を残して全周を大きな剥離によって整形している。右側縁部と下方に微細な剥離痕が見られる。220は、くさび形石器で、厚手の剥片の対になる辺に中央まで達する大きめの剥離を残す。ただし、側辺には微細な剥離痕を残すことから、両極技法によって全体を剥離整形したあとに搔器として使われたものと思われる。表面



第41図 第1C地区包含層出土遺物(6)(S=2/3)

には節理面・裏面には主要剥離面が残る。221はくさび形石器で、厚手の剥片の対になる辺に中央まで達する大きめの剥離を残す。ただし、側辺には微細な剥離痕を残すことから両極技法によって全体を剥離整形したあとに撞器として使われたものと思われる。222はRFで、下方を打点とする剥片を素材としている。下方に階段状の剥離を加えることによって刃部を作り出している。裏面には、大きく自然面を残す。223は凹石で、円礫を利用し、表面中央に凹部がみられる。



第42図 第1C地区包含層出土遺物(7)

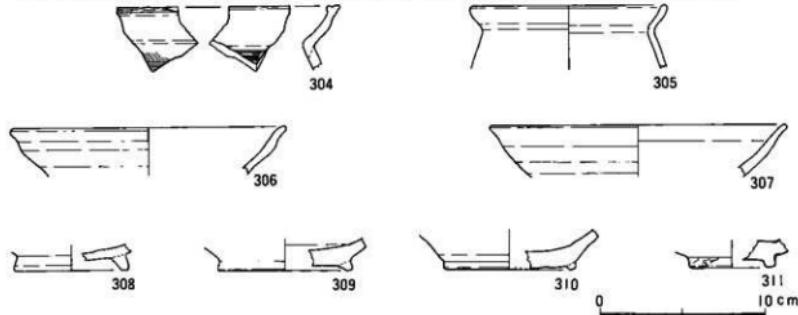
(3) 古代以降の土器(第43図304~311、図版30)

本地区からは、土師器64点、須恵器1点、灰釉陶器5点、山茶碗9点、青磁1点、瀬戸美濃1点合計81点が出土し、そのうち8点(304~311)を図示した。

304・305は、土師器壺である。304は、体部と口縁部の境がくの字状に屈折し、体部外面に横ハケ、体部内面に右下がりの斜めハケ後横ハケが施されている。口縁部は外面中程に稜を有し、内面は受口状に内彎している。また、口縁部はわずかに肥厚し上面が若干四んでいる。305は304より薄手であり、口縁部内面がわずかに内彎し、端部を丸く収めている。

308は、灰釉陶器碗であり、高台内外面が外傾し、接地面は平坦である。

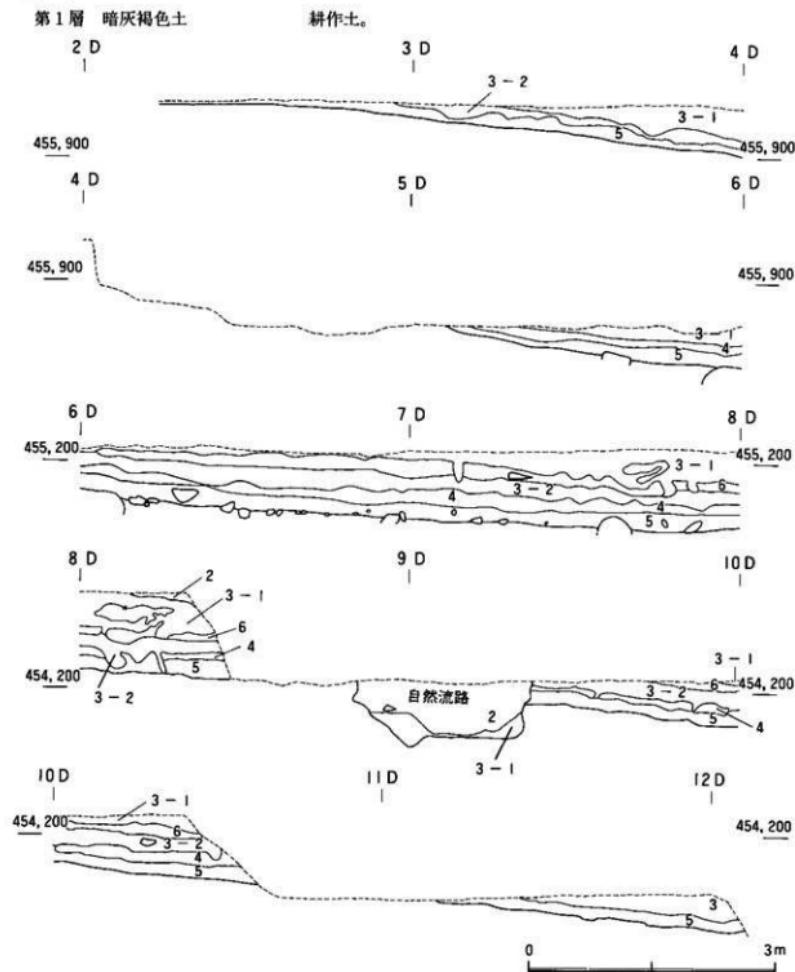
306・307・309・310は荒肌手山茶碗である。306は細野遺跡出土の山茶碗と同じ胎土を有し、口縁部がわずかに外反している。311は、青磁碗であり、高台内面と設置面を除き施釉されている。



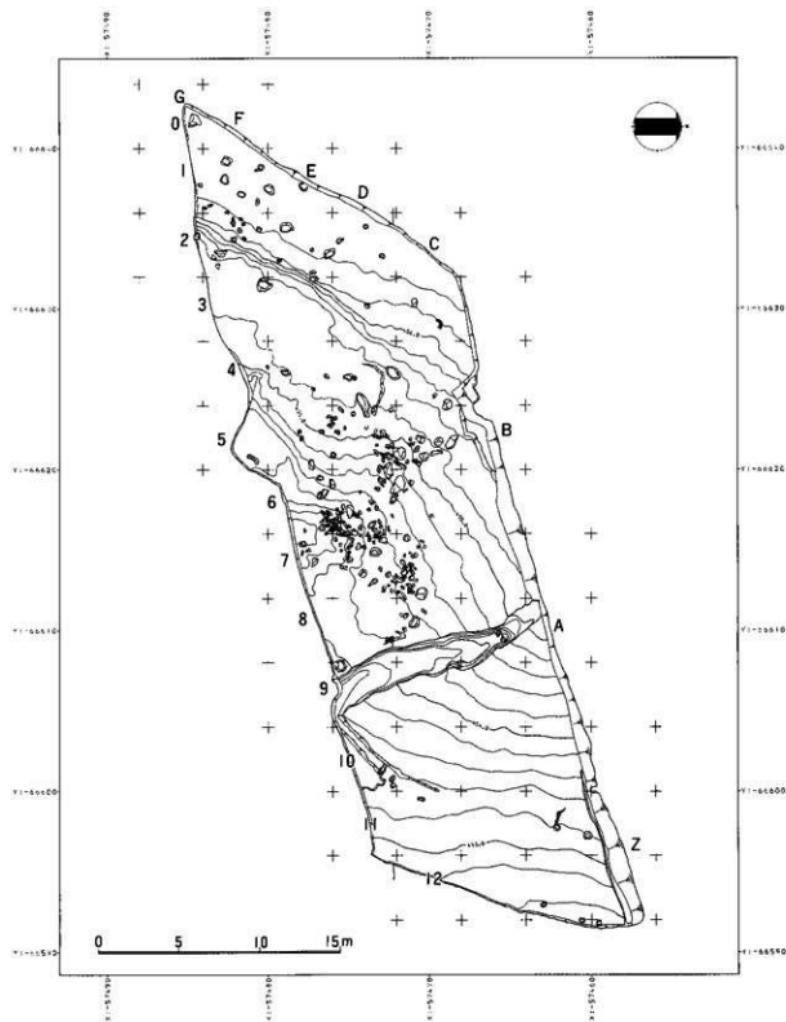
第43図 第1C地区包含層出土遺物(8)(S=1/3)

第5節 第2地区の基本的層序

土層は、第1層が耕作土（珪土を含む）。第2層が敷土。第3・第4が中近世の耕作面で、第5層が縄文時代から古代にかけての包含層と考えられる。なお、第2地区は遺構がないため、完掘図のみ掲載した。



第44図 梨子谷遺跡第2地区D列セクション図 (S = 1/60)



第45図 梨子谷遺跡第2地区発掘図($S=1/300$)

第2層 灰褐色土 (7.5YR 4/2) 敷土。径3mm程度の花こう岩が風化した土壤を多く含む。

第3層-1

黒色土 (10YR2/1) きめの細かいシルト層。ガラス質のものを含む乳白色の花こう岩風化土壤を含む。

第3層-2

黒褐色土 (10YR3/2) 第3層-1に似ているが、やや黒が薄い。径3mm白色の花こう岩の風化した礫を含む。

第4層 にぶい黄褐色土

(10YR5/4) きめの細かい粘質土。乳白色の花こう岩風化土壤を含む。

第5層 暗褐色土 (10YR3/3) ねばりけがあり、粘土質である。所々に炭化物を含む。また、地山との境に多量の礫を含む。

第6節 第2地区の発掘状況 (第45図)

第2地区は、東西に長い発掘地区であるが、耕作面を作るため東西の傾斜地が削平を受け、階段状になっていた。部分的に包含層も存在していたが、多くが耕作土の下に地山面が見られるところが多くかった。また、8Aグリッドから9Dグリッドにかけて、地山面をえぐるように自然流路がみられた。流路からは遺物は出土せず、第3層と同じ土と多量の砂がみられた。

第7節 第2地区の包含層遺物

1 繩文土器(第46図150、図版26)

150は、無文土器の口縁部である。やや外反する土器の口唇部は平らにしてあり、その面に刺突が施してある。内面は、撫でて調整してある。時期不明である。

2 古代以降の土器(第46図312・313、図版30)

本地区からは土師器2点、大窯2点、瀬戸美濃1点、合計5点が出土し、そのうち2点(312・313)を図示した。

312は、大窯第1段階の擂鉢、313は、密窯末～大窯第1段階の天目茶碗である。312は、擂目が口縁端部まで伸びている。



第46図 第2地区包含層出土遺物 (S=1/3)

第5章 千日遺跡の調査

第1節 調査の概要

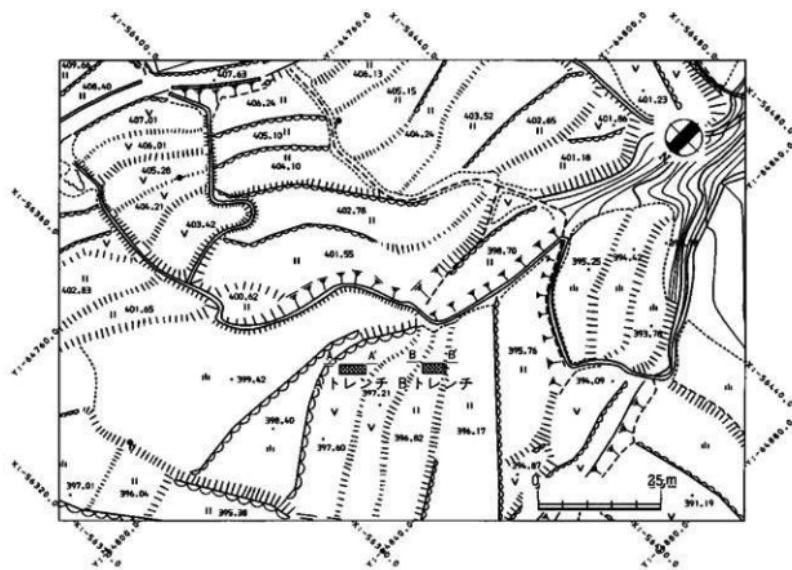
千日遺跡は、表川を挟んで形成される市瀬集落の西方にあり、表川の形成した2段の段丘面の下位段丘面にある。面積は、200m×150mほどの広さで南西に傾斜している。標高は395m前後で、表川との比高差は2m前後である。

発掘調査区域の設定は、段丘面の北東から南西に向けて幅2m×5mのトレンチを2本設定し北側をAトレンチ、南側をBトレンチとした。調査は、重機を使用して層位ごとに掘削し作業員で遺構および遺物の確認を行った。

河川に近いため水分を多く含んだ土壌で、黒色の堆積層は1m近くになるところもあったが、遺構は確認できず遺物も縄文土器や山茶碗等が混在していた。

第2節 千日遺跡の基本的層序

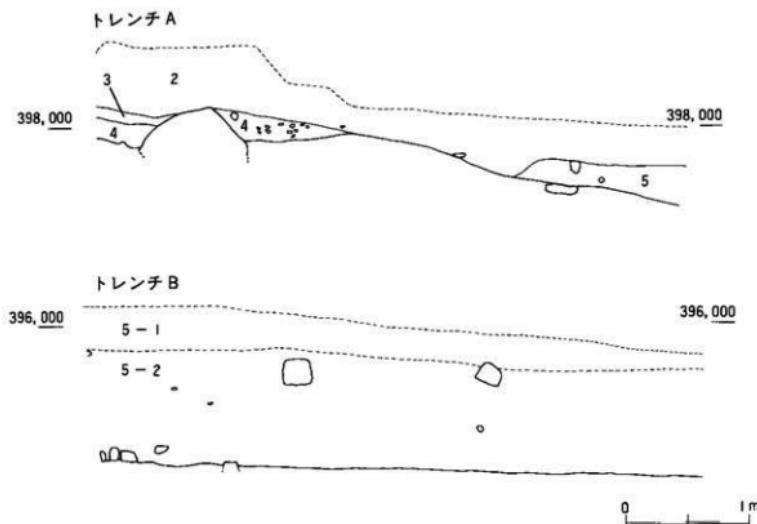
土層は、第1層が耕作土。以下第5層まである。山茶碗および縄文土器が混在して出土したのが、



第47図 千日遺跡周辺地形図およびトレンチ設定図(S=1/1000)

第5層である。第5層は1と2に分割したが、どちらの層位から山茶碗・縄文土器が出土したかは、明らかでない。

- | | |
|-----------------------|-----------------------------------------------------------|
| 第1層 暗灰褐色土 | 耕作土 |
| 第2層 黒褐色土 (10YR3/1) | 径1mm以下の細かい砂を含む層。土そのものはシルト質。ややねばりあり。 |
| 第3層 灰黄褐色土 (10YR4/2) | 礫を多く含む。花こう岩が風化した小礫も含まれる。土そのものにはねばりけあり。 |
| 第4層 黒褐色土 (10YR3/2) | 第2層よりもやや褐色が強い。花こう岩が風化した小礫を含み、やや土にねばりけあり。 |
| 第5-1層 黒色土 (10YR1.7/1) | ねばりけのある黒色土。シルト層。礫は比較的小さなものを持む。 |
| 第5-2層 黒色土 (10YR1.7/1) | ねばりけのある黒色土。径5mm~30mmほどの礫を多く含む。礫は、円礫が多いが、地山に近いところでは、角礫が多い。 |



第48図 千日遺跡トレンチA・B東壁セクション図 (S=1/40)

第3節 出土遺物

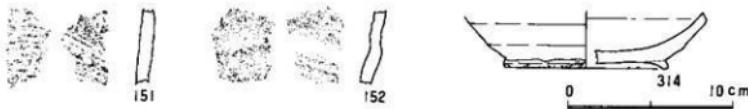
1 繩文土器(第49図151・152、図版26)

151は、表面および内面に条痕調整が見られる副部片。やや、外反する。胎土に纖維痕も見られ、径0.2mm前後の石英・長石も見られる。縄文時代早期の条痕土器かと思われる。152は、有段で外面および内面に条痕調整が見られる。胎土に纖維痕もみられ、縄文時代早期の条痕土器と思われる。段を有するため、151よりも少し古い時期のものかと思われる。

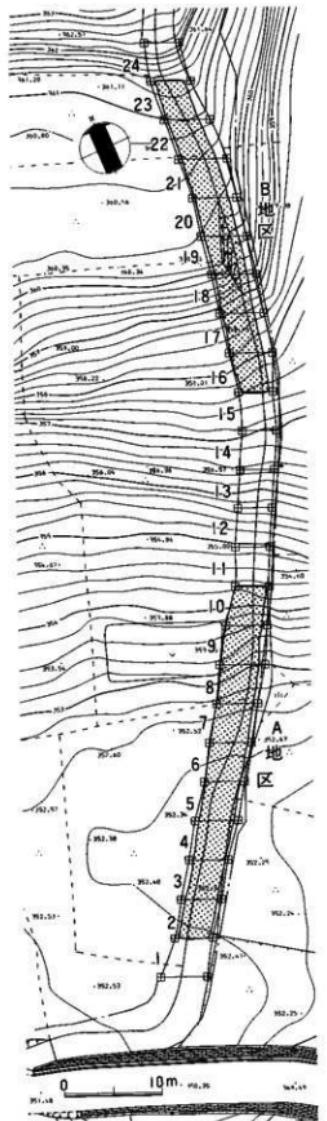
2 古代以降の土器(第49図314、図版30)

本遺跡からは土師器1点、山茶碗1点、古瀬戸1点、常滑2点、瀬戸美濃1点、合計6点が出土し、そのうち1点(314)を図示した。

314は荒肌手山茶碗であり、細野遺跡出土の山茶碗と同じ胎土を有する。高台貼り付け部より上方約1cmの間には回転ヘラ削り調整がなされ、底部内面は平滑で黒色有機物が器面にしみ込んでいる。



第49図 千日遺跡 包含層出土遺物(S=1/3)



第6章 宮上遺跡の調査

第1節 調査の概要

宮上遺跡は、上ヶ流集落から北東方向のミネ山の南西斜面の緩傾斜地に位置する。標高は350m～360mで、北から南に傾斜する。南北方向の傾斜地に対し、幅3m～4m長さ36mと32mの2本のトレンチを設定し、南側をA地区・北側をB地区として発掘をおこなった。表土は重機によって除去し、第2層から手堀りでおこなった。

A地区では、土坑を3基とピットを6検出した。B地区では、ピット7と土器集中区を1カ所検出した。

第2節 A・B地区の基本的層序

A・B地区の基本的な層序は、大きく変わるものではないがB地区に、後世に盛り土をして、平らにした部分があった。第1層が耕作土（茶畑）で第2層・第3層が包含層である。

第1層 黒褐色土 (7.5YR2/2) 耕作土（茶畑）

径2mmほどの小礫を含むシルト層。お茶の木の根
がかなり深く入り込んでいる。

第2層 黒色土 (7.5YR1,7/1)

粒子の細かいシルト層。粗砂・小礫はほとんど含
まれない。耕作のため第1層からの混入部分があ
る。

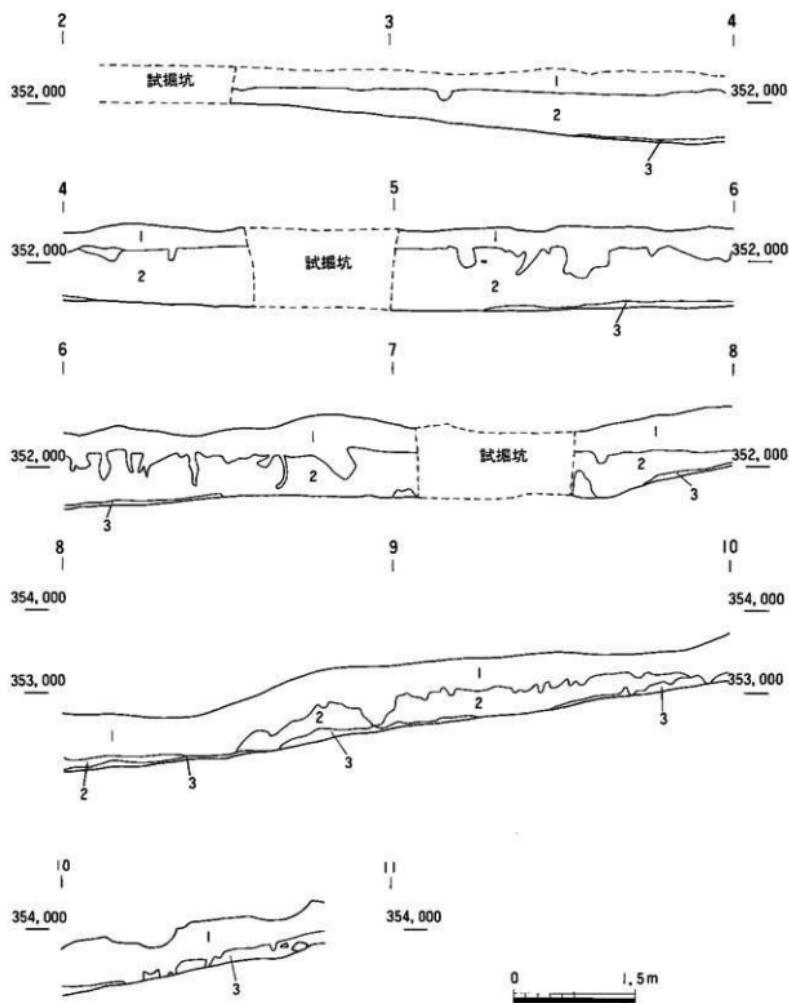
第3層 黒褐色土～褐色土 (7.5YR3/2～4/4)

場所によって粒子の細かいシルト層の部分と、径
1mm～20mmほどの礫を含む部分がある。礫を多く含
む部分は、地山に近い。

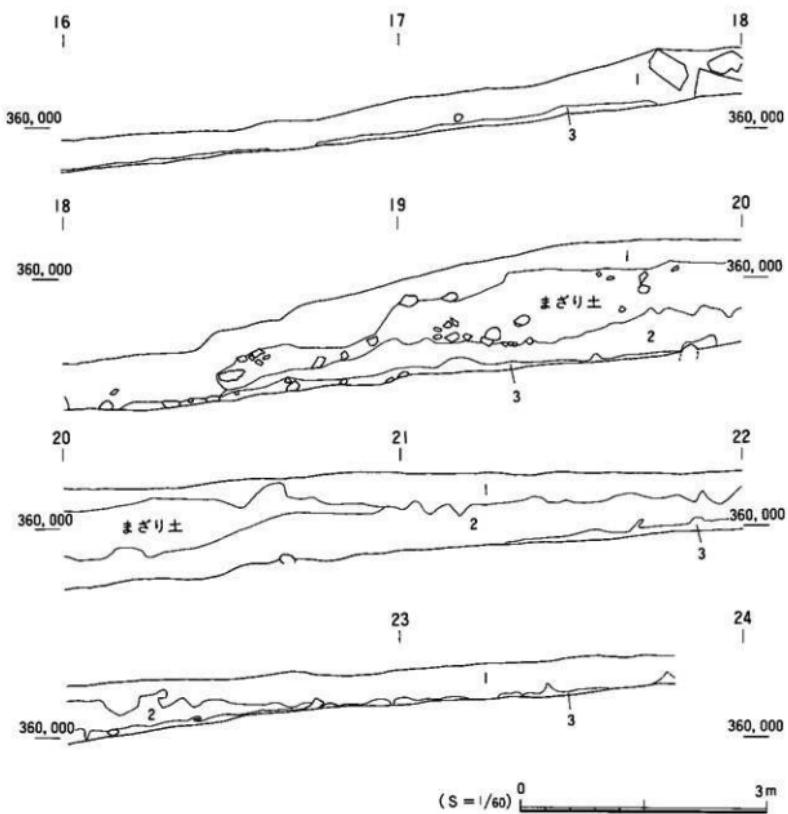
整地土

第1層・2層と地山の層の混合土。18グリッドか
ら21グリッドまでに含まれる。地表面を平らにする
ために、後世に客土したものと思われる。

第50図 宮上遺跡地形図およびグリッド
設定図 (S = 1/500)



第51図 宮上遺跡A地区西壁セクション図(2~11)(S=1/60)



第52図 宮上遺跡B地区西壁セクション図(S=1/60)

第3節 A地区の遺構

A地区では、3基の土坑と6つのピットを検出した。

1 土坑(SK)

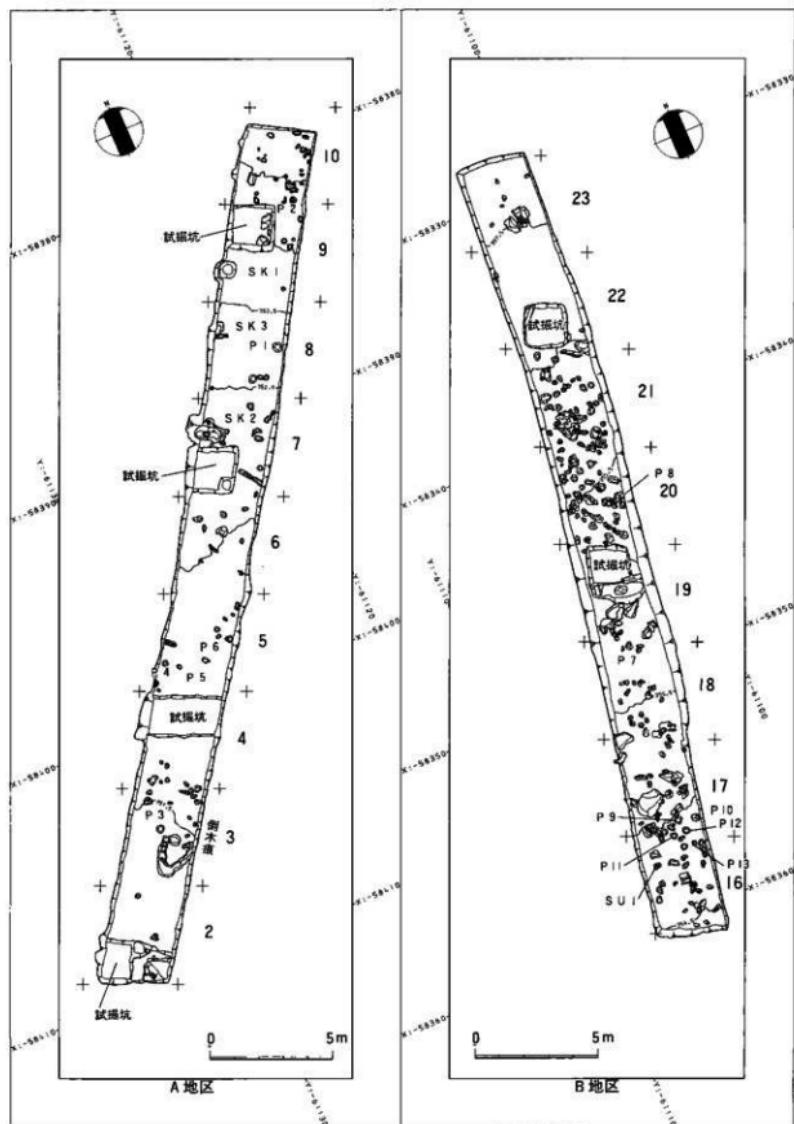
SK 1 (第54図、図版12)

径0.35m、深さ0.5mほどの土坑。出土遺物はなく、焼土や炭化物の付着もない。

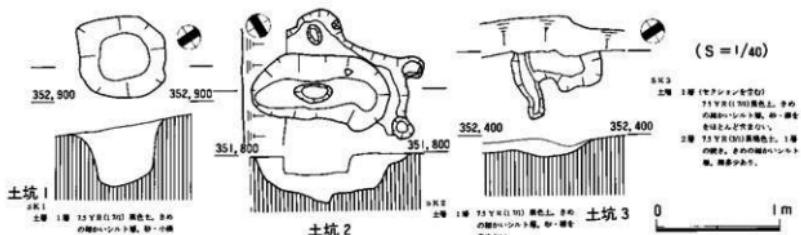
SK 2 (第54図、図版12)

長径1.3m、短径0.5m、深さ0.3mほどの楕円形の土坑。出土遺物はなく、炭化物や焼土も確認できなかった。

SK 3 (第54図)



第53図 宮上遺跡 A・B 地区遺構全体図 (S = 1/200)



第54図 A地区土坑(SK)検出状況(S=1/40)

トレンチの壁際で大きさは不明だが、一辺が0.7m深さ0.15mの土坑。遺物は出土しなかった。

第4節 B地区の遺構

B地区では、6つのピットと土器集中区を1カ所確認した。

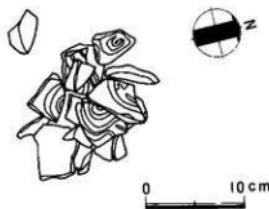
1 土器集中区(SU)(第55図、図版14)

SU 1 16グリッドの西よりの地点で、20片ほどの縄文土器が集中して出土した。整地土の下の第3層直上で検出した。土器が出土した地区には第2層の黒色土も一部見られたが、遺構を示す明確なプラン等はみられなかった。土器の表面には、沈線による文様がみられた。

土器集中区(SU 1)出土の縄文土器について(第58図、167、図版27)

B地区の土器集中区から出土した土器は1個体で、口縁部から頸部にかけて出土した。

半径約15cmほどで頸部から口縁部にかけて外反する土器。口縁は3単位の波状口縁になると思われる。波頂部には、幅4mm程度の円棒状工具で円を描くように沈線を施し、その中心に径1cm前後の刺突を入れている。その下にも円を描くように沈線があり、中心部に刺突を施している。波頂部と波頂部の間には、口唇部に沿って横方向の沈線を施し、その下に沈線による楕円の区画文を横に1段ないし2段施し、区画の中に横方向の矢羽状の沈線を施している。場所によって、上に楕円の区画文その下に流水文のように、横に長く蛇行するような沈線を施しているところもある。器厚は10mmから12mmほどある。焼成は良好で堅い。胎土に径2mmほどの長石・石英を含む。文様などから、縄文時代中期後葉の土器と思われる。



第55図 土器集中区1(SU 1)検出状況(S=1/5)

第11表 宮上遺跡A地区土坑一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|----|----|---------|-------|----|
| SK 1 | 9 | 3層 | 0.5×0.5 | 0.5 | |
| SK 2 | 7 | 3層 | 1.3×0.5 | 0.3 | |
| SK 3 | 8 | 3層 | 0.7×0.7 | 0.15 | |

第12表 宮上遺跡B地区土器集中区一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|----|----|---------|-------|----|
| SU 1 | 16 | 3層 | 0.3×0.3 | | |

第13表 宮上遺跡A・B地区ピット一覧表

| 遺構名 | 地区 | 層位 | 大きさ(m) | 深さ(m) | 備考 |
|------|----|----|-----------|-------|----|
| P 1 | 8 | 3層 | 0.4×0.35 | 0.25 | |
| P 2 | 10 | 3層 | 0.28×0.27 | 0.15 | |
| P 3 | 3 | 3層 | 0.35×0.3 | 0.15 | |
| P 4 | 5 | 3層 | 0.25×0.25 | 0.4 | |
| P 5 | 5 | 3層 | 0.22×0.15 | 0.4 | |
| P 6 | 5 | 3層 | 0.3×0.25 | 0.25 | |
| P 7 | 18 | 3層 | 0.35×0.25 | 0.25 | |
| P 8 | 20 | 3層 | 0.4×0.25 | 0.25 | |
| P 9 | 17 | 3層 | 0.3×0.27 | 0.6 | |
| P 10 | 17 | 3層 | 0.35×0.28 | 0.7 | |
| P 11 | 17 | 3層 | 0.3×0.25 | 0.2 | |
| P 12 | 17 | 3層 | 0.3×0.26 | 0.7 | |
| P 13 | 16 | 3層 | 0.25×0.15 | 0.19 | |

第5節 A・B地区の遺物

宮上遺跡からは、270点ほどの遺物が出土している。その多くが縄文土器で約160点。次に多いのが石器類で約60点である。古代以降の土器も50点あまり出土している。

1 縄文土器の分類について

縄文土器は、ほとんど第2層から出土している。出土点数がもっとも多く次のように分類した。A・B地区の遺構と包含層の遺物を次のように分類した。

縄文土器の分類

S-○群（縄文時代早期） Z-○群（縄文時代前期） C-○群（縄文時代中期）
K-○群（縄文時代後期）

S-Ⅰ群 器表面に押型文を施す縄文時代早期中葉の土器。

1類 山形の押型文を施す土器

2類 楕円押型文を施す土器

3類 口縁に横方向の隆帯を張り付け、その上から沈線を施し、内外面に山形の押型文を施す土器

S-Ⅱ群 胎土に纖維を含み、器表面に沈線を施す縄文時代早期中葉から後葉の沈線文土器。

S-Ⅲ群 器表面を条痕で調整する縄文時代早期後葉の土器。

Z-Ⅰ群 縄文時代前期後葉から末葉の土器。

1類 特殊な突帯を持つ土器

2類 刺突を施す土器

3類 縄文を施す土器

4類 特殊な突起を持つ土器

C-Ⅰ群 器表面に沈線を施す縄文時代中期後葉の土器。

K-Ⅰ群 縄文を施した後、沈線で区画し縄文を磨消す縄文時代後期前葉の土器。

2 A地区的遺物

(1) 縄文土器(第56図153~166、図版27・28)

S-Ⅰ群 器表面に押型文を施す縄文時代早期中葉の土器。

2類 楕円押型文を施す土器

153は、円形に近い径5mm前後の押型文をもつ土器。胎土に1mm前後の石英・長石を含む。

3類 口縁に横方向の隆帯を張り付け、その上から沈線を施し、内外面に山形の押型文を施す土器

154は、外反する口縁部をやや隆帯ぎみに肥厚させ、幅7mm前後の円棒状だが先のややさ

くれた工具で横方向に沈線を引いている。その上から同じ工具で縦方向に沈線を引いている。横方向の沈線の下には、斜め方向の沈線を引いている。口唇部は、円棒状の工具でキザミを施している。内面は、原体を横方向に転がして山形の押型文を施文している。胎土には纖維痕がみられ、径0.5mm前後の長石・石英が含まれる。文様の構成から、縄文時代早期中葉の穂谷式土器かと思われる。155・156も154と同型式の土器と思われる。155・156は、山形文が外面に施されたものである。

Z-I群 縄文時代前期後葉から末葉の土器

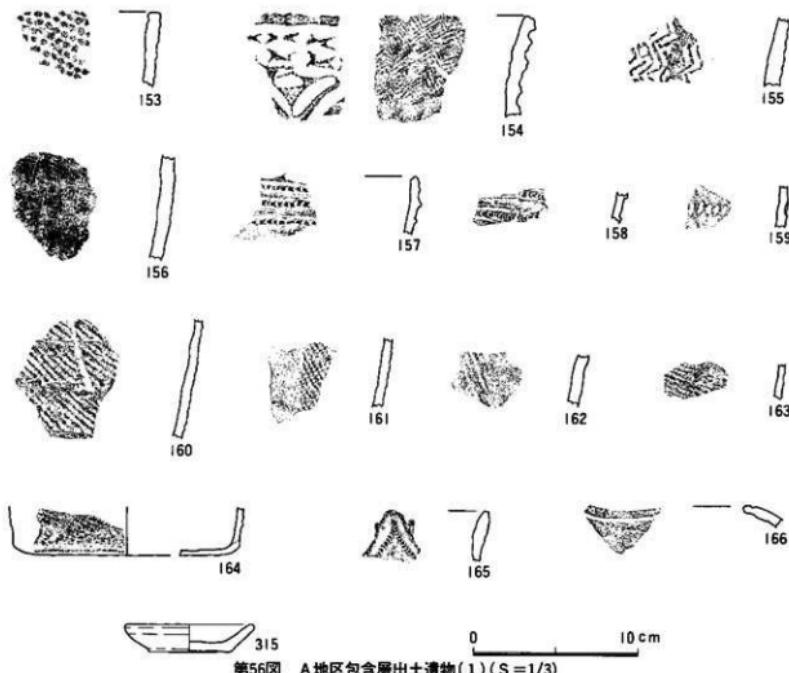
1類 特殊な突帯を持つ土器

157は、やや内湾する口縁に横方向の粘土ひもを3列張り付け、その上から半截竹管状の工具で押し引きをしている。口唇部には突起があり、内外面とも撫でて調整してある。器形は、浅鉢の可能性もある。焼成も良好で堅い。158も同じタイプの脇部片。北白川下層式に併行するものと思われる。

2類 刺突を施す土器

159は、長さ7mmほどの刺突を横方向に施文する土器。器厚5mm程度と薄い。胎土に0.2mm以下の石英・長石を含む。

3類 縄文を施す土器



第56図 A地区包含層出土遺物(1)(S=1/3)

160～164は、縄文を施したもの。160は、0段多条のRLの単節縄文を横方向に転がして施文した胸部片。原体幅は約2.7cmある。器厚は薄く、6mm程度である。内面は、撫でて調整している。胎土に、0.1mm以下の長石を含む。161はLRの単節縄文を施し、そのあと縄文を磨消している。器厚は6mm程度。胎土に、長石を多く含む。162も161と同様だが器厚は7mmほどある。163も161と同様であるが、やや小さめの土器の胸部片だと思われる。164は、表面に縄文を施した土器の胸部から底部にかけて。半径7cmの浅鉢かと思われる。器厚は6mm程度。北白川下層式に併行するとおもわれる。

4類 特殊な突起を持つ土器

165は、波状口縁で、波頂部の両側に突起を持つ土器。波頂部は外反し、波頂部に沿って、器表面に半截竹管状工具で施文してある。口唇部にも同じ工具でキザミを施している。内外面とも文様のないところは、撫でて調整している。器壁は薄く、5mm程度のところもある。胎土に細かい角閃石を含む。

K-1群 縄文を施した後、沈線で区画し縄文を磨消す縄文時代後期前葉の土器

166は、口縁に縄文を転がし、沈線で区画した土器。浅鉢ではないかと思われる。内外面とも撫でて調整されている。内湾する口縁の口唇部は、面を作り撫でている。器壁は薄く6mm程度。胎土に径0.2mm程度の長石を含む。

(2) 石器(第57図224～229、図版29)

224は尖頭器で、厚手の剥片を素材とし、表・裏面全体に剥離調整を施す。225は削器で、自然面を打面とする厚手の剥片を素材とし、表面の右側縁部から下方に連続的な剥離調整が施されている。調整が施された部分に微細な剥離痕がみられる。表面に自然面あり。226はRFで、下方を打面とするやや厚手の剥片を素材とし、表・裏面の下方に剥離調整が施されている。表面にはやや粗い剥離調整が施され、裏面には丁寧な剥離調整が施されている。石匙の折損部の可能性あり。227は敲石で、長円礫を利用し、ほぼ中央には1箇所、裏面には2箇所凹みがみられる。228敲石は、円礫を利用し、表面に敲打痕がみられる。229は敲石。円礫を利用し、側縁全周と表・裏に敲打痕がみられる。

(3) 古代以降の土器(第56図315、図版30)

本地区からは小皿1点、山茶碗5点、白磁1点、瀬戸美濃30点、近世陶磁器4点、合計41点が出土し、そのうち1点(315)を図示した。

315は小皿である。口縁端部を丸く收めており、内面に自然釉が厚く附着している。

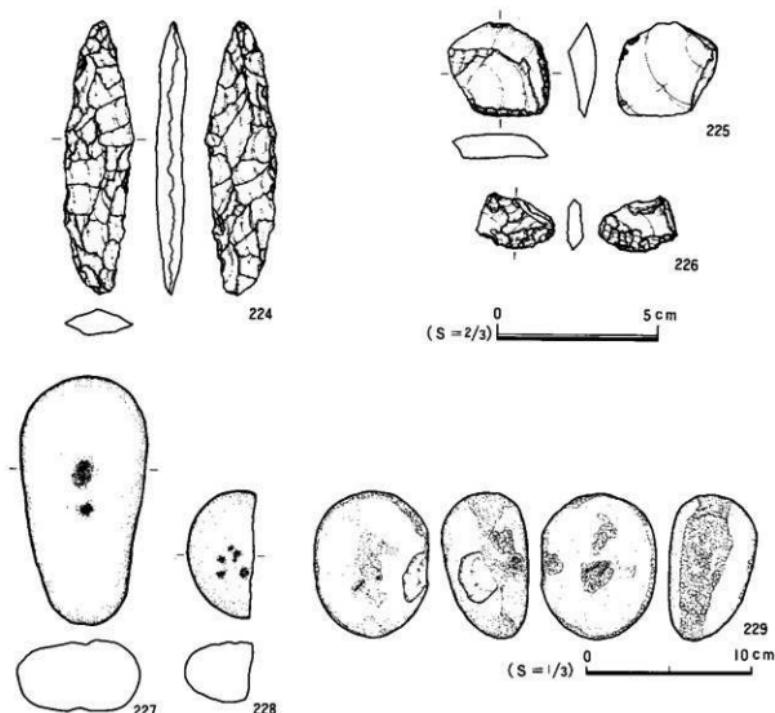
3 B地区の遺物

(1) 縄文土器(第58図167～182、図版27・28)

S-1群 器表面に押型文を施す縄文時代早期中葉の土器

1類 山形の押型文を施す土器

168の土器は、原体を横方向に転がし山形の押型文を施文している。原体の幅は不明。器厚



第57図 A地区包含層出土遺物(2)

は8mm程度。胎土には、径0.2mm程度の石英・長石を含む。

2類 楕円押型文を施す土器

169から172は、8mm×6mm程度の楕円押型文を施す土器の胴部片。169は、原体を縦に転がし、170～172は、横に転がしている。172は、孔があいている。器厚は、8mmから10mm程度。胎土に、径0.5mm程度の長石を多く含む。

3類 口縁に横方向の隆帯を張り付け、その上から沈線を施し、内外面に山形の押型文を施す土器

173は、口縁部をやや厚手にし、横方向に沈線を複数施している。内面は、横方向に山形の押型文を施している。胎土に長石が目立つ。内面には炭化物が付着している。174は、やや肥厚した口縁部に横方向の沈線を施している。胎土に纖維痕がみられ、径0.2mm前後の石英・長石が目立つ。175は、同じ手法による沈線文を施した胴部片。176・177は、横方向に山形文を施したもの。どの土器も内面は条痕調整してある。いずれも、縄文時代早期中葉の穂谷式土器ではないかと思われる。

S-II群 胎土に繊維を含み、器表面に沈線を施す縄文時代早期中葉から後葉の沈線文土器

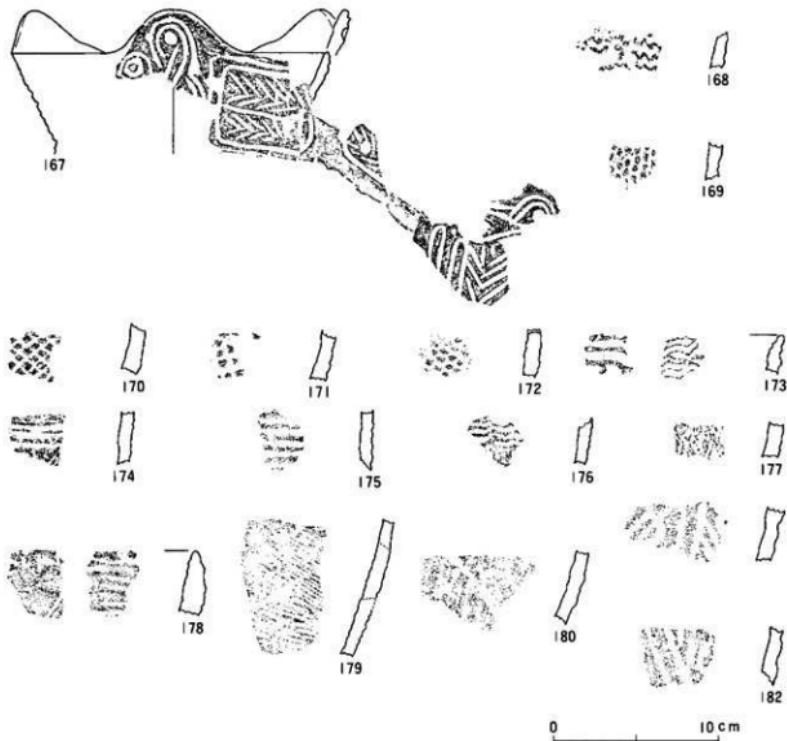
178は、口唇部断面型が三角形の土器の口縁部。外面に斜めの沈線を施している。内面には、幅2mm程度の横方向の沈線を施す。器厚が12mmと厚いが、口唇部に向かって薄くなっている。胎土には纖維痕が見られ、径0.2mm前後の石英・長石が目立つ。内外面とも文様以外の部分は、撫でて調整してある。

S-III群 器表面を条痕で調整する縄文時代早期後葉の土器

179は、内外面に条痕調整の見られる土器の胴部片。条痕は、斜め方向に施してある。胎土に角閃石をふくむ。

C-I群 器表面に沈線を施す縄文時代中期後葉の土器

180は、斜め方向に幅3mm前後の円棒状工具で沈線を施している。181は、幅4mm前後の円棒状工具で、縱方向と斜め方向に沈線を引いた後、蛇行する沈線を施している。器厚は10mmほどある。胎土には、径1mm前後の石英・長石を多く含む。182も181と同じ手法の沈線文土器。器



第58図 B地区土器集中区および包含層出土遺物(1)(S=1/3)

厚は7mmほどある。

(2) 石器(第59図230~232、図版29)

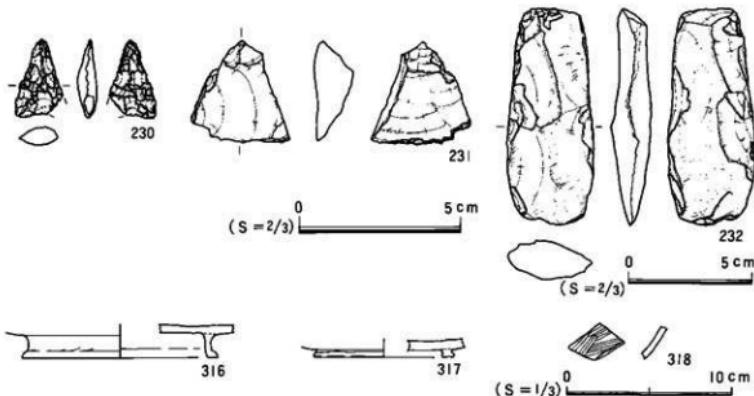
230は、厚手の凹基無茎鐵で、全体に剥離調整を施している。右脚部は折損している。231はへら形石器、上方を打点とする、厚手の剥片を素材とし、裏面下方に微細な剥離痕がみられる。232は横長剥片を素材とし、側縁部に粗い調整剥離を施している。刃部を中心にはば全体が摩耗している。

(3) 古代以降の土器(第59図316~318、図版30)

本地区からは、土師器2点、須恵器3点、黒色土器1点、山茶碗5点、青磁1点、瀬戸美濃3点、合計15点が出土し、そのうち3点(316~318)を図示した。

316は、須恵器盤、317は、須恵器壺である。316は、高台がほぼ直立し、端部が外側に張り出しており、317は、底部内面に不定方向の撫が施されている。

318は黒色土器である。内面は丁寧なへら磨きが施された後に黒化処理されている。



第59図 B地区包含層出土遺物(2)

第14表 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土織文土器觀察表 残存部位 A:口縁 B:胴部 C:底部

| 規格番号 | 連続名地区 | マセット | 種別 | 規格番号 | 文様・調整 | | 地成 | 土 | 色調（上段・内面 下段・外側） | 備考 | 構造 寸法 | 仕様 寸法 |
|------|---------|------|-----|------------------------|-------|---|----|-----|-----------------------------|----|----------|----------|
| | | | | | 横 | 縦 | | | | | | |
| 1 | 緑野第1 试验 | 7 | B | 幾文・池 | | | 良好 | やや粗 | 10YR5/4に近い・黄緑 | | 11 | 15 |
| 2 | 緑野第1 | 3B | B | 丸幾文・池 | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/6の複数 | | 11 | 15 |
| 3 | 緑野第1 | 3A | B | RL単脚斜幾文・比翼 | | | 良好 | やや粗 | SYR5/4に近い・黄緑 | | 11 | 15 |
| 4 | 緑野田1 | 4G | T | 北極・外(池)、内(押きよ) | | | 良好 | 密 | SYR5/4に近い・黄緑 | | 11 | 15 |
| 5 | 緑野第1 | 4G | B | 北極、各板 | | | 良好 | 密 | 7,SYR5/6に近い・黄緑 | | 11 | 15 |
| 6 | 緑野第1 | 4G | B | 北極、各板 | | | 良好 | 密 | SYR5/4に近い・黄緑 | | 11 | 15 |
| 7 | 緑野第2 | 3SD | S | A.H.C.外(柳円筒型)、内(斜行柳形文) | | | 良好 | 普通 | 2,SYR5/6の複数 - 7,SYR5/4に近い | | 16 | 15 |
| 8 | 緑野第2 | 3AE | E | 柳円筒型文 | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 18 | 15 |
| 9 | 緑野第2 | 3LE | S | 柳円筒型文・内(池)、外(直彫) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 18 | 15 |
| 10 | 緑野第2 | 表 | A | 無文・内圓彫めの内、外(直彫) | | | 良好 | やや粗 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 18 | 15 |
| 11 | 緑野第2 | 青 | A | 無文・内圓彫めの内、内(朱赤) | | | 良好 | やや粗 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 18 | 15 |
| 12 | 緑野第2 | 36F | S | 波(内)圓彫各板 | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 18 | 15 |
| 13 | 緑野第2試験 | 3 | B | 外(各板)、内(池) | | | 良好 | 普通 | SYR5/6の複数 - 7,SYR5/4に近い | | 18 | 15 |
| 14 | 緑野第2 | 杏 | C | 無文・内(朱赤) | | | 良好 | やや粗 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 18 | 15 |
| 15 | 緑野第2 | 24F | S | 無文・外(傾方向の調整)、内(池) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 18 | 15 |
| 16 | 緑野第2 | 31C | B | 外(傾方向の調整)、内(傾方向物) | | | 良好 | 普通 | SYR5/6の複数 | | 18 | 15 |
| 17 | 緑野第2 | 35C | I | 北極、内圓彫 | | | 良好 | やや粗 | SYR5/4に近い・朱赤 - 7,SYR5/4に近い | | 18 | 15 |
| 18 | 緑野第2 | 31B | C | 底脚式・外・内圓彫各板 | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 18 | 15 |
| 19 | 緑野第2 | 34G | S | 無文・底部へ彫き | | | 良好 | やや粗 | 10YR5/3に近い・黄緑 | | 18 | 15 |
| 20 | 蟹子谷第1 C | 1TB | A,B | 斜突、單脚RL文・外(無文各板)内(池) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/6の複数 - 10YR5/4に近い | | 28 | 16 |
| 21 | 蟹子谷第1 C | 1BB | A | 斜突、單脚RL文・内(池) | | | 良好 | 普通 | SYR5/6の複数 - 7,SYR5/4に近い | | 28 | 16 |
| 22 | 蟹子谷第1 C | 1BB | B | 斜突・外(無文各板)内(模擬) | | | 良好 | 普通 | SYR5/6の複数 - 7,SYR5/4に近い | | 28 | 16 |
| 23 | 蟹子谷第1 C | 1TB | A | 斜突、單脚RL文・内(指捺) | | | 良好 | 普通 | 10YR5/3に近い | | 28 | 17 |
| 24 | 蟹子谷第1 C | 1BB | B | 斜突・底部へ彫き | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 28 | 17 |
| 25 | 蟹子谷第1 C | 1BB | B | 斜突・外(傾方向)、内(池) | | | 良好 | 普通 | SYR5/6の複数 - 10YR5/4に近い | | 28 | 17 |
| 26 | 蟹子谷第1 C | 1TB | B | 斜突・内(無文各板)、内(池) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・朱赤 - 10YR5/4に近い | | 28 | 17 |
| 27 | 蟹子谷第1 C | 1TB | B | 斜突・内(無文各板) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・朱赤 | | 28 | 17 |
| 28 | 蟹子谷第1 C | 1TB | B | 斜突・外(無文各板)内(指捺) | | | 良好 | 普通 | 10YR5/3に近い | | 28 | 17 |
| 29 | 蟹子谷第1 C | 1BB | B | 斜突・内圓彫(無文各板)・横 | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/6の複数 - 10YR5/4に近い | | 28 | 17 |
| 30 | 蟹子谷第1 C | 1TD | A | 斜突・内・外圓彫(無文各板) | | | 良好 | 普通 | SYR5/6の複数 - N1,5/0赤 | | 30 | 17 |
| 31 | 蟹子谷第1 C | 1TD | D | 斜突・外(無文)、内(池) | | | 良好 | 普通 | SYR5/6の複数 - 7,SYR5/4に近い | | 30 | 17 |
| 32 | 蟹子谷第1 C | 1TC | D | 斜突・外(無文各板)内(模擬) | | | 良好 | 普通 | SYR5/6の複数 - 7,SYR5/4に近い | | 30 | 17 |
| 33 | 蟹子谷第1 C | 1TB | B | 斜突・外・内圓彫(無文各板) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 30 | 17 |
| 34 | 蟹子谷第1 C | 1TB | D | 斜突・内・外圓彫(無文各板) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 30 | 17 |
| 35 | 蟹子谷第1 C | 1TC | D | 斜突・内・外圓彫(無文各板) | | | 良好 | 普通 | 10YR5/3に近い | | 30 | 17 |
| 36 | 蟹子谷第1 C | 1TD | H | 外(無文各板)、内(池) | | | 良好 | 普通 | 10YR5/3に近い | | 30 | 17 |
| 37 | 蟹子谷第1 C | 1TD | H | 外(無文各板)、内(池) | | | 良好 | 普通 | 10YR5/2に近い | | 30 | 17 |
| 38 | 蟹子谷第1 C | 1TD | D | 斜突・内・外圓彫(無文各板) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 30 | 17 |
| 39 | 蟹子谷第1 C | 1TB | B | 斜突・外・内圓彫(無文各板) | | | 良好 | 普通 | SYR5/4に近い・黄緑 | | 30 | 17 |
| 40 | 蟹子谷第1 C | 1TB | B | 斜突・外・内圓彫(無文各板) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 30 | 17 |
| 41 | 蟹子谷第1 C | 1TB | B | 斜突・外(無文)内(無文各板) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 30 | 17 |
| 42 | 蟹子谷第1 C | 1BB | B | 斜突・外(斜)、内(無文各板) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 30 | 17 |
| 43 | 蟹子谷第1 C | 1BB | B | 斜突・内(無文) | | | 良好 | 普通 | 2,SYR5/6の複数 | | 32 | 17 |
| 44 | 蟹子谷第1 A | 4S | A | 横脚押立文・横枚文・外(池) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 34 | 19 |
| 45 | 蟹子谷第1 A | 4S | B | 横脚押立文 | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 34 | 19 |
| 46 | 蟹子谷第1 A | 4R | B | 横脚押立文・内(池) | | | 良好 | 普通 | 7,SYR5/4に近い・黄緑 | | 34 | 19 |
| 47 | 蟹子谷第1 A | 4A | B | 横脚押立文・横枚文・内(池) | | | 良好 | 普通 | 10YR5/4に近い・黄緑 - 7,SYR5/6の複数 | | 34 | 19 |

第15表 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土縄文土器觀察表 残存部位 A:口縁 B:銅部 C:底部

| 遺跡 番号 | 遺跡名地区 | T:Y | 層位 | 断面 部位 | 文様・圖形 | 現成 | 前 主 | 色調(上段・内側 下段・外側) | 備 考 | 持因 番号 | 民 居号 |
|----------|--------|-----|----|----------|------------------------|----------|--------|--------------------------|--------|----------|---------|
| 45 | 梨子谷第1A | 2T | 4 | B | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/1黒斑N1,5/0黒 | | 34 | 19 |
| 49 | 梨子谷第1A | 4T | 4 | B | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 34 | 19 |
| 50 | 梨子谷第1A | 1T | 4 | A | 輪凹押型文・縦波文・外(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 34 | 19 |
| 51 | 梨子谷第1A | 1T | 4 | B | 輪凹押型文・縦波文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 34 | 19 |
| 52 | 梨子谷第1A | 4T | 4 | H | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 34 | 19 |
| 53 | 梨子谷第1A | 4T | 4 | B | 山形押型文 | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 34 | 19 |
| 54 | 梨子谷第1A | 1T | 4 | B | 押し引き文・沈継 | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 34 | 19 |
| 55 | 梨子谷第1A | 2T | 4 | H | 押し引き文・沈継 | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 34 | 19 |
| 56 | 梨子谷第1A | 2T | 4 | B | 押し引き文・内(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/1黒斑N1,5/0黒 | | 34 | 19 |
| 57 | 梨子谷第1A | 2T | 4 | B | 押し引き文・沈継 | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 34 | 19 |
| 58 | 梨子谷第1A | 2T | 4 | H | 押し引き文 | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 34 | 19 |
| 59 | 梨子谷第1B | 11S | 4 | B | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 35 | 19 |
| 60 | 梨子谷第1B | 去塗 | | B | 輪凹押型文・内(施) | やや 青道 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰 | | 35 | 19 |
| 61 | 梨子谷第1B | 12R | 5 | B | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/1黒斑N1,5/0黒 | | 35 | 19 |
| 62 | 梨子谷第1C | 16M | 5 | B | 山形押型文・輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 36 | 20 |
| 63 | 梨子谷第1C | 16M | 5 | B | 山形押型文・輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 36 | 20 |
| 64 | 梨子谷第1C | 16L | 5 | H | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 36 | 20 |
| 65 | 梨子谷第1C | 16M | 5 | A | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 36 | 20 |
| 66 | 梨子谷第1C | 16M | 5 | A | 輪凹押型文 | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛灰 | | 36 | 20 |
| 67 | 梨子谷第1C | 16N | 5 | B | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/31鉛灰-7,SYR6/6鉛灰 | | 36 | 20 |
| 68 | 梨子谷第1C | 16N | 4 | B | 輪凹押型文・内(横方向施) | 良好 | 青道 | 10YR8/41鉛灰-7,SYR6/41鉛灰 | | 36 | 20 |
| 69 | 梨子谷第1C | 14M | 5 | A | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/41鉛灰-N0/1,5黒 | | 36 | 20 |
| 70 | 梨子谷第1C | 14M | 5 | A | 輪凹押型文・沈継・内(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/41鉛灰-7,SYR6/41鉛灰 | | 36 | 20 |
| 71 | 梨子谷第1C | 14M | 5 | H | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/41鉛灰-N0/1,5/0黒 | | 36 | 20 |
| 72 | 梨子谷第1C | 14M | 5 | B | 輪凹押型文・内(横施) | 良好 | 青道 | 10YR8/41鉛灰-7,SYR6/41鉛灰 | | 36 | 20 |
| 73 | 梨子谷第1C | 14M | 5 | B | 輪凹押型文・内(横施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/41鉛灰-7,SYR6/41鉛灰 | | 36 | 20 |
| 74 | 梨子谷第1C | 14M | 5 | B | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/3/1鉛灰-2,SYR2/1鉛 | | 36 | 20 |
| 75 | 梨子谷第1C | 14M | 5 | B | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 2,SYR2/2黒 | | 36 | 20 |
| 76 | 梨子谷第1C | 14M | 5 | B | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/4/1鉛灰-7,SYR6/4/1鉛灰 | | 36 | 20 |
| 77 | 梨子谷第1C | 15M | 4 | B | 輪凹押型文・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛 | | 36 | 20 |
| 78 | 梨子谷第1C | 14M | 4 | B | 内(捺引弦波文)・外(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/3/1鉛灰-7,SYR6/3/1鉛灰 | | 36 | 20 |
| 79 | 梨子谷第1C | 14M | 4 | B | 外(捺引弦波文)・内(捺引弦波文) | 良好 | 青道 | 10YR8/4/1鉛灰-7,SYR6/4/1鉛灰 | | 36 | 20 |
| 80 | 梨子谷第1C | 14P | 2 | B | 輪凹押型文・内(横施) | 良好 | 青道 | 10YR8/4/1鉛灰-7,SYR6/4/1鉛灰 | | 36 | 20 |
| 81 | 梨子谷第1C | 12N | 4 | A | ヰサリ・内外沿(横施) | 良好 | 青道 | 5YR5/4/1鉛灰 | | 36 | 20 |
| 82 | 梨子谷第1C | 12N | 4 | B | 沈継 | 良好 | 青道 | 5YR5/4/1鉛灰 | | 36 | 20 |
| 83 | 梨子谷第1C | 12N | 4 | B | 内外沿(横施) | 良好 | 青道 | 5YR6/6鉛 | | 36 | 20 |
| 84 | 梨子谷第1C | 19B | 4 | A | 押し引き・沈継文・内(「へ」字印+施) | 良好 | 青道 | 2,SYR2/1黒 | | 37 | 21 |
| 85 | 梨子谷第1C | 14K | 4 | B | 沈継文・刺突(押し引き)・内(施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/3/1鉛 | | 37 | 21 |
| 86 | 梨子谷第1C | 17H | 4 | B | 刺突・内外沿(横施) | 良好 | 青道 | 10YR8/4/1鉛灰-7,SYR6/4/1鉛灰 | | 37 | 21 |
| 87 | 梨子谷第1C | 15P | 4 | B | 斬跡付・内外沿(貝紋条痕+施) | 良好 | 青道 | 10YR8/3/1鉛灰-7,SYR6/3/1鉛 | | 37 | 21 |
| 88 | 梨子谷第1C | 13H | 4 | B | 刺突・内外沿(貝紋条痕+施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/4/1鉛 | | 37 | 21 |
| 89 | 梨子谷第1C | 16F | 4 | B | 刺突・外(横施)・内(施) | 良好 | 青道 | 10YR8/3/1鉛灰-N0/1,5黒 | | 37 | 21 |
| 90 | 梨子谷第1C | 13F | 4 | B | 刺突・外(横施)・内(貝紋条痕+施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/4/1鉛灰-N0/1,5黒 | | 37 | 21 |
| 91 | 梨子谷第1C | 16D | 4 | A | 扇形文・ヰサリ・外(施)・内(貝紋条痕+施) | 良好 | 青道 | 7,SYR6/4/1鉛灰-7,SYR6/4/1鉛 | | 37 | 21 |
| 92 | 梨子谷第1C | 17C | 4 | A | ヰサリ | 良好 | 青道 | 10YR8/6/鉛 | | 37 | 21 |
| 93 | 梨子谷第1C | 17C | 4 | A | ヰサリ | 良好 | 青道 | 7,SYR6/6鉛 | | 37 | 21 |
| 94 | 梨子谷第1C | 17C | 4 | B | 扇形文 | 良好 | 青道 | 5YR5/6/鉛 | | 37 | 21 |

第16表 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土縄文土器観察表 残在部位 A:口縁 B:胴部 C:底部

| 番号 | 遺跡名・地図 | T | 層位 | 残存 部位 | 文様・調査 | 断面 | 約 + | 色調（上段・内面 下段・外面） | 備考 | 測定番号 | 測定値 |
|-----|------------|---|----|------------------------------|-------|----|--------------------------|-----------------|----|------|-----|
| 95 | 梨子谷第1C 18B | 4 | A | 直形文・キザシ・内(外縁) (貝殻条痕) | 良好 | 直 | 10YR 4/1-4/2 黒褐色～灰青褐色 | | 37 | 21 | |
| 96 | 梨子谷第1C 17C | 4 | A | 網目文・内(横幅)・外(名張) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黄褐色 | | 37 | 21 | |
| 97 | 梨子谷第1C 18B | 4 | B | 網目文・外(横幅) 内(貝殻条痕) | 良好 | 普通 | 10YR 4/1-4/2 黒褐色 | | 37 | 21 | |
| 98 | 梨子谷第1C 19B | 4 | A | 直形文・L字半周横文・内(横) | 良好 | 直 | 10YR 4/2-3/1 黑褐色～黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 99 | 梨子谷第1C 18B | 4 | B | RL字半周文・外(横幅) 内(横方向・貝殻条痕) 直形文 | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黄褐色 | | 38 | 23 | |
| 100 | 梨子谷第1C 19B | 4 | B | 爪形文・L字無縫兩文・外(横幅) 内(横) | 良好 | 直 | 10YR 4/2-3/1 黑褐色～黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 101 | 梨子谷第1C 18L | 4 | A | RL字半周文・横幅・キザシ・外(横) 内(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 4/1-4/2 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 102 | 試掘 | | A | キザシ・外(貝殻条痕) 内(貝殻条痕+物) | 良好 | 普通 | 7.5YR 4/1-4/2 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 103 | 梨子谷第1C 17B | 4 | A | 直形文・キザシ・内(山型内縁に横) | 良好 | 普通 | 10YR 4/1-4/2 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 104 | 梨子谷第1C 26A | 4 | A | 直形文・キザシ・外(貝殻条痕・横) 内(貝殻条痕・横) | 良好 | 直 | 7.5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 105 | 梨子谷第1C 18B | 4 | A | 直形文・キザシ | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し10YR 3/1 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 106 | 梨子谷第1C 16F | 4 | B | 網目文・外(内縁) (貝殻条痕) | よい | 普通 | 10YR 4/1-4/2 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 107 | 梨子谷第1C 18C | 4 | B | 直形文 | やや | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 108 | 梨子谷第1C 18B | 4 | B | 直形文・外(貝殻条痕+横) 内(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/3に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 109 | 梨子谷第1C 16E | 4 | B | 網目文・外(横幅) (横幅) | 良好 | 普通 | 10YR 4/1-4/2 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 110 | 梨子谷第1C 16F | 4 | B | 網目文・外(横) (内(貝殻条痕)) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 111 | 梨子谷第1C 17D | 4 | B | 直形文・内(横幅) | やや | 普通 | 7.5YR 6/5に明暗 | | 38 | 23 | |
| 112 | 梨子谷第1C 20A | 4 | A | 網目文・波線・キザシ・内(横幅) | 良好 | 直 | 10YR 4/1-4/2 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 113 | 梨子谷第1C 19A | 4 | B | RL字段多条の縦文・内(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 114 | 梨子谷第1C 19A | 4 | B | RL字段多条の縦文・内(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 115 | 梨子谷第1C 19B | 4 | B | RL字段多条の縦文・内(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 116 | 梨子谷第1C 19B | 4 | B | RL字段多条の縦文・内(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/6 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 117 | 梨子谷第1C 19B | 4 | B | RL字段多条の縦文・内(横) | 良好 | 普通 | 10YR 4/1に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 118 | 梨子谷第1C 15E | 4 | B | 外(縁) 内(横・貝殻条痕+物) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 119 | 梨子谷第1C 14E | 4 | B | 外(縁) 内(横・貝殻条痕+物) | 良好 | 普通 | 5YR 6/6 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 120 | 梨子谷第1C 15O | 4 | B | 外(縁) 内(横・貝殻条痕+物) 指跡 | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 121 | 梨子谷第1C 17H | 4 | B | 内外直貝殻条痕+横 | 良好 | 普通 | 10YR 4/1-4/2 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 122 | 梨子谷第1C 18B | 4 | B | 内外直貝殻条痕+横 | 良好 | 普通 | 5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 123 | 梨子谷第1C 20A | 4 | B | 網目文・外(光のいい工具で削除) 内(横紋) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/6 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 124 | 梨子谷第1C 17B | 4 | B | 外(貝殻条痕+横) 内(貝殻条痕) | 良好 | 普通 | 10YR 4/1-4/2 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 125 | 梨子谷第1C 18B | 4 | B | 外(貝殻条痕+横) 内(貝殻条痕) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/6 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 126 | 梨子谷第1C 19B | 4 | B | 外(貝殻条痕+横) 内(横・横線?) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 127 | 梨子谷第1C 19B | 4 | B | 外(貝殻条痕+横) 内(貝殻条痕+物) 指跡 | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/6 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 128 | 梨子谷第1C 19B | 4 | B | 内外直(貝殻条痕+物) | 良好 | 普通 | 5YR 6/6 黑褐色 | | 38 | 23 | |
| 129 | 梨子谷第1C 19B | 4 | B | 内外直(貝殻条痕+物) | 良好 | 普通 | 5YR 6/4に少し黒褐色 | | 38 | 23 | |
| 130 | 梨子谷第1C 18C | 4 | R | 外(横幅) | 良好 | 直 | 5YR 6/4に少し黒褐色 | | 40 | 26 | |
| 131 | 梨子谷第1C 19A | 4 | C | 内外直(横) | やや | 普通 | 7.5YR 6/7に少し黒褐色 | | 40 | 26 | |
| 132 | 梨子谷第1C 17E | 5 | C | 内外直(横) | 良好 | 普通 | 10YR 4/2-4/3 黒褐色 | | 40 | 26 | |
| 133 | 梨子谷第1C 17C | 4 | C | 内外直(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/7に少し黒褐色 | | 40 | 26 | |
| 134 | 梨子谷第1C 19D | 4 | C | 内外直(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/7に少し黒褐色 | | 40 | 26 | |
| 135 | 梨子谷第1C 16G | 4 | C | 内外直(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/7に少し黒褐色 | | 40 | 26 | |
| 136 | 梨子谷第1C 17E | 4 | B | 直形文・内(横) | 良好 | 普通 | 7.5YR 6/7に少し黒褐色 | | 40 | 26 | |
| 137 | 梨子谷第1C 17N | 4 | A | 波線・直縁・内外直(横) | 良好 | 直 | 5YR 6/3に少しき | | 40 | 26 | |
| 138 | 梨子谷第1C 14F | 4 | B | 斜行・斜行直縁文・内外直(横) | 良好 | 直 | 7.5YR 6/7に少しき | | 40 | 26 | |
| 139 | 梨子谷第1C 16C | 4 | H | 沈縁・直縁・内外直(横) | 良好 | 直 | 10YR 4/1-4/2 黑褐色 | | 40 | 26 | |
| 140 | 梨子谷第1C 16D | 4 | B | 直縁・内外直(横) | 良好 | 直 | 5YR 6/4に少し黒褐色 | | 40 | 26 | |
| 141 | 梨子谷第1C 17D | 4 | B | 波線文(横・直)・内(横) | 良好 | 直 | 5YR 6/3に少しき | | 40 | 26 | |

第17表 織野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土縄文土器観察表 残存部位 A:口縁 B:胴部 C:底部

| 番号 | 遺跡名地区 | ジット | 部位 | 西古 文様・調査 | 発現 地 | 色調 | 備考 | 西古 番号 |
|-----|-----------------|-----|-------|-------------------|----------|---------------------------------|------|----------|
| 142 | 梨子谷第1C | 17D | 4 B | 刺繡・沈縫・内外縁(施) | 良好 | 相 7.SVR3/6赤地 | | 49 26 |
| 143 | 梨子谷第1C | 17D | 4 B | RL単縞文・内(施) | 良好 | 相 7.SVR3/2赤地 | | 49 26 |
| 144 | 梨子谷第1C | 14F | 3 B | 施縫・内外縁(施) | やや 甘い | 相 7.SVR3/4-5赤地 | | 49 26 |
| 145 | 梨子谷第1C | 14G | 4 C | 内外縁(施) | やや 甘い | 相 10YR3/2赤地 | | 49 26 |
| 146 | 梨子谷第1C | 17C | 4 C | 内外縁(施) | 良好 | 相 SVR6/6赤 | 底盤側面 | 49 26 |
| 147 | 梨子谷第1C | 20A | 4 C | 底盤に横文・内外縁(施) | 良好 | 青透 | | 49 26 |
| 148 | 梨子谷第1C | 10B | 4 B | 沈縫・LR2単縞文・内外縁(施) | 良好 | 青透 10YR5/4(2)より黄 | | 49 26 |
| 149 | 梨子谷第1C | 19B | 4 A | 内外縁(施) | 良好 | 青透 7.SVR3/3赤地 | | 49 26 |
| 150 | 梨子谷第2 千日5レンガ | 8 R | 5 A | 黄斑・内外縁(施) | やや 甘い | 相 7.SVR4/4赤地 | | 49 26 |
| 151 | B | 2 | 三 B | 外(貝殻条文)・内(良質条文+施) | やや 甘い | 青透 SVR6/6赤 | | 49 26 |
| 152 | 千日トレンチ | 2 | EII B | 内外縁(条纹) | やや 甘い | 青透 7.SVR7/4赤地, 7.SVR6/6赤 | | 49 27 |
| 153 | 宮上A | 5 | 2 A | 棒印神・豊火・内(施) | 良好 | 青透 | | 50 28 |
| 154 | 宮上A | 5 | 2 A | 沈縫・内(山形印型文) | 良好 | 青透 SVR4/3(2)より赤地 | | 50 28 |
| 155 | 宮上A | 5 | 2 B | 山形印型文・内(施) | 良好 | 青透 SVR3/2赤地 | | 50 28 |
| 156 | 宮上A | 3 | 2 B | 山形印型文・内外縁(施) | 良好 | 青透 SVR6/6赤 | | 50 28 |
| 157 | 宮上A | 6 | 2 A | 特殊文透文・内外縁(施) | 良好 | 青透 7.SVR6/6赤 | | 50 28 |
| 158 | 宮上A | 6 | 2 B | 特殊文透文・内外縁(施) | 良好 | 青透 7.SVR6/6赤 | | 50 28 |
| 159 | 宮上A | 6 | 2 B | 刺繡・内外縁(施) | 良好 | 青透 7.SVR5/3(2)より白 | | 50 28 |
| 160 | 宮上A | 6 | 2 B | RL単縞文・内(施) | 良好 | 青透 7.SVR5/4(2)より白 | | 50 28 |
| 161 | 宮上A | 4 | 2 B | LR単縞文・内外縁(施) | 良好 | 青透 7.SVR5/3(2)より白 | | 50 28 |
| 162 | 宮上A | 4 | 2 B | LR単縞文・内(施) | 良好 | 青透 7.SVR5/3(2)より白 | | 50 28 |
| 163 | 宮上A | 5 | 2 B | LR単縞文・内外縁(施) | 良好 | 青透 SVR5/6(2)赤地 | | 50 28 |
| 164 | 宮上A | 5 | 2 C | RL単縞文・内外縁(施) | 良好 | 青透 7.SVR7/6赤 | | 50 28 |
| 165 | 宮上A | 6 | 2 A | 竹管文・カゼミ・内外縁(施) | 良好 | 青透 SVR4/6赤地 | | 50 27 |
| 166 | 宮上A | 5 | 2 A | 沈縫・内外縁(施) | 良好 | 青透 SVR5/6(2)赤地 | | 50 28 |
| 167 | 宮上B | 16 | 1 A | 沈縫・刺繡・内(施) | 良好 | 青透 7.SVR6/6赤 | | 50 28 |
| 168 | 宮上B底盤 | 3 | B | 山形印型文・内(施) | やや 甘い | 青透 7.SVR7/6(内)7.SVR6/4(2)より白 | | 50 28 |
| 169 | 宮上B底盤 | 3 | B | 山形印型文・内(施) | やや 甘い | 青透 10YR7/4(2)より黄 | | 50 28 |
| 170 | 宮上B | 19 | 2 B | 棒印神型文・内(施) | 良好 | 青透 SVR2/3赤地 | | 50 28 |
| 171 | 宮上B | 21 | 3 H | 棒印神型文・内(施) | やや 甘い | 青透 SVR4/4(2)より黄 | | 50 27 |
| 172 | 宮上B | 19 | 2 H | 棒印神型文・内(施) | 良好 | 青透 SVR4/6赤地 | | 50 28 |
| 173 | 宮上B | 21 | 2 A | 棒印神型文 | 良好 | 青透 | | 50 28 |
| 174 | 宮上B | 19 | 2 B | 沈縫 | 良好 | 青透 SVR4/4(2)より黄 | | 50 28 |
| 175 | 宮上B | 19 | 2 B | 沈縫・内(施) | 良好 | 青透 SVR4/4(2)より黄 | | 50 28 |
| 176 | 宮上B底盤 | 3 | B | 山形文・内(施) | 良好 | 青透 SVR2/2赤地 | | 50 27 |
| 177 | 宮上B底盤 | 1 | B | 山形文 内外縁(条纹) | 良好 | 青透 SVR2/3赤地 | | 50 27 |
| 178 | 宮上B | 22 | 2 B | 沈縫・内外(施) | 良好 | 青透 SVR2/2赤地 | | 50 28 |
| 179 | 宮上B | 19 | 2 B | 内外縁(良質条板+施) | 良好 | 青透 SVR2/3赤地 | | 50 28 |
| 180 | 宮上B | 21 | 2 B | 沈縫・内外縁(施) | 良好 | 青透 10YR6/4(2)より黄 | | 50 28 |
| 181 | 宮上B | 21 | 2 B | 沈縫・内(施) | 良好 | 青透 7.SVR7/6赤 | | 50 28 |
| 182 | 宮上B | 21 | 2 B | 沈縫・内(施) | やや 甘い | 青透 10YR6/4(2)より黄 | | 50 28 |

第18表 細野遺跡・梨子谷遺跡・宮上遺跡出土石器観察表

| 整理番号 | 遺跡名地図 | 出土区 | 層位 | 種別 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 質量(g) | 神話番号 | 図版番号 |
|------|---------|------|----|---------|--------------|--------|-------|--------|-------|------|------|
| 291 | 細野第1 | 5 F | 7 | 石劍 | チャート | 2.1 | 1.55 | 0.3 | 0.6 | 11 | 29 |
| 292 | 細野第1 | 4 G | 6 | 石劍 | 隕石品安山岩 | 1.9 | 1.3 | 0.3 | 0.4 | 11 | 29 |
| 293 | 細野第2 | 31 H | 5 | 石劍 | 隕石品安山岩 | 1.8 | 1.6 | 0.3 | 0.5 | 18 | 29 |
| 294 | 細野第2 | 33 G | | 石劍 | チャート | 4.8 | 2.4 | 1.2 | 13.5 | 18 | 29 |
| 295 | 細野第2 | 33 D | 4 | 石劍 | チャート | 5.55 | 2.5 | 0.9 | 7.8 | 18 | 29 |
| 296 | 梨子谷第1 A | | | 打制石斧 | ホルンフェルス | 7.4 | 3.9 | 1.3 | 32.1 | 24 | 29 |
| 297 | 梨子谷第1 A | 4 T | 4 | 石劍 | チャート | 2.9 | 1.3 | 0.5 | 2.0 | 34 | 29 |
| 298 | 梨子谷第1 B | 8 V | 4 | 石劍 | チャート | 2.8 | 1.2 | 0.6 | 1.6 | 35 | 29 |
| 299 | 梨子谷第1 C | 13 I | 4 | 石劍 | チャート | 2.3 | 1.25 | 0.5 | 1.2 | 42 | 29 |
| 300 | 梨子谷第1 C | 15 F | 4 | 石劍の未製品 | チャート | 1.8 | 1.5 | 0.5 | 0.9 | 41 | 29 |
| 301 | 梨子谷第1 C | 19 C | 3 | 石劍の未製品 | チャート | 1.9 | 1.4 | 0.5 | 0.9 | 41 | 29 |
| 302 | 梨子谷第1 C | 26 A | 4 | 石劍 | チャート | 5.55 | 3.5 | 1.2 | 18.5 | 41 | 29 |
| 303 | 梨子谷第1 C | 14 N | 4 | 石劍 | チャート | 5.55 | 3.6 | 1.2 | 22.3 | 41 | 29 |
| 304 | 梨子谷第1 C | 19 B | 4 | 攝取 | チャート | 4.7 | 2.8 | 0.9 | 10.8 | 41 | 29 |
| 305 | 生子谷第1 C | 16 D | 4 | 削器 | チャート | 5.9 | 3.4 | 1.2 | 19.7 | 41 | 29 |
| 306 | 生子谷第1 C | 15 F | 4 | 削器 | チャート | 5.5 | 3.1 | 0.8 | 10.8 | 41 | 29 |
| 307 | 梨子谷第1 C | 16 I | 5 | くさり形石器 | チャート | 3.0 | 1.6 | 0.6 | 3.5 | 41 | 29 |
| 308 | 梨子谷第1 C | 21 A | 4 | 削器 | 安山岩(サマカイト) | 5.15 | 3.2 | 1.5 | 19.4 | 41 | 29 |
| 309 | 梨子谷第1 C | 16 E | 4 | 削器 | 銅刃(ホルンフェルス化) | 7.65 | 5.7 | 1.2 | 56.8 | 41 | 29 |
| 310 | 梨子谷第1 C | 13 N | 4 | くさり形石器 | チャート | 2.4 | 2.1 | 0.6 | 4.2 | 41 | 29 |
| 311 | 梨子谷第1 C | 18 J | 4 | くびだし形石器 | チャート | 2.5 | 1.45 | 1.0 | 3.3 | 41 | 29 |
| 312 | 梨子谷第1 C | 20 B | 3 | 刮石 | 安山岩(こう岩) | 6.4 | 6.2 | 4.0 | 764.0 | 42 | 29 |
| 313 | 梨子谷第1 C | 15 F | 4 | RF | 鉄刃(ホルンフェルス化) | 7.8 | 6.2 | 2.1 | 146.7 | 42 | 29 |
| 314 | 宮上A | 5 | 3 | 尖状器 | 安山岩 | 8.5 | 2.2 | 0.9 | 16.1 | 57 | 29 |
| 315 | 宮上A | 5 | 3 | 削器 | チャート | 3.1 | 2.9 | 0.9 | 8.7 | 57 | 29 |
| 316 | 宮上A | 5 | 3 | RF | 墨晶石 | 2.4 | 1.7 | 0.5 | 2.3 | 57 | 29 |
| 317 | 宮上A | 5 | 2 | 敲石 | 安山岩 | 10.3 | 5.2 | 2.9 | 701.0 | 57 | 29 |
| 318 | 宮上A | 3 | 2 | 敲石 | 砂岩 | 5.25 | 2.7 | 2.5 | 148.6 | 57 | 29 |
| 319 | 宮上A | 4 | 2 | 敲打 | 安山岩 | 6.0 | 4.7 | 3.5 | 423.5 | 57 | 29 |
| 320 | 宮上B | 20 | 2 | 石瓢 | チャート | 2.4 | 1.45 | 0.6 | 1.4 | 59 | 29 |
| 321 | 宮上B | 21 | 2 | へら形石器 | チャート | 3.2 | 3.1 | 1.2 | 9.3 | 59 | 29 |
| 322 | 宮上B | 18 | 2 | 磨擦石斧 | ホルンフェルス | 8.9 | 3.5 | 1.6 | 58.2 | 59 | 29 |

第19表 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡出土古代以降の土器

| 整理番号 | 遺跡名地図 | 基盤 | 法面(cm) | 出土 | 地表 | 色調 | 内面 | 外顔 | 備考 | 神話番号 | 図版番号 |
|------|-------|--------|------------------|-------|----|------|-------------------------------|-------------------------|-------------------------|------|------|
| 301 | 細野第1 | 山系岡 | (14.6)(7.0) | (6.9) | 黒 | 良好 | 2.3V7/1直面、2.3V8/4斜面、2.3V7/2斜面 | 底部外周部に凹凸、高台端部斜面、底部内面等に | 底部外周部に凹凸、高台端部斜面、底部内面等に | 11 | 15 |
| 302 | 梨子谷第1 | 上地形 | (13.5)(6.8) | 2.8 | 黒 | やや青い | 2.3V6/2直面、2.3V6/3斜面 | 底部外周部に凹凸 | 底部外周部に凹凸 | 34 | 30 |
| 303 | 梨子谷第1 | 山系岡 | (17.0)(7.0)(6.1) | 6.1 | 赤 | 良好 | 2.3V7/1直面2.3V7/2斜面 | 底部外周部に凹凸、高台端部斜面、底部内面平滑 | 底部外周部に凹凸、高台端部斜面、底部内面平滑 | 35 | 30 |
| 304 | 梨子谷第1 | 土器部 | | | 赤 | 良好 | 2.3V7/2直面2.3V7/3斜面 | 底部外周部に凹凸 | 底部外周部に凹凸 | 43 | 30 |
| 305 | 梨子谷第1 | 土器部 | (12.6) | | 赤 | 良好 | 2.3V6/2直面2.3V7/2斜面 | 口縁部外周部付箋 | 口縁部外周部付箋 | 43 | 30 |
| 306 | 梨子谷第1 | 山系岡 | (7.6) | | 赤 | 良好 | 2.3V7/2直面2.3V7/3斜面 | 底部外周部に凹凸 | 底部外周部に凹凸 | 43 | 30 |
| 307 | 梨子谷第1 | 山系岡 | (8.6) | | 赤 | 良好 | 2.3V6/2直面2.3V7/2斜面 | 底部外周部に凹凸 | 底部外周部に凹凸 | 43 | 30 |
| 308 | 梨子谷第1 | 灰陶器場 | (7.0) | | 赤 | 良好 | 2.3V6/2直面2.3V7/2斜面 | 底部外周部に凹凸 | 底部外周部に凹凸 | 43 | 30 |
| 309 | 梨子谷第1 | 山系岡 | (9.2) | | 赤 | 良好 | 2.3V6/2直面2.3V7/2斜面 | 底部外周部に凹凸 | 底部外周部に凹凸 | 43 | 30 |
| 310 | 梨子谷第1 | 山系岡 | (9.0) | | 赤 | 良好 | 2.3V6/2直面2.3V7/2斜面 | 底部外周部に凹凸と斜面、高台端部斜面、底部内面 | 底部外周部に凹凸と斜面、高台端部斜面、底部内面 | 43 | 30 |
| 311 | 梨子谷第1 | 青磁罐 | (5.0) | | 赤 | 良好 | 2.3V2/2ヨーロピ | 全周に溝筋 | 全周に溝筋 | 43 | 30 |
| 312 | 梨子谷第2 | 大字諏訪 | | | 赤 | 良好 | 2.3V2/2ヨーロピ | 全周に溝筋 | 全周に溝筋 | 46 | 30 |
| 313 | 梨子谷第2 | 高瀬戸一太郎 | | | 赤 | 良好 | 2.3V2/2ヨーロピ | 全周に溝筋 | 全周に溝筋 | 46 | 30 |
| 314 | 梨子谷第2 | 山系岡 | (10.6) | | 赤 | 良好 | 2.3V3/1直面、2.3V5/2ヨーロピ | 底部外周部に凹凸と斜面、高台端部斜面 | 底部外周部に凹凸と斜面、高台端部斜面 | 49 | 30 |
| 315 | 宮上A | 小屋 | (9.0)(4.9) | | 赤 | 良好 | 2.3V7/2直面 | 底部外周部に凹凸 | 底部外周部に凹凸 | 56 | 30 |
| 316 | 宮上B | 楕円器 | (12.4) | | 赤 | 良好 | 2.3V7/2直面 | 楕円器→底部外周部に凹凸 | 楕円器→底部外周部に凹凸 | 59 | 30 |
| 317 | 宮上B | 楕円器 | (9.6) | | 普通 | やや青い | 2.3V7/2直面 | 底部外周部に凹凸 | 底部外周部に凹凸 | 59 | 30 |
| 318 | 宮上B | 馬糞土器 | | | 赤 | 良好 | 2.3V7/2直面 | 内面へクボき、黒色施釉 | 内面へクボき、黒色施釉 | 59 | 30 |

注釈の()は復光値を示す

第7章 梨子谷遺跡第1C地区の噴砂痕について

岐阜県美濃地方では、地震痕と見られる噴砂等が6ヶ所の遺跡で見つかっている。大垣市周辺の沖積低地で5ヶ所、美濃加茂市の段丘面上で1ヶ所である（埋文関係救援連絡会議他、1996）。愛知県では、尾張を中心に多くの遺跡で地震痕が見つかっており、それに比べると岐阜県では見つかっている地震痕が少ない。今回、大垣市と同じ西濃地方に位置するが、濃尾平野内ではなく、山間部の遺跡で噴砂が検出された。梨子谷遺跡内の噴砂は、花こう岩が風化してきたまさ上からなり、低角でシート状に分布するという特徴をもつ。この噴砂について以下に記載する。

1 検出された噴砂について

梨子谷遺跡内の噴砂の位置は付図に、遺構検出面における噴砂の分布は第60図に、噴砂のほぼ南北断面は第61図に示した。

第60図のように、梨子谷遺跡内の噴砂は脈状を示しており、筒状を示すものはない。脈状を示す噴砂は大小様々であるが、長さは1m前後、幅は5cm前後のものが目立つ。また、最長のものは約2m、最大幅は約15cmである。噴砂の色はぶい黄褐色であり、噴砂が貫いている土層は黒色である。噴砂の伸びの方向は、見かけ上、N約50°WとN約55°Eの2方向がほとんどである。

この噴砂は、写真1や第61図に示すように、水平面に対して傾斜が緩く、シート状に土層中に入り込んでいる。第61図で示される噴砂は、水平面との角度が20°～30°である。噴砂の傾斜が緩く、かつ遺構検出面が水平に近くないため、噴砂の見かけの方向と真の走向とは違ってくる。また、遺構検出面での地形の傾きが場所によって異なるため、すべてのシート状の噴砂が同じ走向、傾斜をもっていても、見かけの伸びの方向は場所によって違ってくる。第61図の噴砂は第60図のa-bの断面であり、第61図の噴砂の傾斜も真の傾斜ではなく、見かけの傾斜である。そこで、第60図と第61図のa-b周辺の噴砂の状況より、真の走向と傾斜を求めるとき、N約55°E、約25°Sとなる。他の噴砂の中でこの走向と傾斜をもつと考えられないものもあるが、傾斜を10°～30°に幅をもたせると、ほとんどの噴砂がN55°Eの走向をもっていると考えることができる。

噴砂は、観察するかぎり縄文早期遺物包含層を貫くが、途中で止まっており、地表面に噴出することはなかったようである。そのため、噴砂をもたらした地震の発生年代

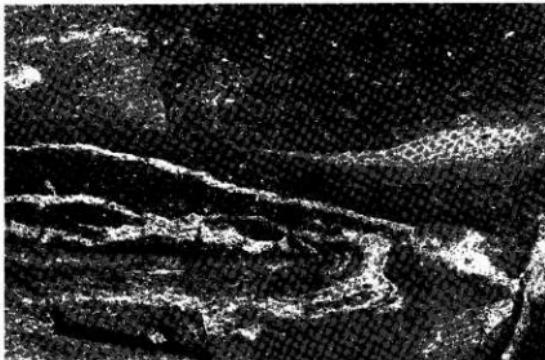
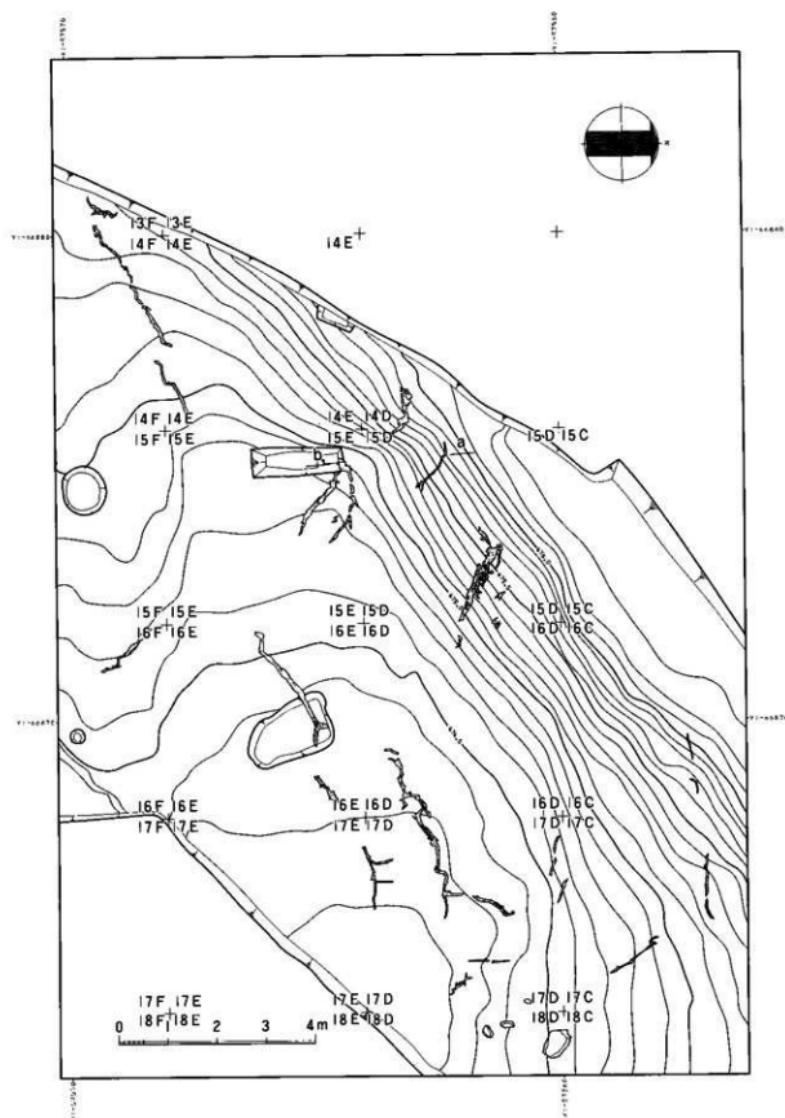


写真1 梨子谷遺跡第1C地区 噴砂痕

第60図 梨子谷遺跡第1C地区 噴砂痕平面図 ($S = 1/100$)

は、縄文早期以降としかわからない。

噴砂内の粒度については、勝パレオ・ラボに依頼をして、図61のA～E地点の粒度分析を行った。その結果については、別章に述べてある。肉眼で観察するかぎり、この噴砂は全体的にシルトや細礫も含み、淘汰はよくない。また、A（噴砂の先端）は他の場所と比べると、やや細かく淘汰はやや良い。

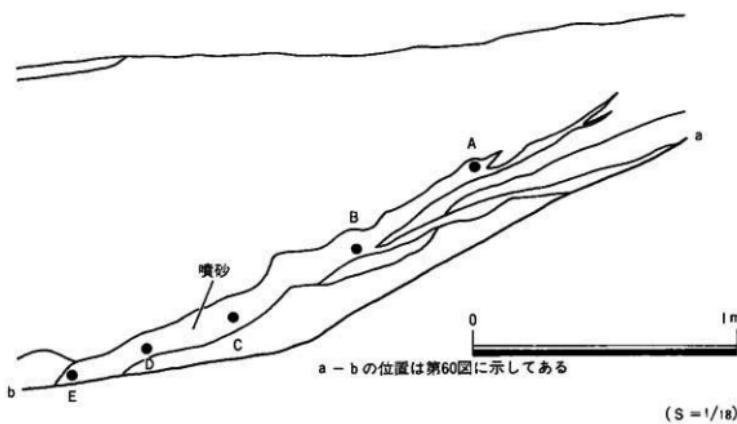
2 液状化から噴砂に至るしくみ

新潟地震以後、地震による液状化現象の研究が進み、液状化に至るメカニズムなどは明らかになっている。また、10年ほど前から、液状化によって発生したと考えられる噴砂等が全国の遺跡から次々と発見されている。それをもとにして、各地域での地震履歴、噴砂の粒度特性などについて研究がされつつある。

液状化から噴砂に至るしくみについては、藤田（1983）、藤田（1986）の“傾斜した液状化層による亀裂にもとづいた砂の噴き上げ”という考え方がある。藤田（1983）、藤田（1986）によると、地層の液状化から噴砂に至るしくみは以下のようである。

地下に一方へ傾斜する基盤（不透水層）があれば、その上位には、同じく傾いて沸水する砂層がおおっていることになる。こうした部分が液状化すれば、上位の非液状化の土砂や施設は、自分の重力に応じて液状砂上を水平に移動し、同時にその動きが、上方の土砂や施設に対して、水平引張力をもたらし破断させる。こうして生じた開口亀裂から、圧力の高くなった液状砂が噴砂となって噴きだす。

本遺跡の噴砂は、低角でシート状に入っている。前述したように、噴砂の伸びの方向は、見かけ上、N約50°WとN約55°Eの2方向がほとんどである。しかし、よく見ると、N50°Wの方向をもつ噴砂は南東に傾斜している北西部に多く、N55°Eの方向をもつ噴砂は傾斜の緩いところに存在する。



第61図 噴砂の断面図と粒度分析試料採取位置 (S = 1/18)

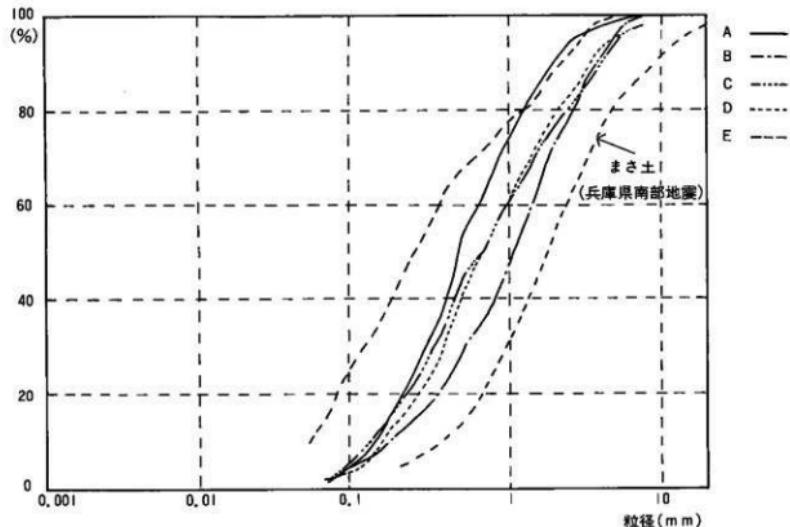
梨子谷遺跡では、何枚かのシート状の噴砂が存在し、N 55° E、S 25° Sの方向で低角に入り込んでいるため、地形の傾斜との関係で、ほとんどの噴砂が2方向にのびているように見えるのではないかと考える。噴砂の見られる地点は、第60図の等高線で示されるように、遺構検出面が南東（谷のある方向）に傾斜している。つまり、噴砂の見られる地点の基盤岩は南東に傾斜し、その上部に堆積する土層も南東に傾斜していると考えられる。

本遺跡の噴砂において、前述した液状化から噴砂に至るしくみを当てはめて考えると以下のようになる。梨子谷遺跡では、ある時期地震による揺れによって、現地表面から約2.5mの深さの疊混じりの花こう岩砂（まさ土）が液状化した。液状化したまさ土とその上にのるにぶい黄褐色土、黒色土は、谷のある方向（南東）に傾斜しているため、その斜面沿いにずれ、その時にはたらく水平引張力によって、N約 55° Eに走向をもち南東に緩く傾斜する亀裂が生じた。しかし、その亀裂は地表面まで達することなく、そこへ液状化したまさ土が噴砂として入り込んだ。

今まで発掘された遺跡内の噴砂において、低角に入り込んでいるという報告はあまりない。なぜ低角なのかは検討の余地はあるが、第23図および第61図の噴砂の断面図でわかるように、土層の境目と噴砂の傾斜が平行である。土層の境目近くに亀裂が生じやすく、水平引張力によって土層の境目近くに亀裂が生じ、そこに液状化したまさ土が入り込んだのかもしれない。

3 噴砂の粒度について

梨子谷遺跡は、「貝月山花こう岩」と呼ばれる花こう岩体中にある。そのため、遺跡内の土層は、



第62図 梨子谷遺跡第1C地区的噴砂の粒度グラフ

花こう岩が風化したもの、およびそれが土壤化したものからなっている。

梨子谷遺跡で検出された噴砂の構成粒子は、花こう岩の風化したまさ土であり、今まで遺跡で検出されている多くの噴砂とは異なっている。以前は、花こう岩が風化したまさ土は液状化しにくいものであると考えられていた。しかし、1995年に発生した兵庫県南部地震では、神戸・阪神間のまさ土による埋立地を含む広い範囲で液状化現象が確認されている（嘉門・三村、1995）。梨子谷遺跡の噴砂の粒度分析結果をパレオ・ラボの分析結果をもとに、第62図に示した。なお、比較のため、嘉門・三村（1995）による兵庫県南部地震におけるまさ土の噴砂の粒度も記入した。

第62図によると、梨子谷遺跡の噴砂の粒度は、液状化が起きやすいというものではないようだ。しかし、兵庫県南部地震における噴砂のまさ土と比較すると、全体的に粒子は細かく、液状化が生じてもおかしくはないと判断できる。

寒川（1992）によると、液状化が発生したと考えられる砂層から砂が上昇している場合、砂脈の上部ほど細かい粒子が卓越する傾向がある。本遺跡内では、液状化した地層の粒度分析はできなかつたが、砂脈の上部ほど細かい粒子が卓越するという特徴は見られなかつた。しかし、一番下部の粒子と比べると他の粒子は淘汰がよいという特徴はある。

注) 第61図は、パレオ・ラボが作成した図を転用したものである。また、第62図は、パレオ・ラボの分析結果を使用して作成したグラフである。

文献

- 埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会（1996）：発掘された地震痕跡、825p
- 藤田至則（1983）：噴砂現象の規則性とその成因。新潟大災害研年報第5号、P53～69
- 藤田至則・鈴木幸治（1984）：昭和59年長野県西部地震による地震灾害。新潟大災害研年報第6号、P111～116
- 藤田至則（1986）：傾斜する地下水面上に起因する亀裂・噴砂・崩壊などの地震灾害。地質学論集第27号、P95～108
- 嘉門雅史・三村 衛（1995）：兵庫県南部地震による液状化災害。自然災害科学14巻3号、P189～200
- 寒川 旭（1992）：地震考古学－遺跡が語る地震の歴史－。中央公論社、251p

第8章 自然科学分析 —梨子谷遺跡の噴砂痕の粒度分析—

菱田 量(拂バレオ・ラボ)

1. 試料

梨子谷遺跡は岐阜県揖斐郡春日村に所在する。遺跡には、砂礫混じりの黄褐色シルト質粘土層が谷状にみられ、谷を埋積するように砂礫混じりの黒色土壤(縄文時代早期遺物包含層)が堆積している。この黒色土壤の中に、噴砂痕(あるいは地割れ跡)と思われる砂質堆積物が認められた。この砂質堆積物は、セクション断面では、幅5~10cm程度、長さ約150~200cmにわたって細長く、低角度で挟在している(図1)。この堆積物は主として細礫、粗粒砂が目立つ淘汰の悪い砂質堆積物である。断面では、堆積物の最下部は下位の層とつながっていないが、明瞭には確認できないとのことである。この堆積物の上部から最下部にかけてA~Eの5試料を採取し、粒度分析の試料とした。なお、比較試料として下位の層や周辺部の堆積物の粒度組成を調べる必要があると思われたが、試料採取が不可能であったことから、下位層の分析は行っていない。

2. 方法

(1) 試料をビーカーに入れ、水を加えて攪拌し分散させる。その後放置して沈殿させ、うわずみを除去する。

(2)(1)の試料を恒温乾燥器で110°Cで乾燥させ、標準フルイを $1/2\phi$ (phi; ファイ)間隔で-3.0~4.5φまで重ねて振とうし、フルイ分けする。

(3) 4.5φ未満の細粒成分については、試料全体に対して占める割合としてあらわす。

(4) 4.5φ以上の成分について、各粒度階の重量%を求め、粒度分布をヒストグラムにして結果を表した。また、Friedman(1961, 1967)の積率法により平均粒径(mean)、淘汰度(標準偏差: Standard deviation)、歪度(skewness)、尖度(kurtosis)を算出した。計算式は以下の通りである。

$$\text{平均粒径 } x\phi = (\sum f_i x_i) / 100$$

$$\text{淘汰度 } \sigma\phi = (\sum (f_i (x_i - x\phi)^2) / 100)$$

$$\text{歪度 } \alpha\phi = (\sum f_i (x_i - x\phi)^3) / 100(\sigma\phi)^3$$

$$\text{尖度 } \beta\phi = (\sum f_i (x_i - x\phi)^4) / 100(\sigma\phi)^4$$

f_i : 各粒度階の重量% x_i : 各粒度階の中央粒径値(ファイ尺度)

粒度分析結果はすべて ϕ (phi, ファイ)尺度で表示している。ファイ尺度では、粒径 d_{mm} の粒子は $\phi = -\log 2 d$ となり、1mmが0φになる。これより粒径が半減することにφの値は1ずつ増え、粒径が倍になるほど1ずつ減る。すなわち、0φを基準に正(+)の値が大きいほど細粒で、負(-)の値が大きいほど粗粒になる。また、統計的諸指標のうち、平均粒径は粒度分布全体を代表する値である。淘汰度は粒子の大きさのそろい方を表し、値が0に近いほど粒径がよくそろっていることを示す。歪度は、粒度分布のかたよりを表し、0を対称に正ほどモードが平均より粗粒の方にかたより、逆に負は細粒の方に偏していることを示す。尖度は粒度分布曲線の山の尖り方を表し、値の大きいも

のは突出した曲線を、小さなものは偏平な曲線を表す。

(5) 堆積物中の碎屑粒子の粒径区分は、 -6.0ϕ (64mm) ~ -2.0ϕ (4mm) が中礫、 -2.0ϕ (4mm) ~ -1.0ϕ (2mm) が細礫、 -1.0ϕ (2mm) ~ 4.0ϕ ($1/16\text{mm}$: 0.0625mm) が砂、 4.0ϕ ~ 8.0ϕ ($1/256$: 0.0039mm) がシルト、 8.0ϕ 未満のものが粘土である。

3. 結果

各試料の粒度分析結果から、 4.5ϕ 以上の成分の粒度分布のヒストグラムと累積曲線を図2に表した。また第20表にFriedman (1961, 1967) の積率法により平均粒径、淘汰度、歪度、尖度を示した。

第20表 粒度分析による統計的指標値

| 試料 | 平均粒径 | 淘汰度 | 歪度 | 尖度 |
|----|---------------|--------|--------|--------|
| | ϕ (mm) | ϕ | ϕ | ϕ |
| A | 0.985 (0.504) | 1.460 | -0.027 | 2.544 |
| B | 0.094 (0.940) | 1.681 | 0.477 | 2.553 |
| C | 0.509 (0.702) | 1.848 | -0.031 | 2.171 |
| D | 0.461 (0.727) | 1.695 | 0.021 | 2.430 |
| E | 1.737 (0.399) | 1.931 | -0.372 | 1.956 |

ϕ : Phi, ファイ

なお、 4.5ϕ 未満の細粒成分については、試料全体に対して、それぞれ以下のような割合になる。

A : 2.2%, B : 3.1%, C : 3.1%, D : 2.6%, E : 18.4%

(粒度組成の特徴)

粒度分析を行ったA~Eの試料は、砂および細礫が主体の堆積物であるが、Eは、他の試料と比較してシルト・粘土分が多く含まれる。また、含まれる礫は、円磨されていない角礫状のものがほとんどである。

淘汰度は1.4以上を示し、どの試料も淘汰は悪い。以下に粒度組成の特徴を分析試料中での比較で述べる。

A : 平均粒径は0.504mmである。淘汰度が1.460で、分析試料中では淘汰がよい。

B : 平均粒径は0.940mmで、分析試料中ではもっと粗粒である。歪み度が0.477で、粗粒の方へかたよっており、粗粒砂、細礫、中礫が立つ。

C : 平均粒径は0.702mmである。粗粒から細粒なものまで含まれ、淘汰は比較的悪い。

D : 平均粒径は0.727mmである。Cと同様に粗粒から細粒のものまで含まれ、淘汰は比較的悪い。

E：平均粒径は0.399mmで、分析試料中ではもっとも細粗である。淘汰度が1.931で淘汰がもっとも悪く、ばらついている。また、歪度が-0.372で、細粒の方へかたよっている。分析試料中で4.5φ以下の細粗成分が占める割合がもっとも大きく、シルト、粘土分が多く含まれていることがわかる。尖度も低い値である。

一般的に、下位層が液状化して噴砂になった堆積物では、最下部がもっとも粒度が粗く、砂脈の上部へいくほど細粒になる傾向がある（たとえば寒川、1992）。ここで堆積物の粒度分析結果をみると、最下部から上部にかけて系統的な特徴の変化は認められず、全体に淘汰が悪いことが共通している。また、最下部のEの試料は、A～Dとはやや異なり、細粒分が多いという特徴が顕著で、一般的な噴砂跡堆積物の粒度特性とは異なる。

引用・参考文献

- 地学団体研究会・新版地学事典編集委員会 編（1996）『新版地学事典』、平凡社、1443p.
- 碎屑性堆積物研究会 編（1983）『堆積物の研究法—礫岩・砂岩・泥岩—』、地学双書24、地学団体研究会、377p.
- 寒川 旭（1992）『地震考古学 遺跡が語る地震の歴史』、中公新書1096、中央公論社、251p.
- Friedman,G.H. (1961) Distinction between dune,beash and river sands from the textural Characteristics.Jour.Sed.Petrol. 31, 514-529
- Friedman,G.H. (1962) Comparison of moment measures for sieving and thinsection datain Sedimentary petrologicalstudies.Jour.Sed.Petro 1, 32,
- Friedman,G.H. (1967) Dynamic processes alld statisticalparameters compared for size frequency di, Sribution of beach and river sands.Jour.Sed.Petrol. 37, 327-354.

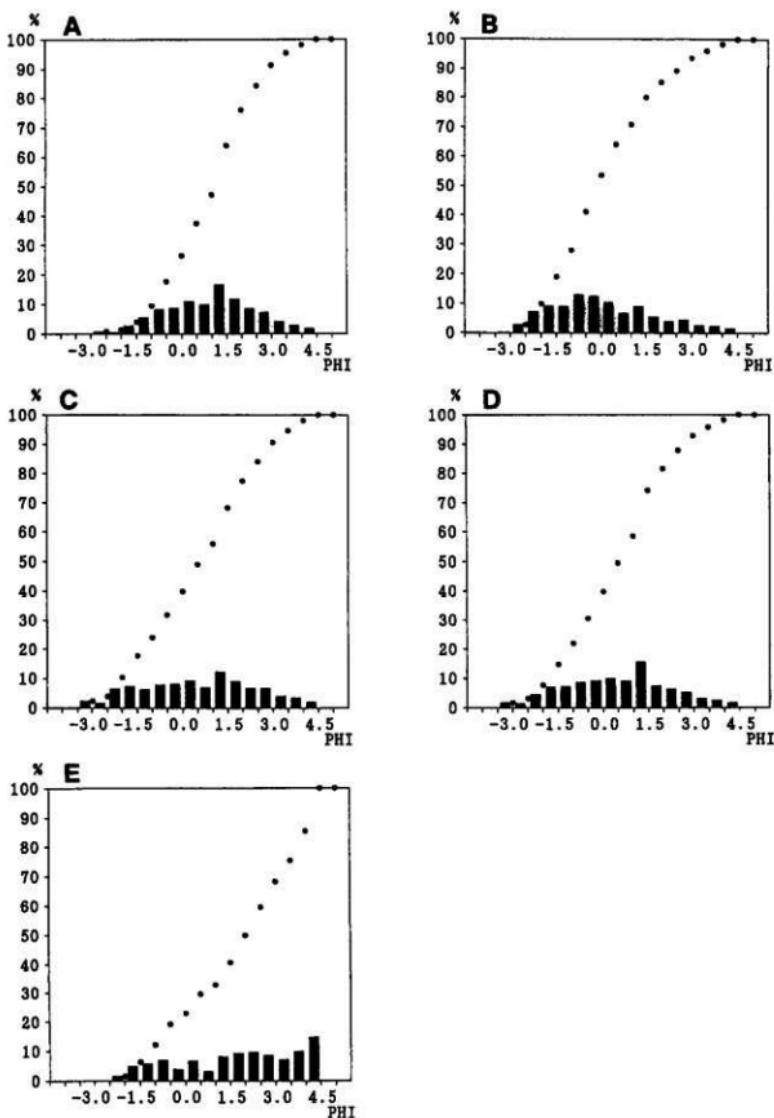


図63 各試料(A～E)の粒度組成(・は積算%を示す)

第9章 まとめ

本報告書は、細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡の4遺跡、10地区的報告書である。そのうち、細野遺跡第1地区・梨子谷遺跡第2地区・千日遺跡については、遺構を確認できず、遺物量も少量だったので、事実のみを記載した。ここでは、4遺跡全体のまとめと、細野遺跡第2地区・梨子谷第1C地区から検出した「集石遺構に使用された礫」についてと、梨子谷第1A・B・C地区から出土した縄文土器について述べてみたい。

1 発掘調査の成果

細野遺跡

細野遺跡では、第2地区から集石遺構を2基、炭化物の集中区を3ヶ所、土器集中区を1ヶ所検出した。集中区から出土した縄文土器は、縄文早期中葉の高山寺式土器で、全体の約1/3が残っており復元することができた。住居跡を確認することはできなかったが、炭化物の集中区が確認され、土器集中区周辺からも炭化物が多数出土していることから、縄文時代の人々の生活区域であったことは、間違いないと思われる。なお、集石遺構1(SI1)については、¹⁴C年代測定法によると6390±120年という結果がでていることや、高山寺式土器が出土した周辺の炭化物が¹⁴C年代測定法で7500±220yrBPという年代がでていること、層位的にも高山寺式土器が出土した第5層よりも上の第4層中層から検出されていることから、高山寺式土器に伴うものではないと思われる。

梨子谷遺跡

第1A地区・B地区については遺構の確認はできなかったが、第1C地区については集石遺構6基、不明遺構1基、土器集中区2ヶ所を確認した。遺構は、第1C地区の北側に集中しているが、耕作によって削平を受けているので、南の方に遺構があった可能性も考えられる。SI3～SI6の集石遺構から採取した炭化物の¹⁴C年代測定をみると、縄文時代早期後半のなかでかなりのばらつきがあり、縄文時代の人々が、この地区である程度継続して生活していた可能性も考えられる。

遺物については、第1C地区第4層より多数の縄文早期後半の条痕文土器が出土している。特に、増子氏が提唱した、「八ツ崎1式」といわれる東海地方を中心とした土器に類似した土器がまとまって出土している点は特筆すべきであるといえる。また、第1A地区・第1B地区からは、縄文早期の土器として押型文土器しか出土しておらず、第1Cでは、押型文と条痕文の両方が出土している。このため、第1C地区は、第1A・B地区に比べ縄文時代早期の中では長い期間生活していた可能性も考えられる。

第2地区については、遺構が確認できなかったが遺物量から考えて遺物散布地と考えられる。

千日遺跡

千日遺跡は20m²を掘削した。トレントBに黒色の包含層が確認できたが、河川の近くで各時期ごとの遺物が混在していた。傾斜地の関係で、上流部や山手の遺物の流れ込みの可能性もあり、遺跡の中心はもう少し山手側または上流部にあると思われる。

宮上遺跡

宮上遺跡からは、A地区で土坑3基、B地区で土器集中区1ヶ所を確認した。B地区では、フラッ

トな面を作るために人工的な盛り土がしてあったが、具体的な遺構は確認できなかった。近くに中世城郭の小島城跡があり、この遺跡に関連する遺構も想定されたが、具体的には確認できなかった。

遺物については、古代以降の遺物として須恵器や黒色土器（西濃地区では2例目）などが出土しているが、小島城跡に関わるような遺物は見られなかった。縄文時代の遺物として、少量ではあるが早期・前期・中期の土器が出土している。特に、8点ほどではあるが、縄文早期の穗谷式土器が出土しており、各地での出土数が少ないとあって、貴重な遺物であると思われる。

宮上遺跡全体をみると、発掘調査をおこなった地点が崩積成堆積物が堆積する地域の東端にあたり、遺跡の中心地域からややはざれているように思われる。出土遺物からみて、少なくとも縄文時代早期から中期の末葉までの遺跡が存在すると思われるが、今回の調査でその全体像を明らかにすることはできなかった。

2 細野遺跡第2地区・梨子谷遺跡第1C地区の集石遺構について

今回の発掘調査で検出した集石遺構は、細野遺跡第2地区で2基、梨子谷遺跡第1C地区で6基である。8基のうち6基については掘り込みのある遺構で、6つの遺構すべてから炭化物が出土している。また、火の使用に伴うと思われる礫の割れや炭化物の付着もみられた。その中に特に注目したのは礫の石材である。火を使用するのであれば、熱に耐えうる石材を使用すると思われるが、遺構検出時に目立った石材は、花こう岩である。しかも検出時には、風化して砂状になっているものも少なからずあった。そこで、集石に使用された石材の様子を観察しその使用状況を記録した。第21表～第24表を参考見ていただきたい。

細野遺跡第2地区の集石遺構に使用されている石材は、SI1についてはホルンフェルスが多く、SI2については、花こう岩が半分をしめている。どちらもこの区域で産出する岩石で、年月がたつと自然風化しやすいが、周辺に硬質の礫がないためこれらの礫を使用していると思われる。そのほかにも、アブライドなど花こう岩と同じ性質の岩石などを使用している。梨子谷遺跡第1C地区について使用された石材をみると、SI1を除いて花こう岩が多い。特に掘り込みがあり、火の使用が明らかなSI3～SI6については、60%以上が花こう岩を使用している。

さらに礫の形状をみると、細野遺跡第2地区・梨子谷遺跡第1C地区のどちらをみても、角礫の割合が高く、掘り込みのある集石遺構については、すべて角礫が40%以上をしめている。周辺の谷川には、地元の人が「トラ石」と呼んでいる硬質の岩石も転石としてあるが、それらの転石を川から運んで集石遺構をつくった形跡はみられなかった。

また、掘り込みを持たない梨子谷遺跡第1C地区的SI1・SI2は、使用している石材の種類やその割合がSI1についてはホルンフェルスが多く、SI2も花こう岩が1番多いものの、他の種類の岩石もかなり多く含まれる。礫の形状も、角礫よりも少し丸みのある亜角礫の方が多い。「掘り込みのある・なし」「石材の種類とその割合」「礫の形状」などから見ても、SI1やSI2は、SI3～SI6とは異なる用途でつくられたものではないかと思われる。

第21表 細野遺跡第2地区集石遺構の礫石材観察表(1)

| 遺構 | 地区 | 総数 (個) | 総質量 (g) | 平均質量 (g) | 石 材 (%) | | | | | | | | |
|------|-----|-----------|------------|-------------|------------|------|------|---|-----|-----|---|------|-----|
| | | | | | A | B | C | D | E | F | G | H | I |
| SI 1 | 34F | 997 | 470621.8 | 472.03 | 6.3 | 7.3 | 19.7 | 0 | 8.7 | 2.6 | 0 | 45.7 | 9.7 |
| SI 2 | 33C | 25 | 11240.8 | 449.632 | 52.0 | 12.0 | 36.0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

第22表 細野遺跡第2地区集石遺構の礫石材観察表(2)

| 遺構 | 形 状 (%) | | | | 被熱 (%) | | 割れ (%) | | |
|------|------------|------|------|--------|--------|------|--------|------|--|
| | 円 礫 | 亜円礫 | 亜角礫 | 角 礫 | あり | なし | あり | なし | |
| SI 1 | 0.9 | 17.8 | 35.9 | 45.4 | 8.8 | 91.2 | 9.8 | 90.2 | |
| SI 2 | 4.0 | 24.0 | 28.0 | 44.0 | 72.0 | 28.0 | 44.0 | 56.0 | |

第23表 梨子谷遺跡第1C地区集石遺構の礫石材観察表(1)

| 遺構 | 地区 | 総数 (個) | 総質量 (g) | 平均質量 (g) | 石 材 (%) | | | | | | | | |
|------|-----|-----------|------------|-------------|------------|------|------|-----|------|------|-----|------|-----|
| | | | | | A | B | C | D | E | F | G | H | I |
| SI 1 | 15K | 126 | 16253.3 | 128.99 | 12.7 | 11.9 | 6.4 | 0 | 15.1 | 13.4 | 0 | 31.0 | 9.5 |
| SI 2 | 16M | 37 | 8835.3 | 238.79 | 29.8 | 2.7 | 24.3 | 0 | 8.1 | 18.9 | 0 | 10.8 | 5.4 |
| SI 3 | 19B | 226 | 49813.4 | 440.82 | 67.7 | 1.8 | 12.4 | 0 | 6.2 | 0.9 | 0 | 10.6 | 0.4 |
| SI 4 | 19J | 173 | 76935.7 | 444.71 | 78.0 | 0 | 17.9 | 0 | 1.2 | 1.7 | 0 | 1.2 | 0 |
| SI 5 | 15F | 125 | 86832.5 | 694.66 | 62.4 | 0 | 6.4 | 0.8 | 4.0 | 0 | 1.6 | 24.8 | 0 |
| SI 6 | 21A | 278 | 103222.5 | 587.13 | 65.1 | 6.8 | 24.8 | 0 | 0.4 | 2.2 | 0 | 0.7 | 0 |

第24表 梨子谷遺跡第1C地区集石遺構の礫石材観察表(2)

| 遺構 | 形 状 (%) | | | | 被熱 (%) | | 割れ (%) | | |
|------|------------|------|------|--------|--------|------|--------|------|--|
| | 円 礫 | 亜円礫 | 亜角礫 | 角 礫 | あり | なし | あり | なし | |
| SI 1 | 7.2 | 30.1 | 42.9 | 19.8 | 30.1 | 69.9 | 13.5 | 86.5 | |
| SI 2 | 2.7 | 8.1 | 59.5 | 29.7 | 27.0 | 73.0 | 18.9 | 81.1 | |
| SI 3 | 2.6 | 11.1 | 20.4 | 65.9 | 30.5 | 69.5 | 32.7 | 67.2 | |
| SI 4 | 0.6 | 5.2 | 17.3 | 76.9 | 30.1 | 69.9 | 34.7 | 65.3 | |
| SI 5 | 0 | 4.9 | 30.9 | 64.2 | 52.0 | 48.0 | 16.0 | 84.0 | |
| SI 6 | 0 | 4.3 | 34.5 | 61.2 | 25.5 | 74.5 | 21.2 | 75.8 | |

(石材の種類)

- A. 花こう岩 B. アブライト C. 花こう閃綠岩 D. 安山岩 E. 泥岩 F. 砂岩
G. チャート H. ホルンフェルス I. 泥岩のホルンフェルス化したもの

(石材の形状、被熱について)

・礫の形状については、土井庄一郎著書「地学野外調査の方法」に記載されている「礫の円磨度」の図を参考に、超角礫と角礫を「角礫」、亜角礫を「亜角礫」、亜円礫を「亜円礫」、円礫と超円礫を「円礫」として肉眼観察で分類した。

・被熱は、礫の表面が熱で赤くなっているかどうかと、炭化物の付着で判断した。

3 梨子谷遺跡第1地区の押型文土器と条痕文土器について

(1) 第1地区的押型文土器について 注1

梨子谷遺跡第1地区出土の押型文土器は、A、B、Cの3つの地区によってその様相を異にする。まず、第1A地区では、第4層・第5層から44・47・50・51の土器に代表されるように、口縁内面に櫛状文と呼ばれる文様を施した土器が出土している。一般には黄鳥式とよばれるものである。第1B地区では、第4層から第1A地区出土の押型文土器に類似した土器が3点出土している。第1C地区では、第5層の16M・16Nグリッドを中心にして、楕円文と山形文の両方をもつ押型文土器が出土し、第5層の14Mグリッドを中心にして、口縁に斜め方向の沈線と楕円押型文を組み合わせた土器が出土している。これらは、細久保式土器に類似する土器で、その中でも比較的新しい段階の土器かと思われる。また、第1C地区では、第4層中に高山寺式土器が散在していた。

このように、第1A地区と第1C地区は、40mほど離れていないが、出土した押型文は系統の違うものである。上にあげた土器は、いずれも包含層から出土したもので、遺構にからんだものではないが、出土する地域の中心が違うことは明らかである。これが、地域差であるか、時期差であるのかははっきりしないが、これから周辺地域の調査の参考になると思われる。

(2) 第1C地区的条痕文土器について 注2

第1C地区からは、出土数の半数以上の縄文土器が条痕文土器である。出土層位は、第4層を中心とする。その中で、特にまとめて出土している土器は、SU2やSX1出土土器のように、明らかに段を有し、口縁部と胴部を区画する連続爪形文や連続刺突文を施し、口縁部には鋸歯状の爪形ないし刺突文が施されている。SU1では、段は明確ではないが地紋に縄文を施し、その上から口縁と胴部を区画する爪形文を口縁に平行に施しているものがある。また、第1C地区で出土している縄文早期の条痕文土器の底部は、すべて平底で盤端に小平底や尖底のものはなかった。これらのことからも、第1C地区的条痕文土器の主体は、八ツ崎I式かと思われる。包含層からも、有段で口縁に平行した連続爪形文や連続刺突文を施す土器が多い。ただ、小片については、部分的な要素しかわからないので、明確なことはいえない。さらに、この時期に対応する関東の土器として、茅山下層式土器があるが、第1C地区で茅山下層式と思われる土器は2点ほどしか出土していない。

SU1、SU2、SX1の層位的な関係は、SU1とSX1が隣接したグリッドにあり、土器の出土状況も第4層の中位にあたるのに対し、SU2は、やや南に離れた第4層の下位から出土している。土器の器形や文様については、SU1出土の土器は、明確な段ではなく、文様も口縁部に縄文を地紋にし爪形も口縁に平行に施すものが主体であることから、やや新しい要素のものかと思われる。しかし隣接するSX1出土の土器は、明確な段を有し、口縁に平行した爪形文や鋸歯状の文様を施している。したがって、これらの文様の差が明確な時期差といいがたい部分もあるように思われる。

注1) 梨子谷遺跡第1地区的押型文土器については、矢野 健一氏よりくわしくご教示をいただいた。矢野氏の説明を筆者が十分に生かせなかつた部分があるが、今後の課題としたい。

注2) 八ツ崎I式土器の位置づけについては、茅山下層の新しい段階に位置づける考え方と、茅山下層式の間に位置づける考え方がある。第1C地区的八ツ崎I式と思われる土器については、どちらかといえば茅山下層式に類似した土器と同じ層位から出土していると言うだけで決め手はない。

4 おわりに

春日村における本格的な発掘調査は、今回の細野・梨子谷・千日・宮上遺跡の調査がはじめてである。当センターが、岡場整備関係の発掘調査を受託したのも今回がはじめてのことであった。慣れない現場で、発掘作業を見た経験の少ない方に、発掘調査の内容や意味づけをしながら、調査を進めて行くことは、なかなか容易なことではないと感じた。しかし、実際に遺構や遺物を実見してもらい、少しづつ調査の内容を理解してもらうにしたがって、調査に対する見方や考え方も幅広くなっているように思われる。

特に、1年を通して1ヶ所に落ち着いて発掘するのではなく、約10ヶ月間、4現場・10ヶ所の発掘場所を渡り歩くのはつらい面もあった。この年は、冬が早く12月の初頭には大雪で遺跡が80cm下にうまってしまった時もあった。作業員さんの働く時間の半分を雪どけに使い、残りの半分で発掘したということもあった。調査員が、発掘・整理作業以外の業務に追われているときも、じっと我慢をしてそれぞれの作業を続けてもらったこともあった。にもかかわらず、たくさんの人々がこの発掘調査に関わり、困難な発掘・整理条件を克服してくださったことに感謝したい。特に、春日村のいろいろな立場の方に、さまざまな視点から発掘作業を応援していただいたことは、頑の下がる思いである。また、貴重な時間をさいて、多くの方が遺跡や遺物を見てコメントしてくださったことに感謝したい。

今回の発掘調査で、調査員が緻密な調査や整理作業をすすめていったかどうか疑わしいが、より緻密で正確な遺跡の記録保存の立場から、今回の発掘調査の内容を次のステップへ進むための良い経験をしたい。

参考・引用文献（第7章・第8章を除く）<順不同>

- | | |
|---------------|------------------------------------------------------|
| 中井 均ほか | 1986 「磯山城遺跡」 米原町教育委員会 |
| 春日村 | 1983 「春日村史」 |
| 守屋芳夫ほか | 1986 「高風呂遺跡」 茅野市教育委員会 |
| 増子康真 | 1983 「八ツ崎I式土器をめぐって」『古代人』第41号 |
| 仁科 章 | 1977 「破入遺跡」 勝山市教育委員会 |
| 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 1989 「下段遺跡」(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第87集) |
| 和田秀寿 | 1988 「縄文早期高山寺式土器の成立過程と細分編年」『古代学研究』第117号 |
| 関野哲夫 | 1988 「高山寺式土器の編年」—その細分と西日本地域との関係について— 『先史考古学研究』第1号 |
| 赤星直忠・岡本勇 | 1957 「茅山貝塚」『横浜市博物館研究報告』第1号 横浜市博物館 |
| 山下勝年 | 1990 「東海西部地域における縄文早期中葉の土器群」『知多古文化研究』6 |
| 紅村弘・増子康真 | 1977 「東海先史の諸段階」(資料編I) |
| 渡辺 誠・小笠原久和 | 1982 「形原遺跡発掘調査報告書」 蒲郡市教育委員会 |
| 山下勝年 | 1976 「清水ノ上貝塚」(南知多文化財調査報告書 第1集) |

南知多町教育委員会

- 帝塚山考古学研究所 1988 「縄文早期を考える」－押型文化の諸問題－
- 長野県考古学会縄文時代（早期）部会編 1977 「シンポジウム 押型文と沈線文」本編 資料編
- 宇野治幸・佐野康雄 1991 「小の原遺跡・戸入陣子墓遺跡」岐阜県教育委員会
- 金子直行 1991 「茅山上層式の再検討」『埼玉考古学論集』
- 谷口康浩 1986 「縄文時代「集石造構」に関する試論」『東京考古』4
- 同 1988 「条痕文系土器様式」『縄文土器大観』1
- 坪井清足 1956 「石山貝塚」平安学園考古学クラブ
- 矢野健一 1993 「押型文土器の起源と変遷に関する新視点」『研究紀要』2
- 三重県埋蔵文化財センター
- 片岡 肇 1994 「押型文土器」『縄文文化の研究』3
- 同 1982 「橿沢式土器の再検討」『信濃』第32巻第4号
- 戸沢充則 1955 「橿沢押型文遺跡」『石器時代』2
- 松沢亜生 1957 「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代』4
- 可児通宏 1988 「押型文土器様式」『縄文土器大観』1
- 宮下健司 1988 「東海条痕文系土器様式」『縄文土器大観』1
- 網谷克彦 1988 「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』1
- 谷口和人他 1997 「西田遺跡」（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第29集）
- 篠田通弘他 1994 「長吉遺跡・普賢寺跡」（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第12集）
- 藤原良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告書」『瀬戸市歴史民俗博物館 研究紀要』V
- 藤原良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号
- 三重県埋蔵文化財センター
- 森 隆 1995 「2 黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社

図 版

図版 1



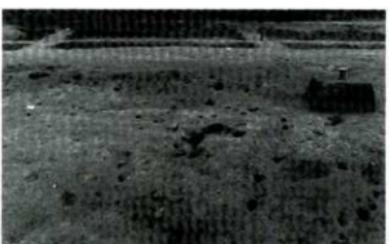
細野遺跡全景（西から）



第1地区 繩文土器出土状況



細野遺跡第1地区発掘前の状況（南西から）



第1地区 完掘状況（東から）



第1地区 作業風景（北西から）



第1地区 完掘状況（空撮）



第1地区 5H 西壁セクション



第2地区 発掘前の状況（西から）



第2地区 集石遺構（SI 1）半剖



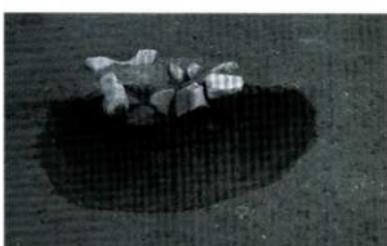
第2地区 作業風景（北東から）



第2地区 集石遺構2（SI 2）平面



第2地区 34D 北壁セクション



第2地区 集石遺構2（SI 2）半剖



第2地区 集石遺構1（SI 1）平面



第2地区 炭化物集中区2平面

图版 3



第2地区 炭化物集中区3平面



第2地区 土器集中区拡大



第2地区 土器集中区(全体)



第2地区 完掘状况



第2地区 完掘(空撮)



梨子谷遺跡第1地区全景（南西から）



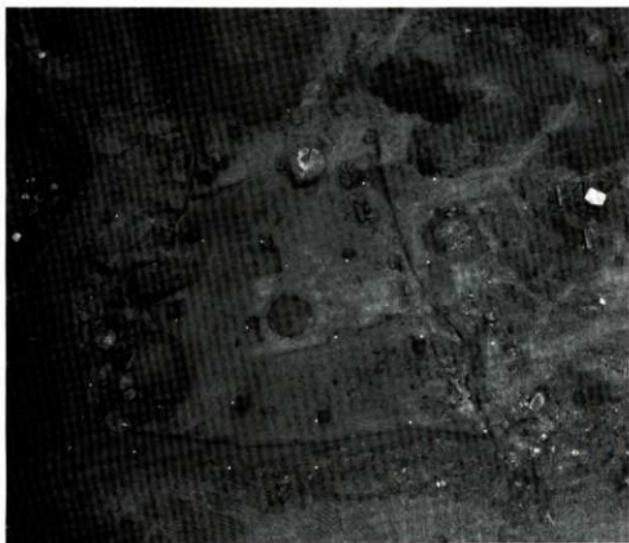
第1A地区 3R 西壁セクション



第1A地区 発掘前の状況（南から）

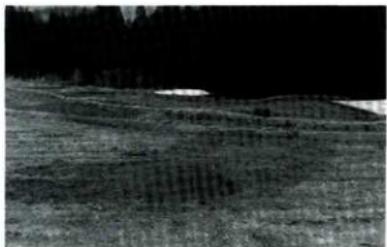


第1A地区 完掘状況（南東から）



第1A地区 完掘（空撮）

図版 5



第1B地区 発掘前の状況（西から）



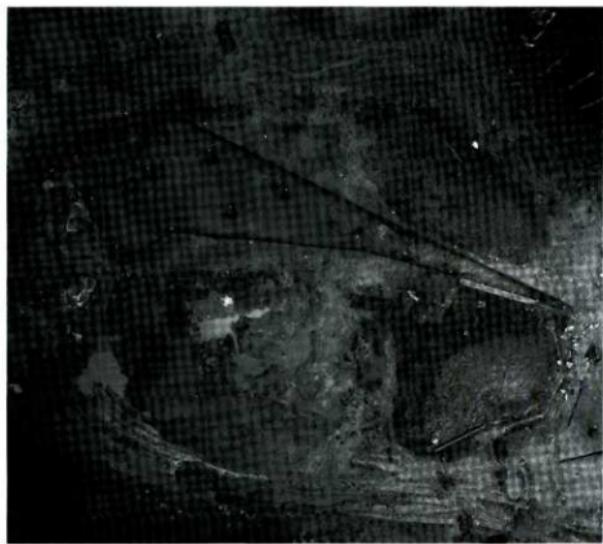
第1B地区 作業風景（溝）



第1B地区 10V 北壁セクション



第1B地区 発掘状況



第1B地区 完掘（空撮）



第1C地区 発掘前の状況（南西から）



第1C地区 集石遺構1 (SI 1) 半剖



第1C地区 作業風景（手振り）



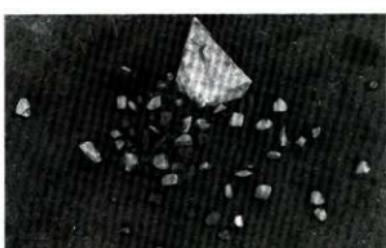
第1C地区 集石遺構2 (SI 2) 平面



第1C地区 D列 15~18北壁セクション

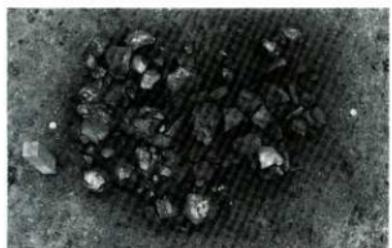


第1C地区 集石遺構2 (SI 2) 半剖

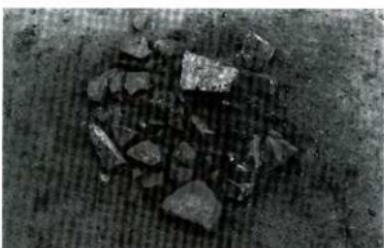


第1C地区 集石遺構 (SI 1) 平面

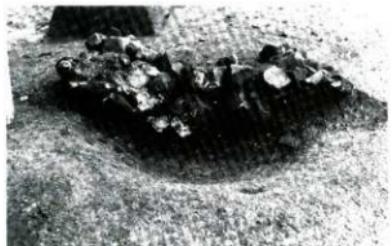
图版 7



第1C地区 集石遗構3 (SI 3) 平面



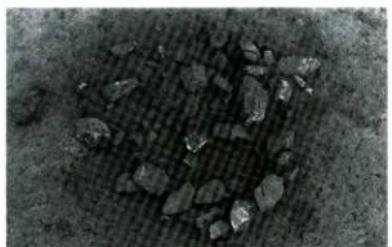
第1C地区 集石遺構5 (SI 5) 平面



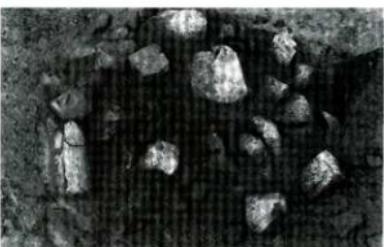
第1C地区 集石遺構3 (SI 3) 半剖



第1C地区 集石遺構5 (SI 5) 半剖



第1C地区 集石遺構4 (SI 4) 平面



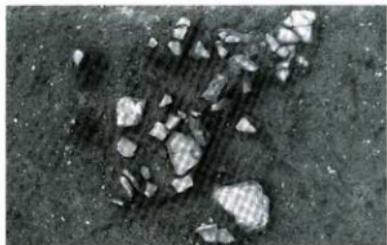
第1C地区 集石遺構6 (SI 6) 平面



第1C地区 集石遺構4 (SI 4) 半剖



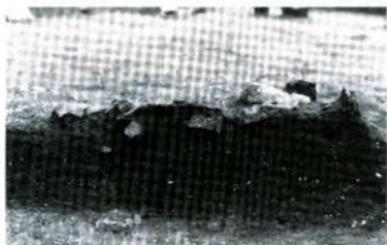
第1C地区 集石遺構6 (SI 6) 半剖



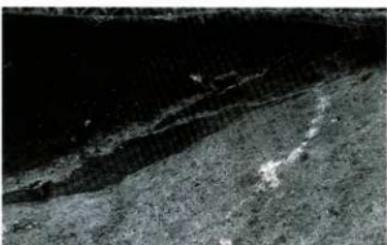
第1C地区 土器集中区(SU 1) 平面



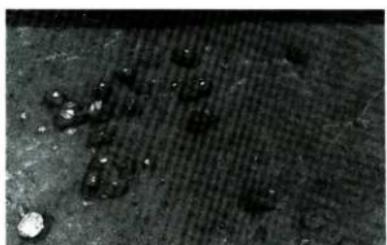
第1C地区 不明遺構1 (SX 1) 半割



第1C地区 土器集中区(SU 1) 半割



第1C地区 噴砂痕セクション(東から)



第1C地区 土器集中区2 (SU 2) 平面



第1C地区 噴砂痕平面15D



第1C地区 不明遺構1 (SX 1) 平面

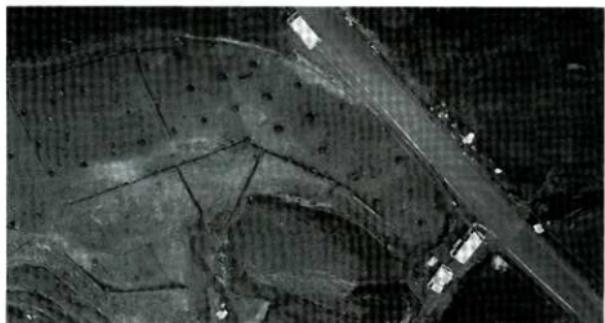


第1C地区 完掘状況(北東から)

图版 9



梨子谷遺跡
第1C地区完掘
(空撮 2)





梨子谷遺跡第2地区発掘前の状況（北西から）



第2地区 自然流路 平面（南から）



第2地区 作業風景（北東から）



第2地区 自然流路 挖削中（南から）



第2地区 D列北壁セクション



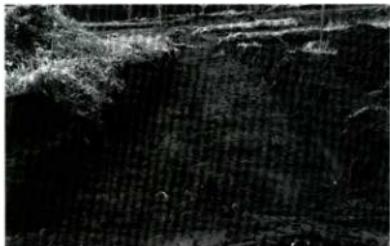
第2地区 完掘状況（西から）



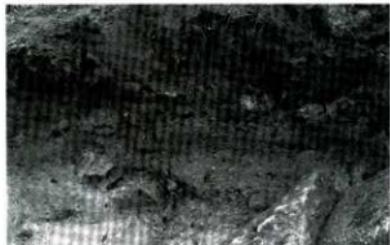
第2地区 完掘（空撮）



千日遺跡発掘前の状況



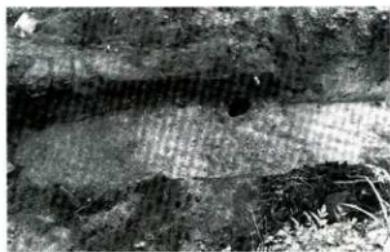
千日遺跡表土除去後の状況（北から）



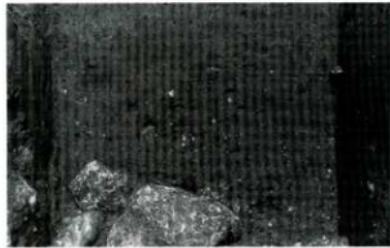
トレンチA セクション（西から）



トレンチB 完掘状況（南から）



トレンチA 完掘状況（西から）



トレンチB 北壁セクション



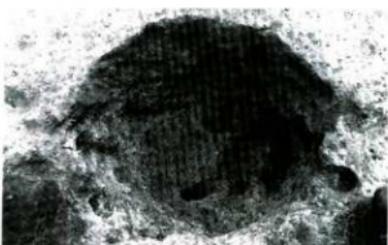
宮上遺跡全景（北から）



A地区石器出土状況



A地区発掘前の状況（南から）



A地区土坑1（SK 1）完掘状況



A地区作業風景（北から）



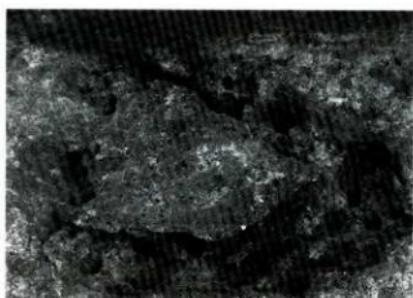
A地区土坑2（SK 2）完掘状況



A地区西壁セクション



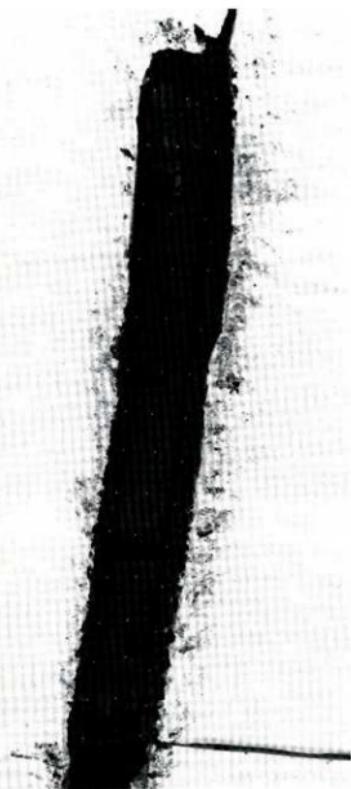
A地区 積雪状況



A地区 倒木痕検出状況（西から）



A地区 完掘状況（南から）



A地区 完掘状況（空撮）



宮上遺跡B地区 発掘前の状況（北から）



B地区 完掘状況（南から）



B地区 作業風景



B地区 西壁セクション

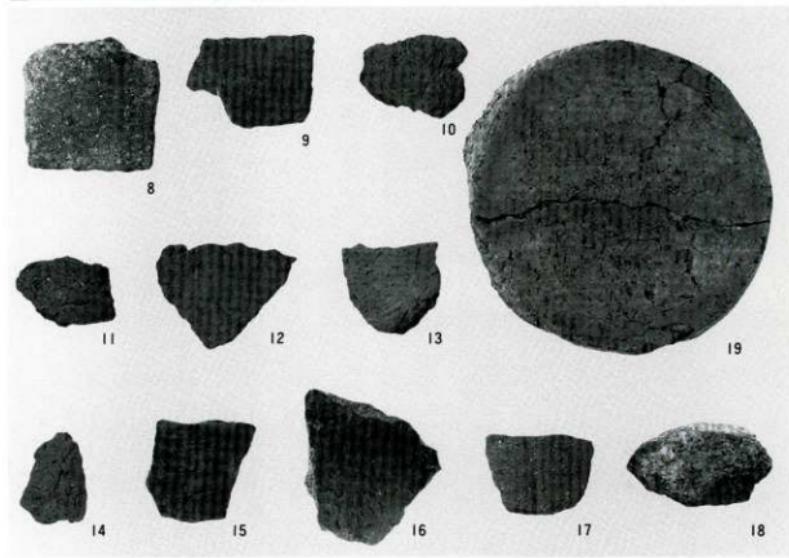
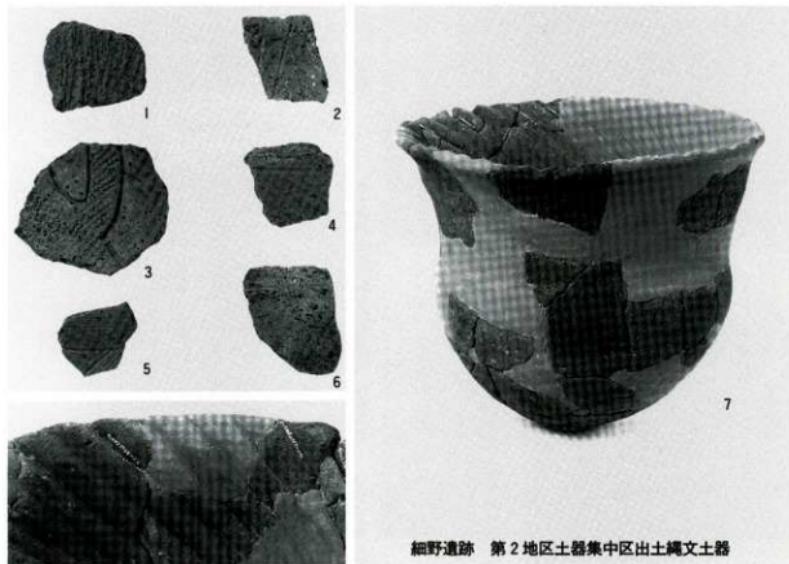


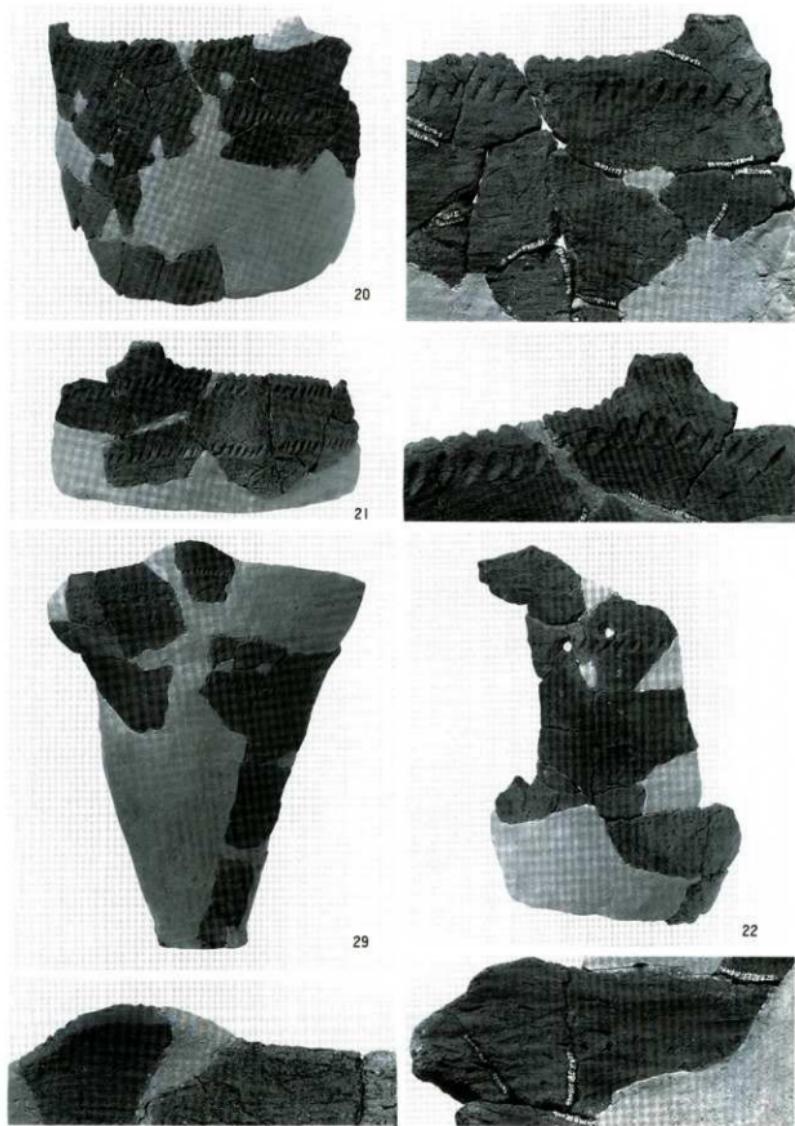
B地区 完掘（空撮）



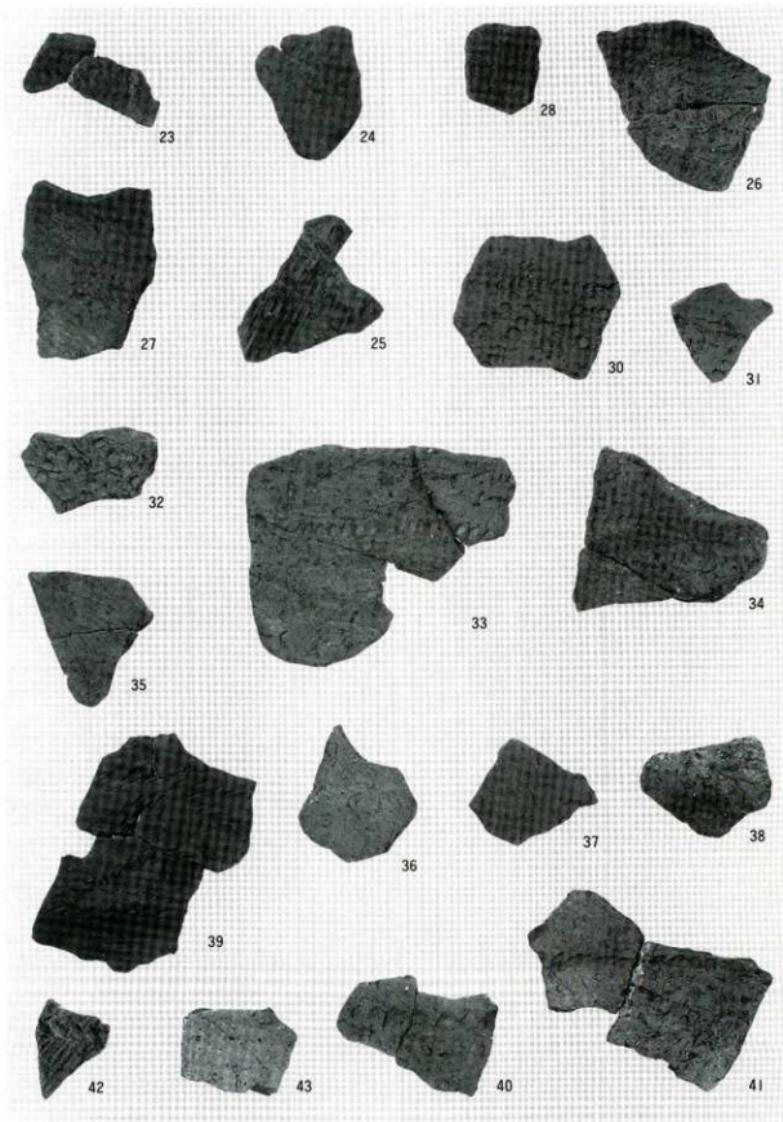
B地区 土器集中区検出状況

图版15





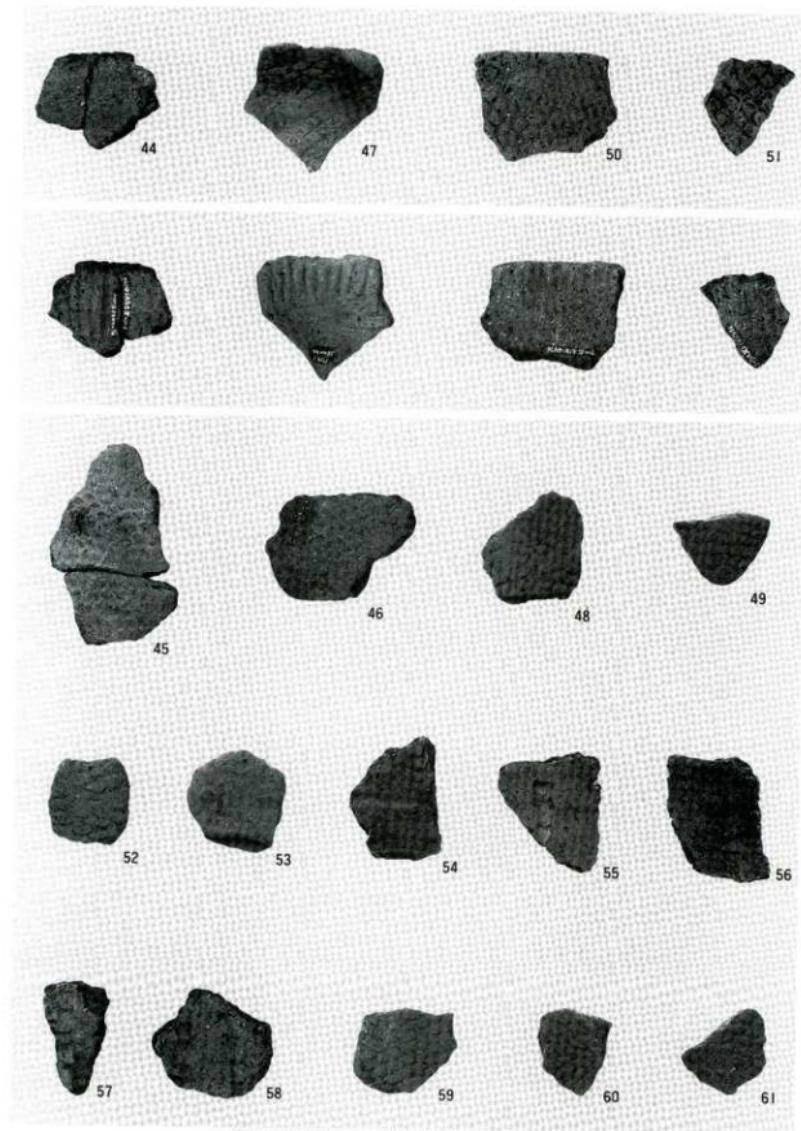
梨子谷遺跡第1C地区SU 1・2出土繩文土器（内面も含む）



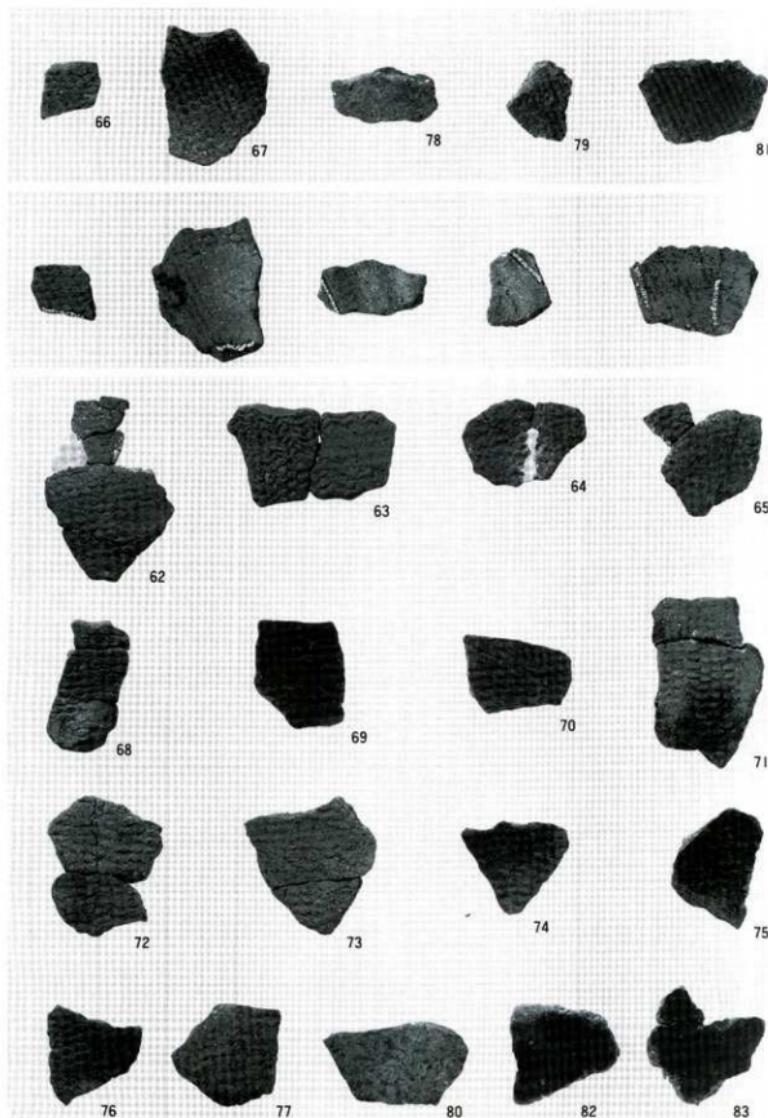
梨小谷遺跡第1C地区SU1・2およびSX1出土縄文土器



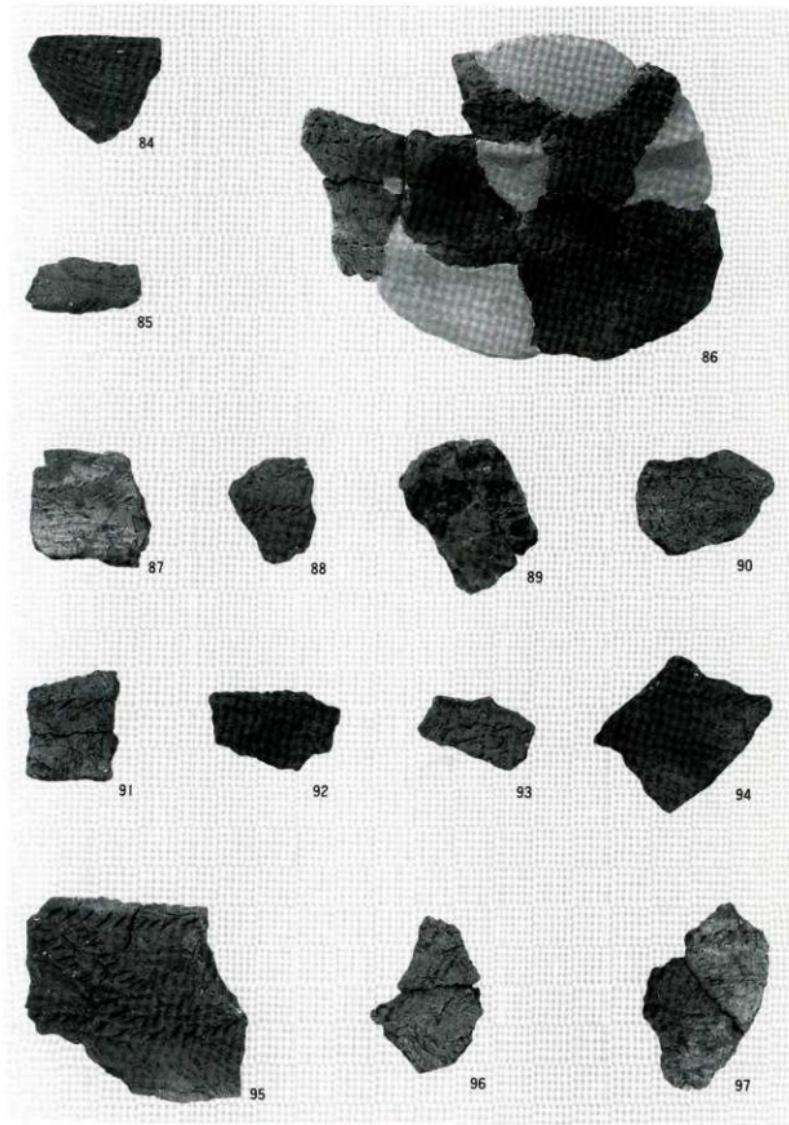
梨子谷遺跡第1C地区SU1・2およびSX1出土縄文土器（内面）



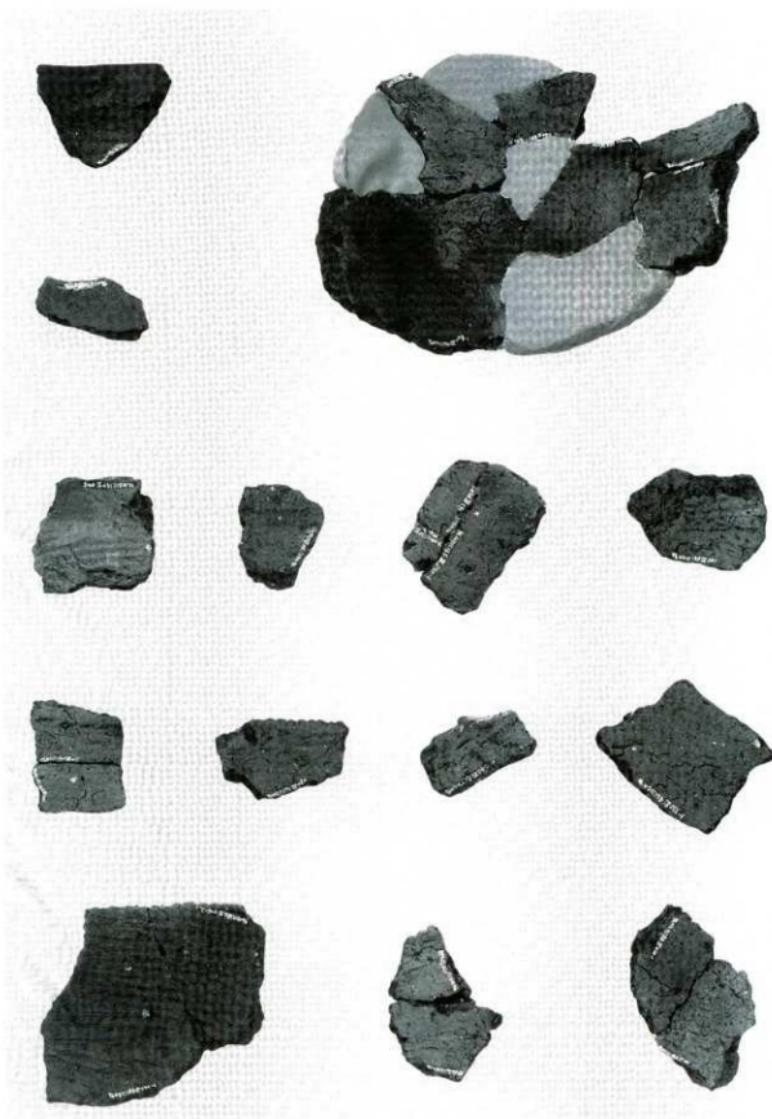
梨子谷遺跡第1A・B地區包含層出土繩文土器



梨子谷遺跡第1C地区包含層出土繩文土器（1）

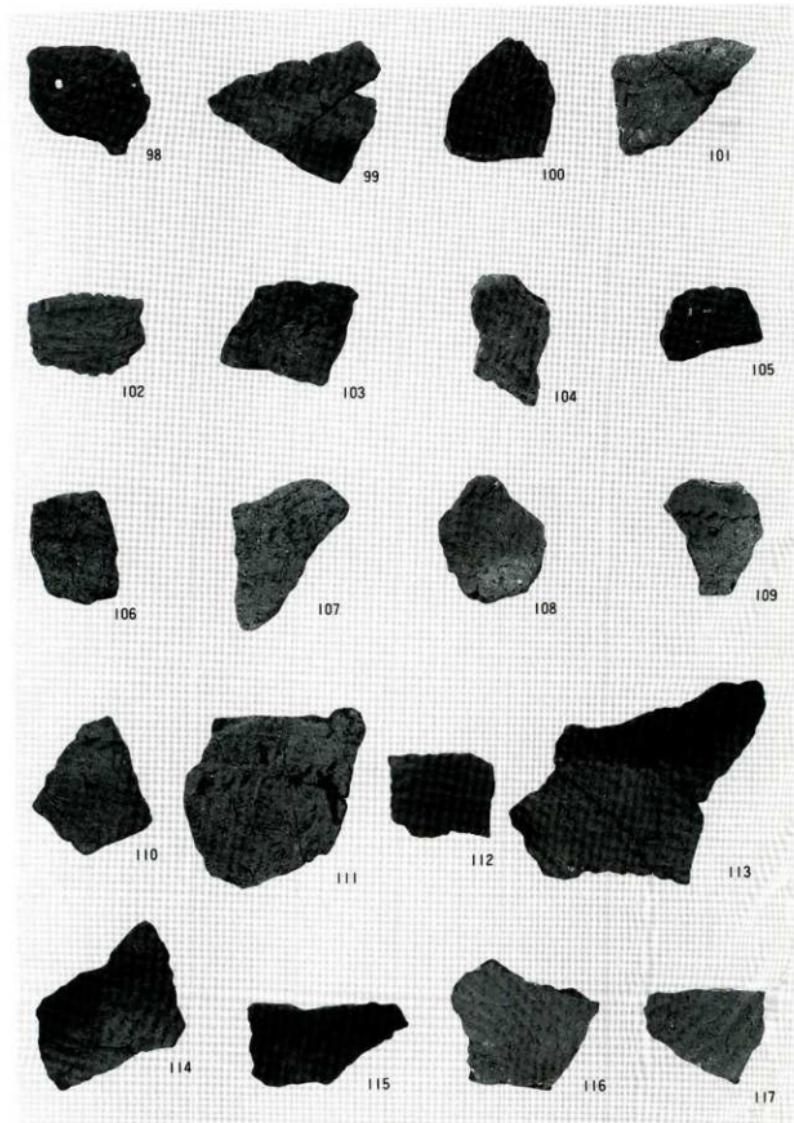


梨子谷遺跡第1C地区包含層出土繩文土器（2）外面

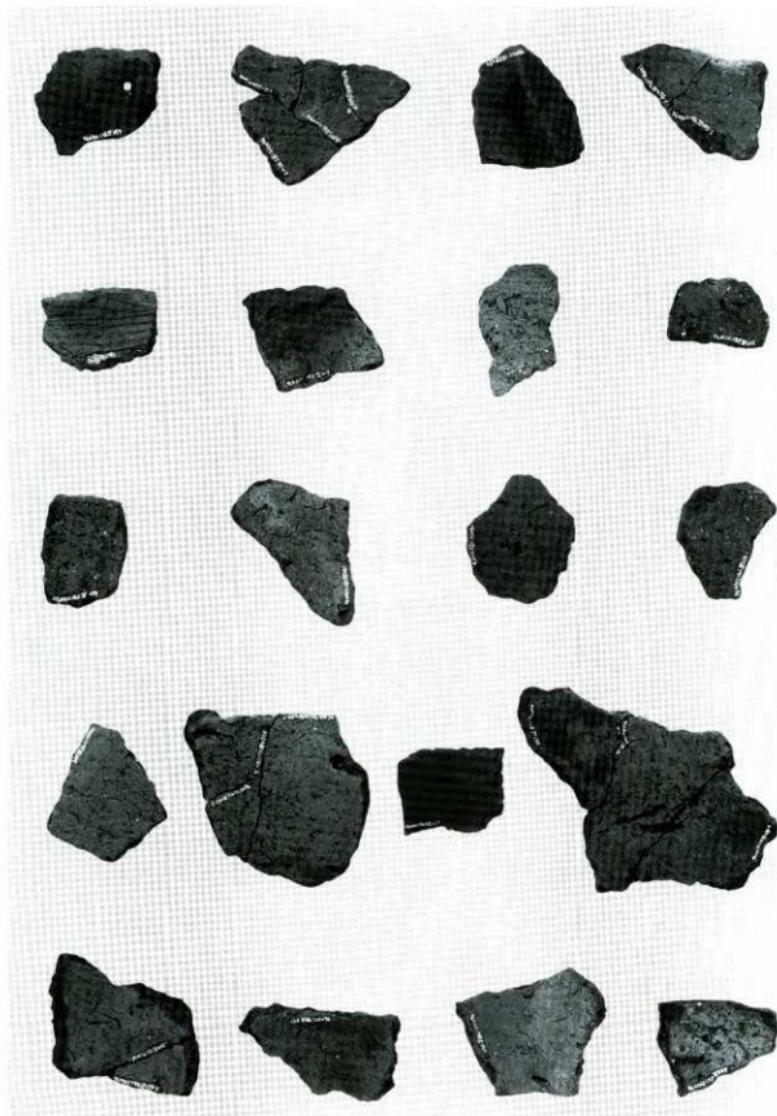


梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器（2）内面

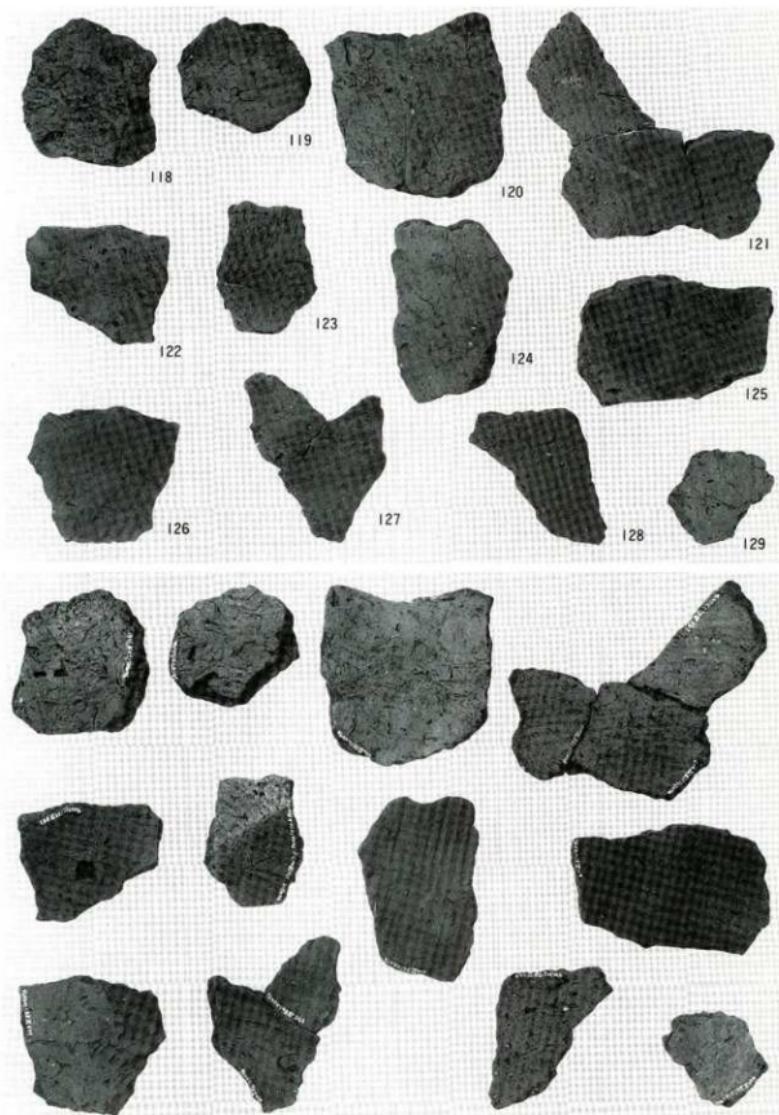
图版23



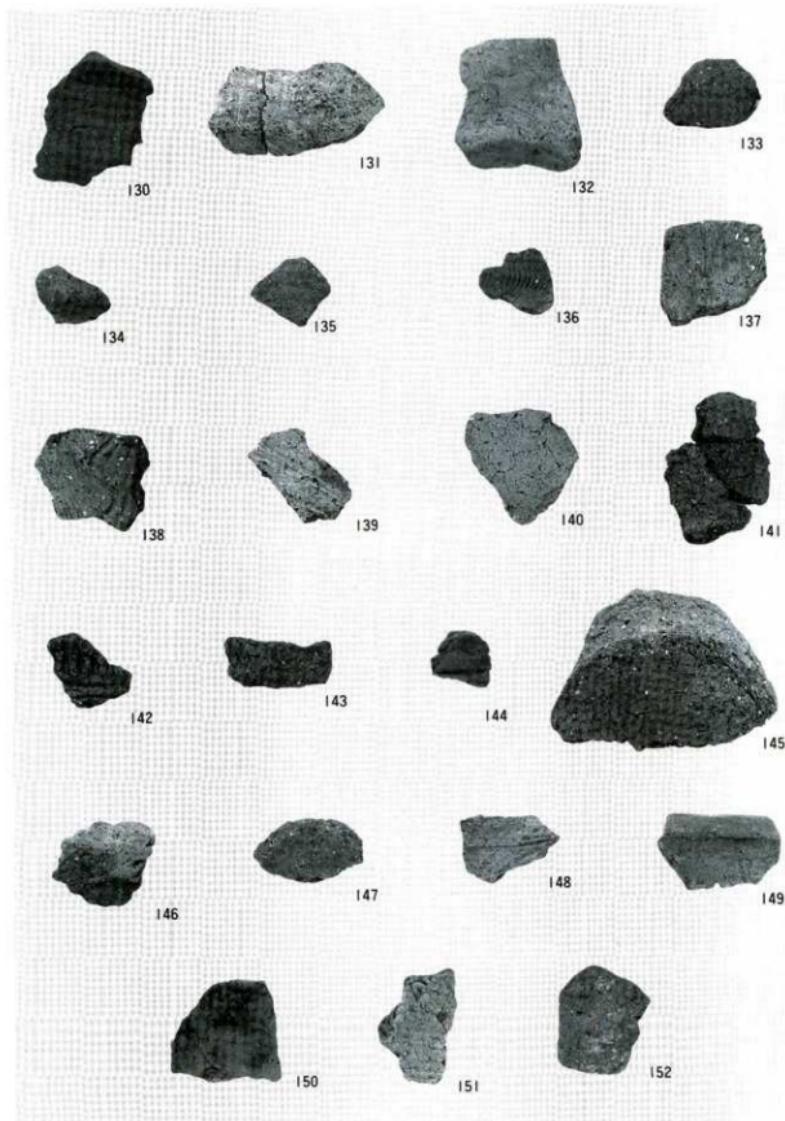
梨子谷遺跡第1C地區包含層出土繩文土器（3）外面



梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器（3）内面



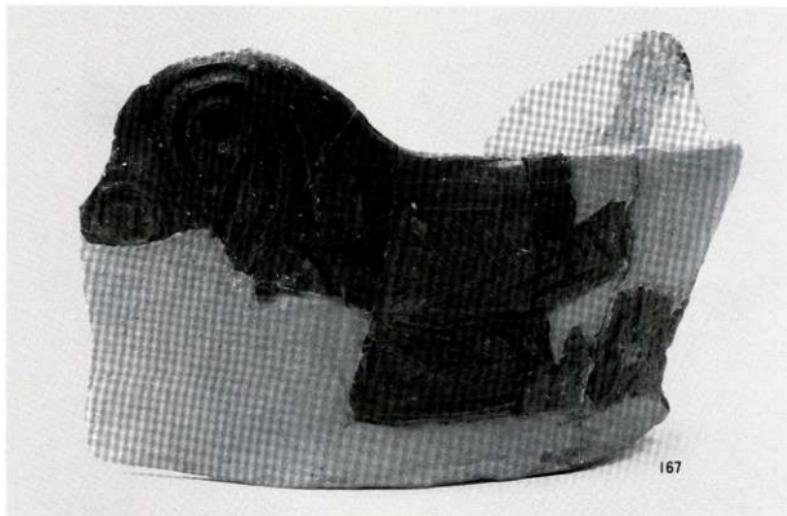
梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器（4）外面および内面



梨子谷遺跡第1C地区包含層出土縄文土器（5）

梨子谷遺跡第2地区包含層出土縄文土器

千日遺跡包含層出土縄文土器



173

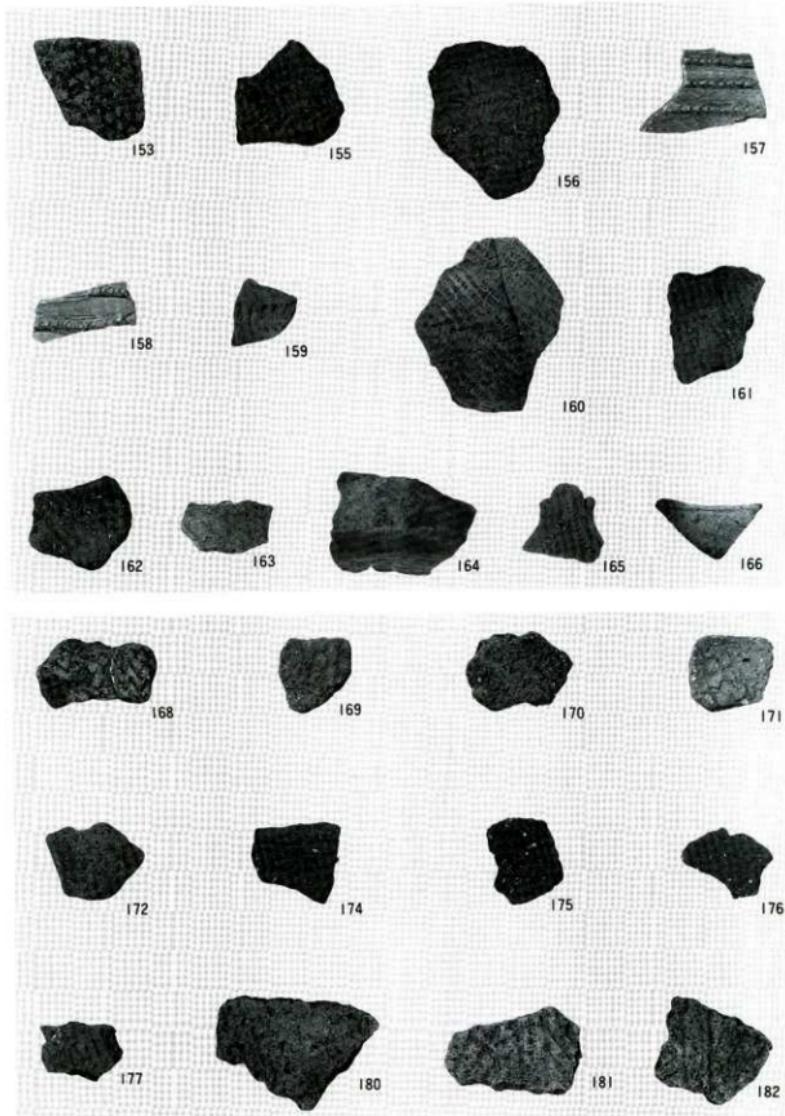


178

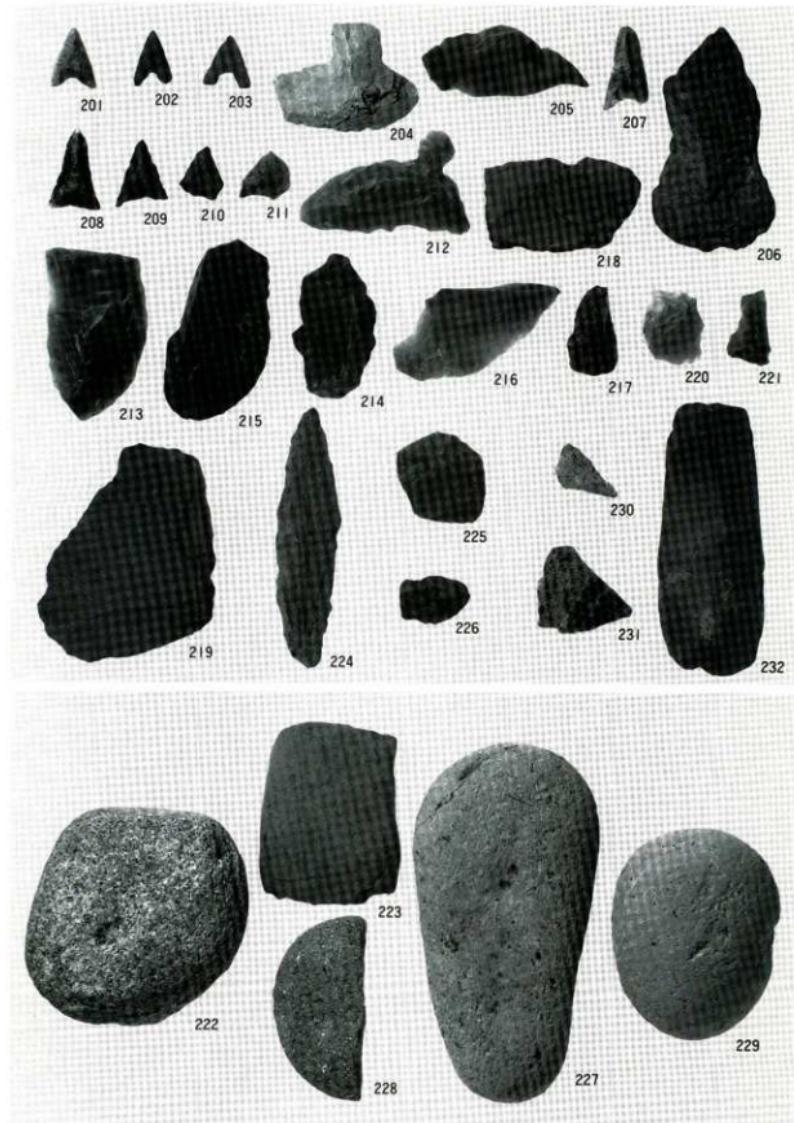


179

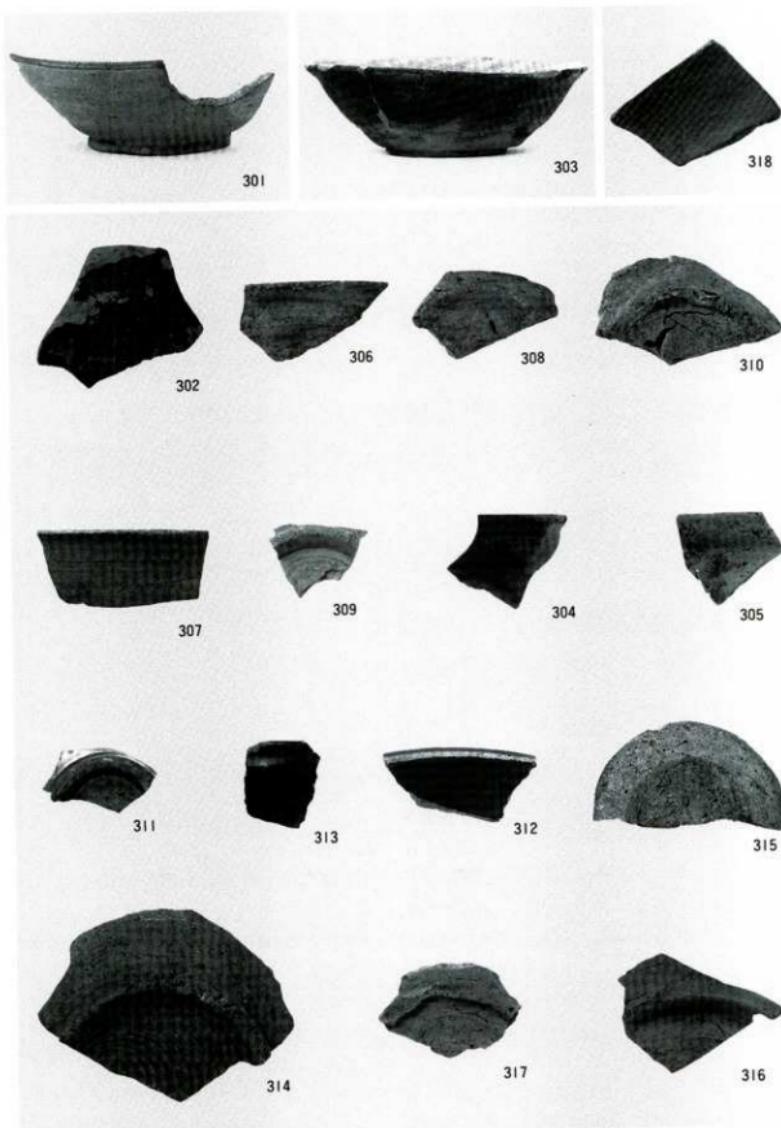
宮上遺跡 A 地区・B 地区土器集中区および包含層出土土器



宮上遺跡 A地区・B地区包含層出土縄文土器



1. 細野 梨子谷 宮上遺跡出土剝片石器
2. 細野 梨子谷 宮上遺跡出土礫石器



1 細野・梨子谷・千日・宮上遺跡出土 古代以降の土器

報告書抄録

| ふりがな 書名 副書名 卷次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月日 | ほそのいせき・なしだにいせき・せんにちいせき・みやのうえいせき 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡 県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 岐阜県文化財保護センター調査報告書 第53集 早野壽人 小野木学 増子誠 藤岡比呂志 財團法人 岐阜県文化財保護センター 〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東1丁目26番地の1 Tel058-237-8550 西暦1999年3月31日 | | | | | |
|----------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|---------------------------|----------------------------|--------------------------------------------|-----------------------------------|
| ふりがな 所取遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 |
| 細野遺跡 | 岐阜県揖斐郡 春日村 | 08723 | 35° 28' 38" | 136° 25' 38" | 19960510~ 19970205 | 県営中山間地 域農村活性化 総合整備事業 に伴う |
| 梨子谷遺跡 | 岐阜県大字美東字細野 岐阜県大字美東字梨子谷 | 08724 | 35° 28' | 136° 25' | 1256m ² | |
| 千日遺跡 | 岐阜県大字美東字千日 | 21405 08726 | 41° 35° 29' | 45" 136" 27" | 2094m ² 20m ² | |
| 宮上遺跡 | 岐阜県大字六合字宮上 | 08730 | 35° 28' 18" | 136° 29' 35" | 200m ² (3570m ²) | |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特別事項 | |
| 細野遺跡 | 集落 | 縄文時代 | 集石遺構2基 | 縄文土器・石器 | | |
| | | 室町時代 | 土器集中区1 | 山茶碗 | | |
| 梨子谷遺跡 | 集落 遺物包 藏地 | 縄文時代 室町時代 | 集石遺構6基 土器集中区2 不明遺構1 | 縄文土器・石器 土師器・須恵器 灰釉陶器 | 縄文時代早期の集石 遺構と、押型文土器・ 条痕文土器：噴砂痕 | |
| 千日遺跡 | 遺物包 藏地 | 縄文時代 室町時代 | | 縄文土器・土師器 山茶碗・常滑 | | |
| 宮上遺跡 | 遺物包 藏地 | 縄文時代 鎌倉時代 室町時代 | 土坑3 土器集中区1 | 山茶碗・須恵器 黑色土器 | | |

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第53集

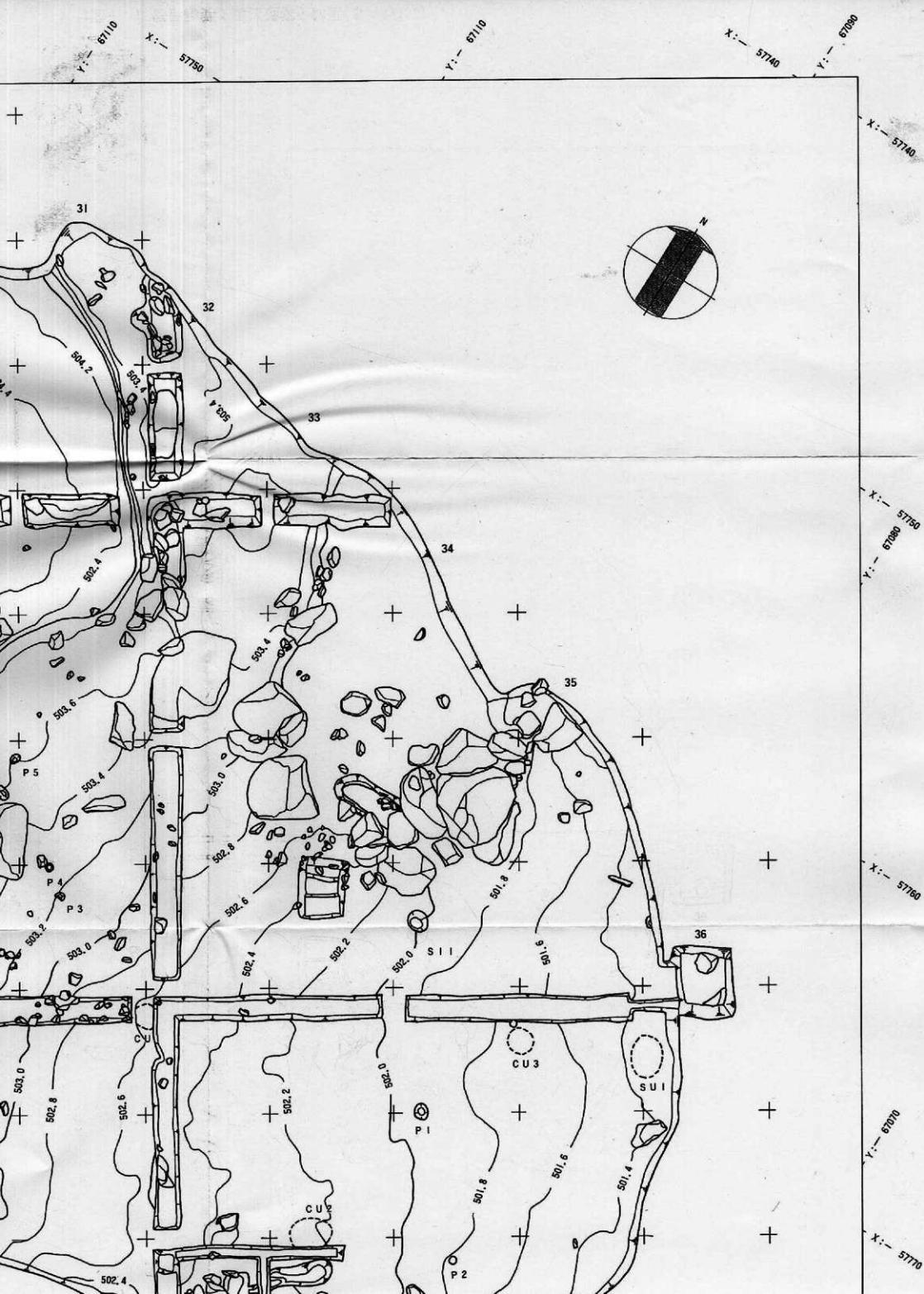
細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡

県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う緊急発掘調査報告書

1999年3月31日

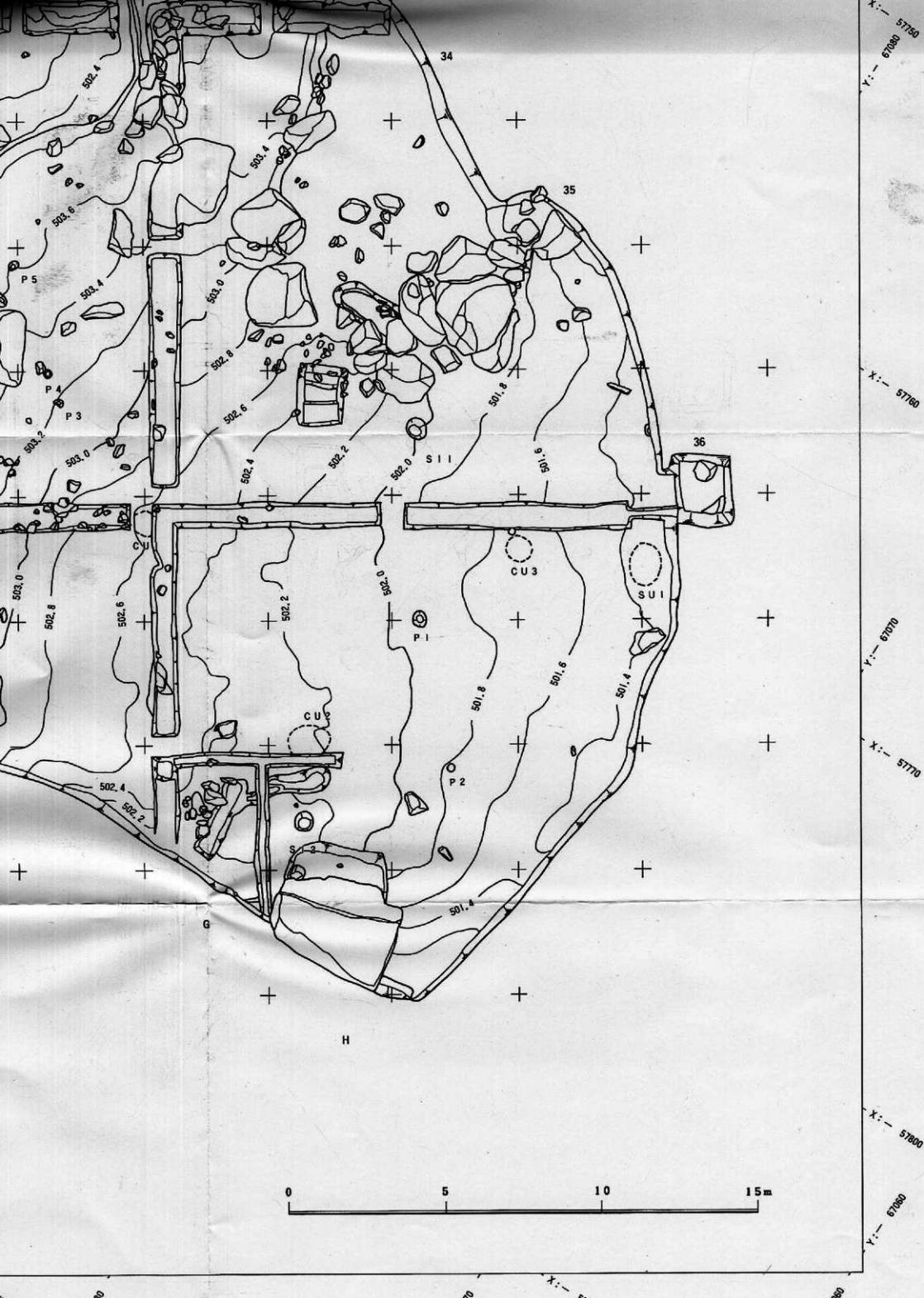
編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1丁目26番地の1
印 刷 サンメッセ株式会社







付図1 細野遺跡第2地区遺構全体図(S=1/10)



付図1 細野遺跡第2地区遺構全体図($S=1/100$)

06995 - Y

06995 - Y

06995 - Y

06995 - Y

X : -57540



X : -57550

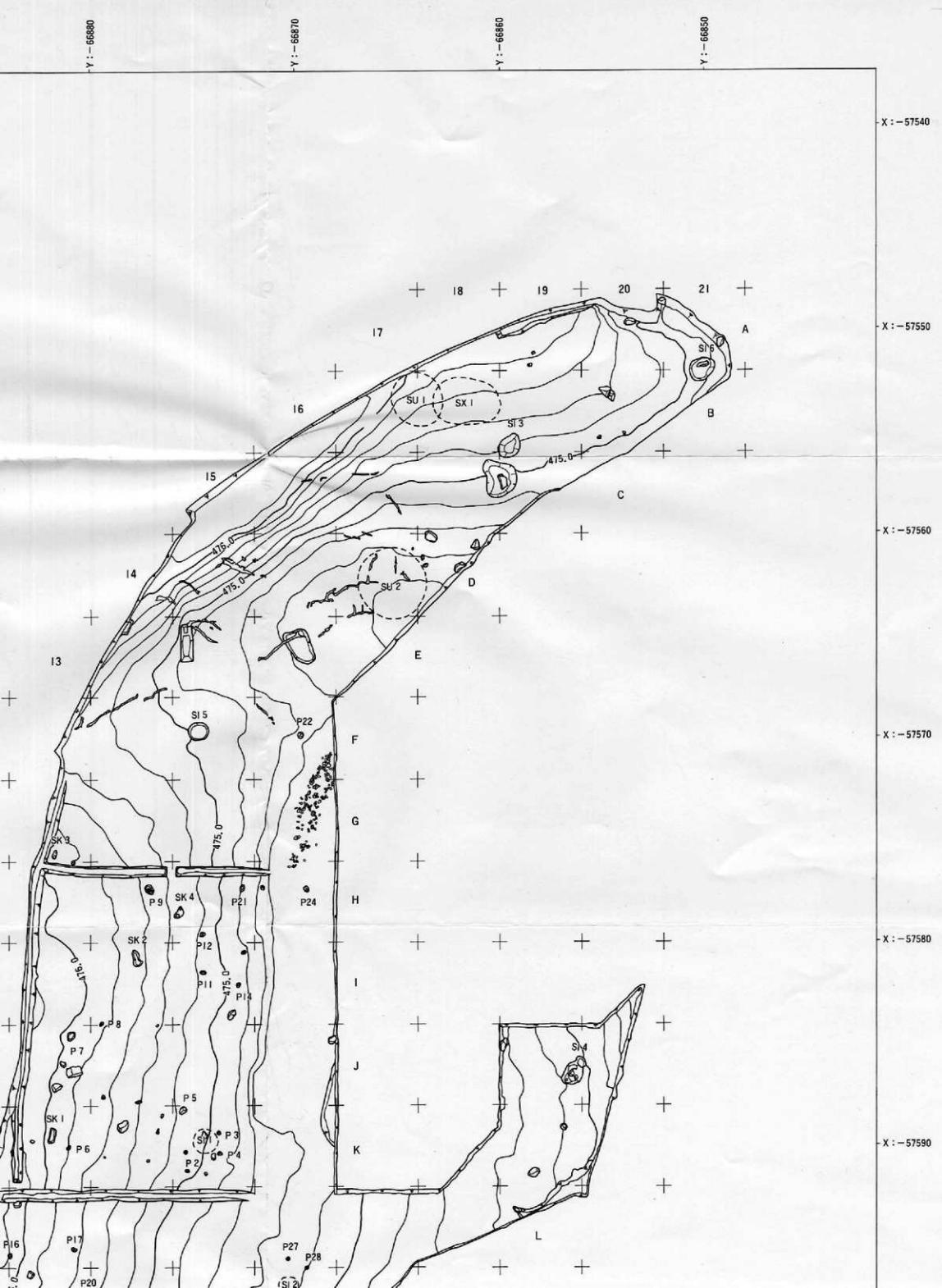
X : -57560

X : -57570

X : -57580

X : -57590





X : -57560

X : -57570

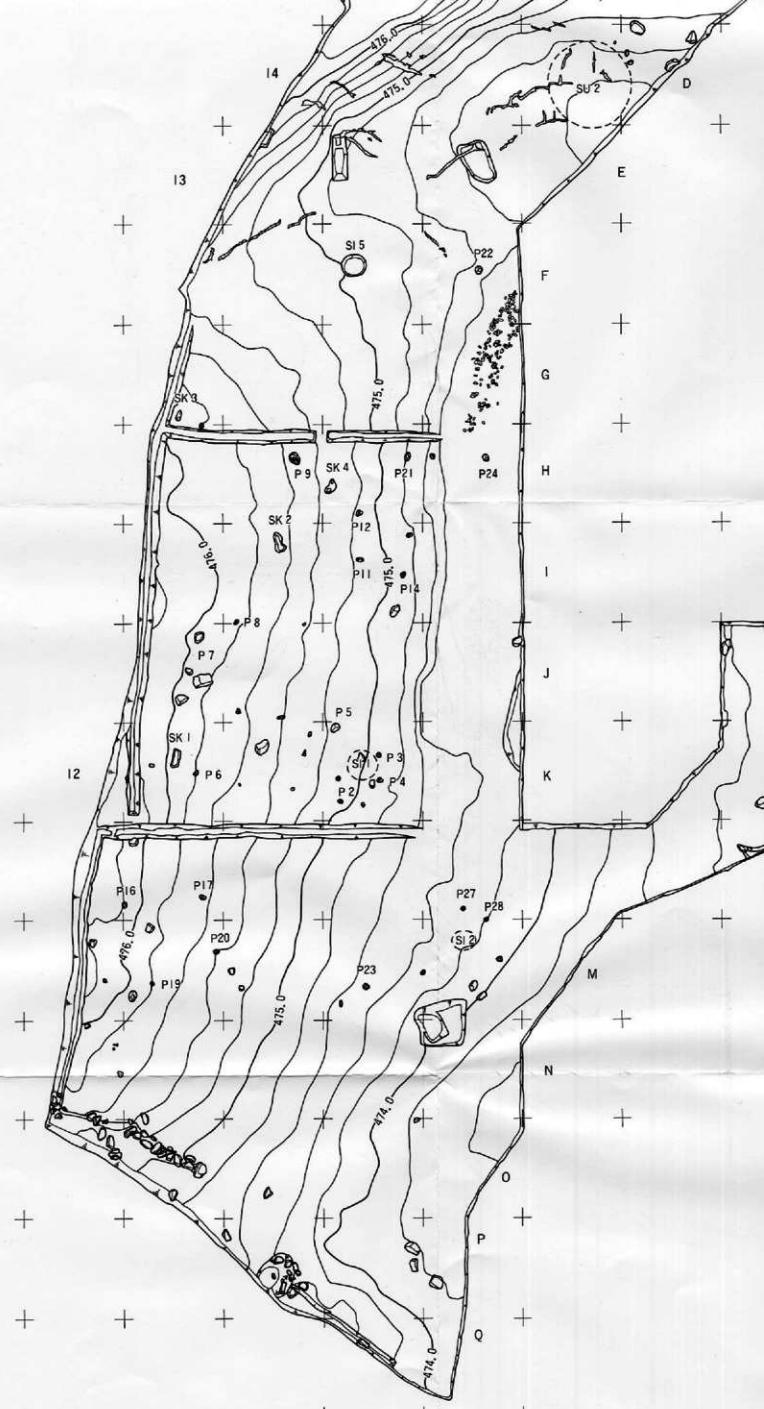
X : -57580

X : -57590

X : -57600

X : -57610

X : -57620



付図2 梨子谷遺跡第1C地区遺構図(S=1/150)

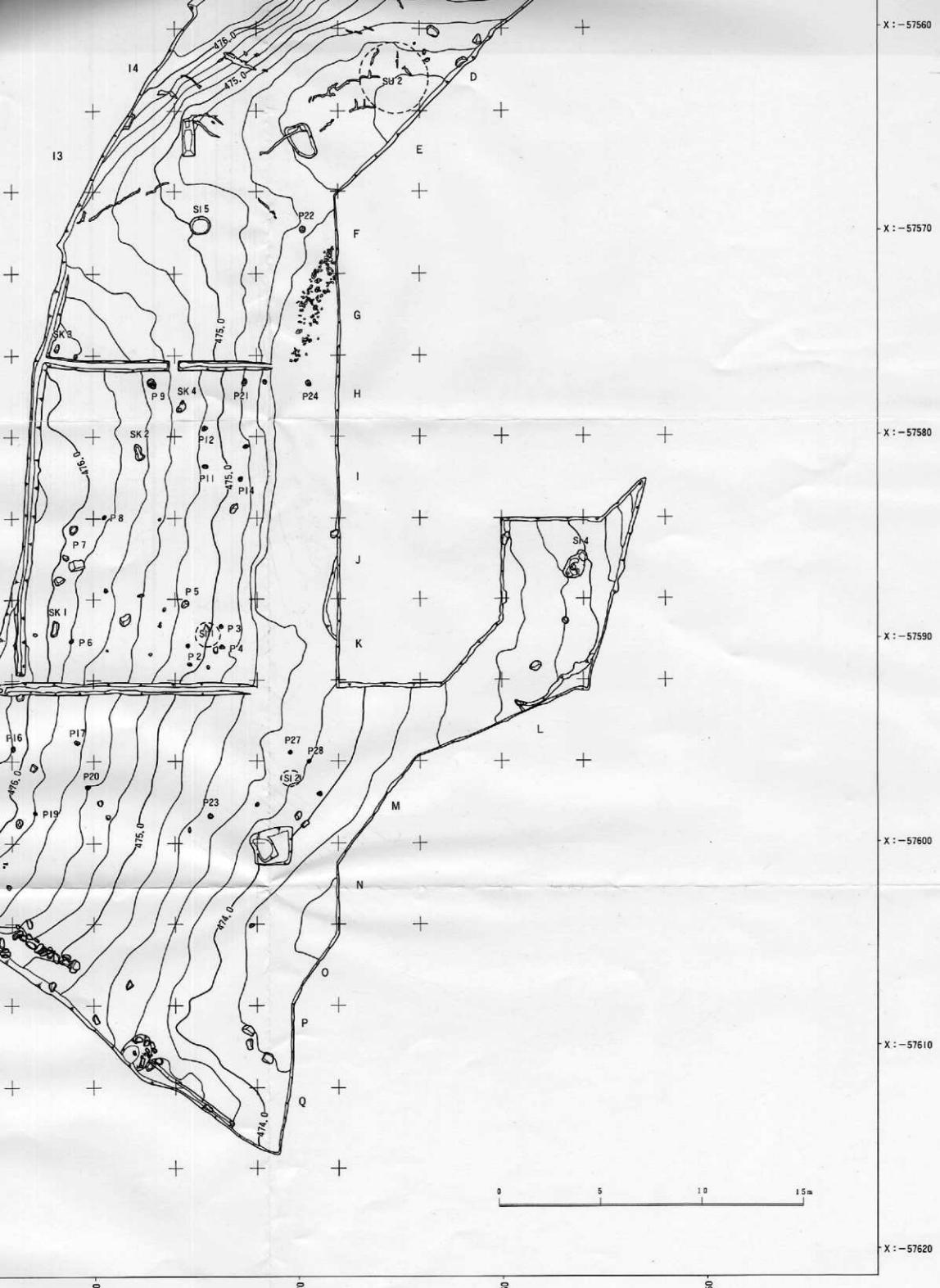
Y : -66960

Y : -66890

Y : -66880

Y : -66870

Y : -66860



付図2 梨子谷遺跡第1C地区遺構図(S=1/150)